

倉治遺跡

仮称枚方第二警察署庁舎建設に伴う調査

大阪府教育委員会

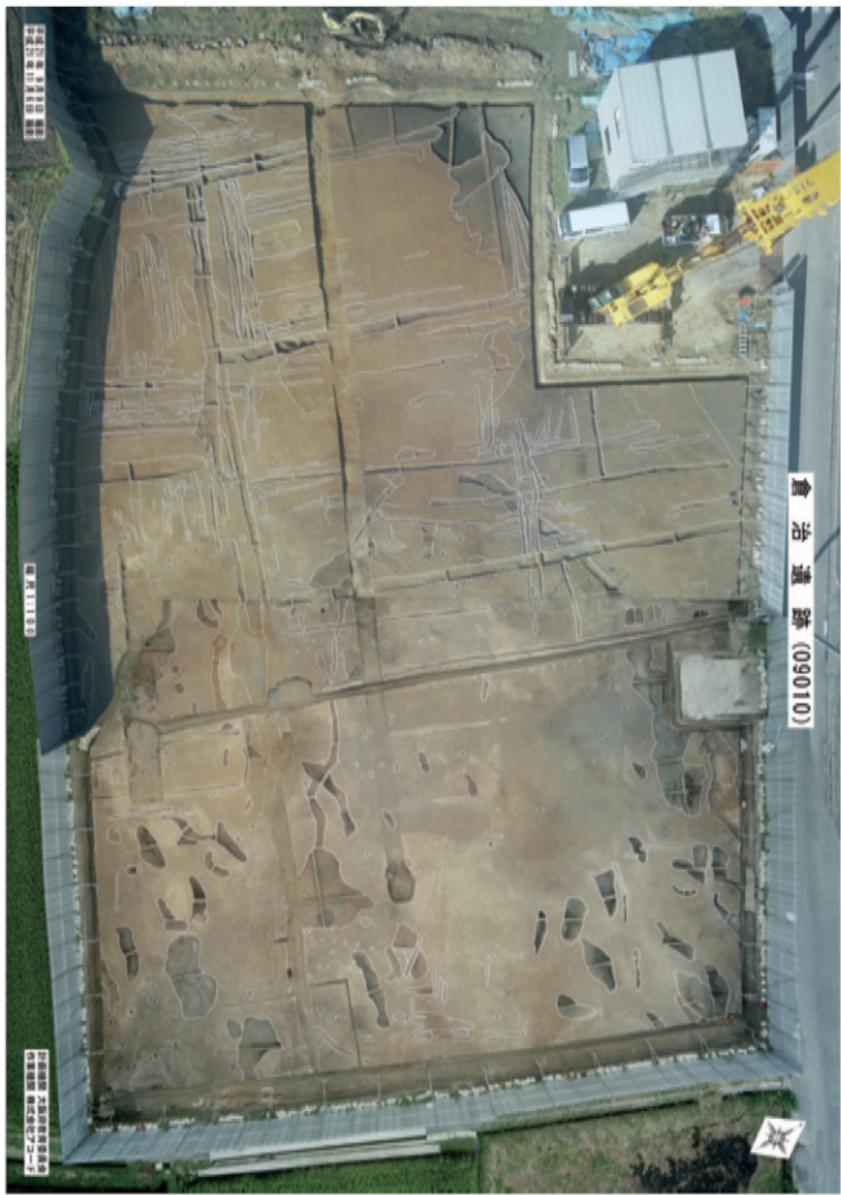
倉 治 遺 跡

仮称枚方第二警察署庁舎建設に伴う調査

大阪府教育委員会



倉治遺跡 (09010)





第I調査区 第2遺構面 土坑SK01



第I調査区 第2遺構面 掘立柱建物



第III調査区 全景調査地の西を走る府道交野久御山線



第II調査区 第2遺構面 積穴住居1 (北から)



第II調査区 第2遺構面 積穴住居1内土器出土状況から



第II調査区 第2遺構面 土坑SK2-6から

はじめに

本調査地が位置する大阪府交野市は、市域の西部は住宅地としての開発もすすむ一方で、東部から南部の山側には名勝磐船峠を擁する豊かな自然が広がっています。これらの地域は古くからの遺跡が数多くあり、旧石器時代から連錦と人類の文化が営まれ続けた地でもあります。

倉治遺跡はこれまでの調査の結果から、中世の耕作地を中心とする遺跡であることが知られていました。今回の調査は仮称枚方第二警察署の建設計画にともない実施したのですが、さらに古墳時代中期の住居跡がみつかり、倉治遺跡が長く続く遺跡であることがわかつてきました。

このような埋蔵文化財の調査成果は、展示公開などの活用を進めることで、地域の皆様がより豊かで質の高い文化環境を積極的に創出するための一助として役立てていけるものと信じております。

調査の実施にあたっては、大阪府警本部、交野市教育委員会、(財)交野市文化事業財団、地元自治会各位をはじめとする多くの関係者の方々にご協力いただきました。深く感謝するとともに、今後ともこの地における文化財保護行政にご理解、ご協力をお願いする次第であります。

平成23年3月

大阪府教育委員会事務局

文化財保護課長 野口 雅昭

例　言

1.　本書は、大阪府教育委員会が大阪府警本部の依頼を受け、文化財保護課が平成21年度事業として担当・実施した仮称枚方第二警察署庁舎建設工事に伴う、交野市倉治に所在する倉治遺跡の発掘調査の報告である。調査番号は09010である。
2.　調査は、文化財保護課　調査第一グループ技師　小川裕見子（現・指定文化財グループ副主査）が担当し、遺物整理は、調査管理グループ主査　三宅正浩、副主査　藤田道子が担当した。
3.　調査に要した経費は、大阪府警本部が負担した。
4.　調査の実施にあたっては、大阪府警本部、交野市教育委員会、財団法人　交野市文化財事業団、地元自治会をはじめとする諸機関、諸氏の協力を得た。
5.　本書の編集は、小川が担当し、執筆は調査担当者及び参加者等が分担した。文責は各々文末に記した。
6.　本書に掲載した遺物写真の撮影は、有限会社　阿南写真工房に委託した。また、航空写真測量については株式会社　アコードに委託した。
7.　本調査において採集した土壌サンプルの花粉・珪藻分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
8.　本報告書は、300部を作成し、一部あたりの単価は1061円である。

目 次

卷頭図版

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 倉治遺跡の立地と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の手順と概要	13
第4章 基本層序	15
第1節 調査区の基本層序	15
第2節 小結	23
第5章 各遺構面の調査成果	25
第1節 中世以降の遺構	25
第2節 古墳時代の遺構	33
第6章 出土遺物について	49
第1節 主だった遺構からの出土土器（古墳時代）	49
第2節 その他の出土土器について（中世以降）	59
第3節 その他の出土遺物について	66
第7章 まとめ	67
付論 倉治遺跡微化石分析報告	73

写真図版

報告書抄録

挿図・表目次

挿図目次

図 1	大阪府仮称第二枚方警察署庁舎建設工事対象範囲図	1
図 2	交野市域周辺の地形模式図	3
図 3	倉治遺跡周辺の遺跡分布	6
図 4	倉治遺跡平成 21 年度調査 調査範囲地区割り図	13
図 5	第 I ・ II 調査区 北壁断面図	17・18
図 6	第 I 調査区 南壁断面図	19・20
図 7	第 II 調査区 西壁断面図	21・22
図 8	倉治遺跡平成 21 年度調査 基本層序模式図	23
図 9	第 I 調査区第 1 遺構面 遺構平面図	26
図 10	第 I 調査区第 1 遺構面 遺構断面図	27
図 11	第 I 調査区第 2 遺構面 掘立柱建物 遺構平面・断面図	28
図 12	第 I 調査区第 2 遺構面 土坑 SK01 遺構平面・断面図	29
図 13	第 I ・ II 調査区第 2 ・ 2 上遺構面 遺構平面図	31・32
図 14	第 II 調査区第 2 遺構面 竪穴住居 1 土器検出状況	34
図 15	第 II 調査区第 2 遺構面 竪穴住居 1 下層	35
図 16	第 II 調査区第 2 遺構面 竪穴住居 2 貼床面	36
図 17	第 II 調査区第 2 遺構面 竪穴住居 2 下層	37
図 18	第 II 調査区第 2 遺構面 土坑 SK 2-6 土器出土状況図	38
図 19	第 II 調査区第 2 遺構面 土坑 SK 2-6 遺構平面図	39
図 20	第 II 調査区第 2 遺構面 遺構平面図	41・42
図 21	第 II 調査区第 2 遺構面 谷 遺構断面図	44
図 22	第 II 調査区第 2 遺構面 谷 測量図	45・46
図 23	第 II 調査区第 2 遺構面 谷 木製品出土状況図	47
図 24	竪穴住居 1 出土土器	50
図 25	竪穴住居 2 出土土器	51
図 26	土坑 SK 2-6 出土土器	52
図 27	谷他 出土土器	54
図 28	淡灰褐色砂 出土土器	59
図 29	その他の遺構内 出土土器	60
図 30	土師器	61
図 31	瓦器	62

図 32	白磁	62
図 33	第 I・II・III 調査区 遺構配置・復原図	69・70
図 34	花粉化石群集の層位分布	76

挿表目次

表 1	出土土器観察表 古墳時代	57
表 2	出土土器観察表 中世以降（1）	64
表 3	出土土器観察表 中世以降（2）	65
表 4	花粉分析結果	75
表 5	種実分析結果	77

第1章 調査に至る経緯

本調査は大阪府仮称第二枚方警察署建設工事に伴うもので、平成21年6月から同12月まで、約3,500m²の範囲にわたって埋蔵文化財の発掘調査をおこなった。

本調査地の位置する交野市域は現在、枚方市及び交野市を管轄区域とする大阪府枚方警察署管内にあり、交野市域には警察署はない。この状態で管轄面積は約90km²と大阪府下64警察中第6位である。そのうえ大阪中心部の近郊住宅都市として急速に開発がすすみ、管内人口は約48万人と府下同中第1位となっている。取り扱い業務についても、平成17年度調べでは、刑法犯罪認知件数は同中第2位、交通事故件数及び110番受理件数は同中第1位である（註1）。この状況は、府民の期待に充分応える処理能力をはるかに越えて厳しい状況にあると判断した大阪府警本部は、管轄区域を分割する大阪府第二枚方警察署（仮称）の新設計画を立てた（註2）。この件は、枚方・交野両市からも当該地域の二署体制についての要望は長くあり、また大阪府議会からも要望があった。

警察任務を能率的に遂行できる管轄区を設定するために、国道1号線から府道枚方交野寝屋川線を経て枚方市・交野市行政境界線として、枚方市東部及び交野市全域を新設される大阪府第二枚方警察署（仮称）の管轄区とすることが計画された（註3）。これは、現行の枚方警察署の管轄区域と比較して、面積が約55%、人口約35%、事件事故件数約30%となる見込みである。庁舎建設予定地は、府民の利便性の向上と警察の機動力の確保に適した場所が選ばれた。管轄区



図1 大阪府仮称第二枚方警察署庁舎建設工事対象範囲図

のほぼ中央にあり、ＪＲ学研都市線津田駅から南へ約1kmの府道交野久御山線沿いに位置し、しかも第2京阪国道へのアクセスが容易である、交野市倉治1丁目地内の当該地に決定された。しかしながら新庁舎建設予定地は、利便性とともに周辺に数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）を擁する地域に位置し、当該地自身も周知の埋蔵文化財包蔵地、倉治遺跡の範囲内にあたる（註4）。平成19年度に用地取得及び基本計画を実施した後、平成20年度の基本設計にあたって、大阪府警本部施設課より大阪府教育委員会事務局文化財保護課が依頼を受けて、庁舎建設予定敷地内の遺構・遺物の包蔵状況を調査するため、確認調査を実施した。

確認調査は大阪府教育委員会事務局文化財保護課調査第1グループ主査・小林義孝が、平成20年10月6日～9日の4日間にわたっておこなった。当該敷地内に、幅1m×長さ60m、幅2m×長さ10mの2ヶ所のトレンチを設定し、機械及び人力により掘削、地層の変化、遺構・遺物の有無及びその検出深度を確認する目的で実施した。その結果、古墳時代～中世の遺物包含層が確認でき、トレンチの全域から土坑やピット等の遺構を検出した。また、複数の時代の遺跡が重複して存在することを確認したため、庁舎建設にあたっては、事前に発掘調査が必要であるとの判断をした。

その後協議を重ね、平成21年度の実施設計にあたって約3,000m²にわたって今回の発掘調査を実施した。現地での発掘調査は、平成21年6月30日～同12月26日まで実施し、その後平成21年度から翌22年度にわたって、出土遺物や調査時の図面・写真等の記録の整理をおこない、本報告書の刊行に至る。

平成22年度より新庁舎建設工事を開始し、平成24年度には、のべ床面約5,500～6,000m²、鉄筋コンクリート造5階建ての新庁舎が完成する予定である。

（小川 裕見子）

（註1） 下記URL大阪府ホームページによる（2011年1月10日現在）

[http://www.pref.osaka.jp/attach/9248/00045102/05cyosyo_\(dai2hirakata\).pdf](http://www.pref.osaka.jp/attach/9248/00045102/05cyosyo_(dai2hirakata).pdf)

（註2） 下記URL大阪府ホームページによる（2011年1月10日現在）

<http://www.pref.osaka.jp/attach/9248/00045098/6-1%20dai2hirakata-keisatsu.pdf>

（註3） 以下、警察関連の統計・計画はすべて前掲註1）及び2）による。

（註4） 周辺の遺跡についての詳細は次章を参照されたい。

第2章 倉治遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

交野市は大阪府の北東部に位置する。市域は北から東にかけては枚方市、奈良県生駒市と接し、南は大阪府寝屋川市、四條畷市と接する。その地形は山地部、洪積台地部、沖積平野部の大きく3つに区分でき、倉治遺跡はその洪積台地部にあたる。市域の大半は、生駒山地の一角をなす交野山地からなる。

倉治遺跡は生駒山地の北端に位置する交野山の西麓に所在し、東から西へ傾斜する低位段丘堆積層上に位置する。交野市の東半部から南半部は生駒山系に連なる花崗岩質の山地であり、標高300m以上の交野山、竜王山、旗振山などが並び立つ。交野山地は花崗岩類でできているため、扁状地は花崗岩の風化した砂層が堆積したものである。交野山地の花崗岩は風化が著しい。

枚方・交野両市域ではこれらの山々を源に、船橋川、穂谷川、天野川が東から北西方向へ向かって流れ、淀川に注ぐ。交野市域では南川、北川をはじめ、免除川、がらと川などが北西の平野部に平行して流れ、天野川に注ぐ（註1）。これらの河川の流水量は、降雨時を除けば概して少なく、枯れ川の状況を呈することが多い。天野川下流域以外は河川による沖積平野の形成は未発達である。対岸の三島地域は、淀川へ向かって徐々に標高を減じているが、それに対して交野台地

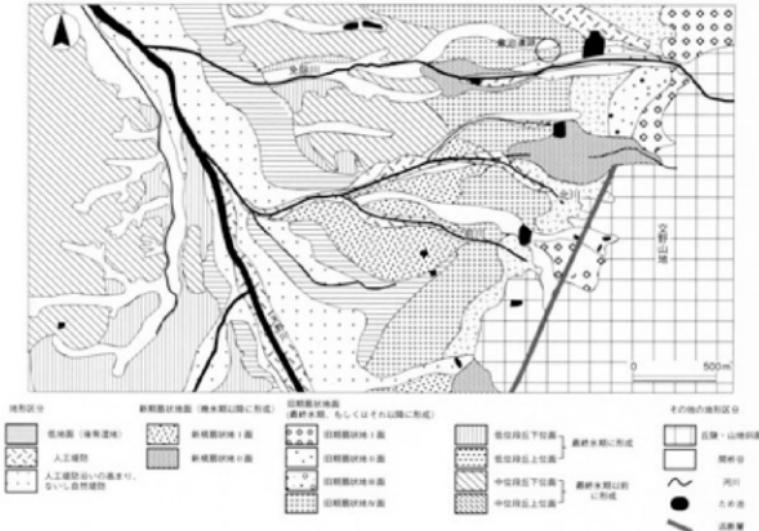


図2 交野市域周辺の地形模式図

財団法人大阪府文化財センター 2008年『倉治遺跡』より転載

側は、ところによっては崖面を形成するほど、淀川近くで急激に標高を減じる。この地形的特徴から、かつての淀川流路は現在よりも交野台地近くを流れていたものと推測される（註2）。

交野市の古くからの集落は、ほとんどがこれらの川沿いに分布しており、標高20m前後の台上には郡津・私部の集落、標高50m前後の山麓には神宮寺・寺・森・私市などの集落がある。これらの中位に倉治・星田の集落は位置する。倉治の集落は天井川である、がらと川、免除川に囲まれた地域である。現在の倉治の集落の山手にある変電所の上方は傾斜のきつい扇状地で、そこを境に緩やかに西に下っていく。

倉治地域は谷川の水や扇状地末端の湧水などが利用できるためか、ため池の数が少ない。調査区の東では扇状地末端部の湧水をためた松塚下池・上池と河川の湧水を利用した源氏池が、南では大池と呼ばれる溜池が主なものである（註3）。

主要交通路としては、枚方宿東端の岡から天野川沿いを通り、磐船峠を経て生駒市北田原で清滝街道と交差する磐船街道（現・国道168号線）や、京都府八幡市志水町から南下し、河内国御跡が所在する藤井寺市国府へ至る東高野街道（現府道枚方一富田林一泉佐野線）などの他、寺・傍示集落を経て大和へ入る童王山越の峠道（傍示越）や、山地の村々をつないだ山根道などもあった。なお、東高野街道を境界にして東側が交野市域、西側が枚方市域にあたる。東高野街道は長岡京以後の南海道であるが、四條畷から妙見山山裾を北上して交野へ入るこの道は、古墳時代以来人々の往来が盛んな古道であった（註4）。

交野の山々は弥生時代頃までは森林に覆われていたが、古墳時代以降木材の消費が著しく、平安時代の中頃までに、ほとんどが禿山となっていたと言われる（註5）。緑を取り戻したのは明治時代以降のことである。また、交野山一帯がもろい花崗岩地帯であることもあり、山麓の集落は土砂によって押し流されたりもした。そのため、安全な場所を求めて今の地に集落が形成されるようになったのであろう（註6）。

（森 真奈美）

（註1） 財團法人大阪府文化財センター『東倉治遺跡』I 2004年

（註2） 大阪府教育委員会『九頭神遺跡』 2010年

（註3） 交野市『交野市史』自然編I 1986年

（註4） 財團法人大阪府文化財センター『有池遺跡』I 2007年

（註5） 交野市『交野市史』考古編 1992年

（註6） 前掲註2 参照

第2節 歴史的環境

倉治遺跡は古くから、弥生時代から中世にかけての遺物が散布していることで知られていたが、免除川右岸はこれまであまり調査されてこなかった。平成12年の交野市教育委員会による試掘調査により、今回の調査地東側で中世土師器片2点と瓦器1点が検出された（註1）。2007年から2009年に行われた財團法人大阪府文化財センターによる調査では、古墳時代から中世に比定できる土器類が中心に出土した。しかし、遺構が形成される過程で流入した水によってできた不整形の落ち込みから出土しているため、これらは近隣から流入したものと推測される。このときには、集落跡など遺構の集中する様子はどの時代のものも確認することができなかった。しかしながら、沼状遺構の土が長く大気に触れていた可能性がある堆積土であったことなどから、中世以降の耕作地の一部が確認された。さらに、下層の堆積土も沼状遺構の堆積層と類似しており、中世を遡る耕作地の存在も確認された（註2）。

交野市域には多くの遺跡が存在し、古くは旧石器時代にまで遡るものもある。ここでは倉治遺跡周辺を中心に、遺跡の周辺環境の概略を時系列に述べたい。

旧石器時代

神宮寺遺跡は、本調査地の南方約600mに位置し、旧石器時代のナイフ形石器や握斧が出土している。また、1957（昭和32）年の交野考古学会の調査によって、縄文時代早期の編年標識となった神宮寺式土器が出土している（註3）。

その西に位置する布懸遺跡ではナイフ形石器や削器など、128点もの旧石器が発見された。そのうち碎片が85点にのぼり、この遺跡がナイフ形石器製作場所であった可能性が高い（註4）。

縄文時代

本調査を行った倉治遺跡の西側に位置する焼垣内遺跡からは、縄文時代晩期の滋賀里式土器と同時期のものと推定される土器が数点出土している。また、府道交野久御山線が免除川を越える北側の地点では、埴輪片が出土しており、周辺に古墳の存在もうかがえる（註5）。

星田旭遺跡では縄文時代中期の土器が出土し、南に隣接する寝屋川市の讚良川遺跡でも同のタイプの土器が出土している（註6）。交野市域の南東部の南山遺跡・寺村遺跡ではサヌカイト製の石器が出土している（註7）。

弥生時代

弥生時代における交野市域の遺跡は、その遺跡のある場所の地形によって、

- ① 天野川流域の河川敷の湾入部低地を利用した地域
- ② 天野川に面した台地先端部
- ③ 交野山の急斜面が傾斜変換した台地部
- ④ 交野山系の高所

の4つに分けることができる（註8）。

①に当てはまる中でも代表的な私部南遺跡は、縄文時代から中世にかけての集落・生産遺跡で



図3 倉治遺跡周辺の遺跡分布

財団法人大阪府文化財センター 2008年『讚良郡条里遺跡、寝屋川南遺跡、寝屋東遺跡、倉治遺跡、津田城遺跡』より加筆、転載

ある。弥生時代以前のものでも、縄文時代の土坑からは滋賀里式の土器が、流路に堆積した砂礫層からは浅鉢が出土している（註9）。2008年の調査で見つかった弥生時代の遺構では井戸や溝が、古墳時代から飛鳥時代の遺構では水田跡などが検出された。また、弥生時代と古墳時代の竪穴建物、古墳時代から奈良時代の掘立柱建物も見つかっている。縄文時代晚期中葉に遡る遺構・遺物が良好に残存している一方で、北河内では希少な事例である弥生時代前期の住居跡が確認された。また、シガラミや滑石製の子持ち勾玉が出土した。天野川流域においても弥生時代のごく早い段階に、弥生時代文化の受容がおこったと考えられる。

②に当てはまる、天野川東岸に面する台地上の森遺跡は、鍛冶業を行った生産遺跡として知られる。ここでは石包丁が出土するにもかかわらず、サヌカイトやその他の石器がほぼ見られないことから、弥生時代中期に始まり、弥生時代後期～古墳時代に発展した遺跡であると考えられている（註10）。集落内における居住域と工作域が分かれはじめた頃である平安時代に、古墳時代の遺構が削平されたのだろう。10世紀ごろの土器が出土し、石清水八幡宮の三宅山莊園に該当すると考えられる遺構が初めて検出された。鉄生産は古墳時代から飛鳥時代頃まで行われていたようである。鉄生産の終焉と同じ頃に森遺跡自体も消滅したと考えられる。（註11）

同じく②にあたる私部城跡では環濠が検出されており、その中に弥生時代中期の石器・土器が廃棄されていた。弥生時代環濠集落の一例として極めて重要な例であると考えられている（註12）。

天田神社遺跡は③にあたり、緩やかな舌状台地上に位置する。鉢形土器の破片が出土し、弥生時代中期から古墳時代後期まで続く集落遺跡であることが判明した（註13）。

④にあたる南山遺跡は標高215mに位置する高地性集落である。他の交野市域における弥生時代の遺跡とは異なり、監視・通信などの機能をもつと考えられているが、出土遺物は平地の遺跡と様相の変わらない土器が見つかっている（註14）。

古墳時代～飛鳥時代

古墳時代に入ると交野市域でも前期から、集落のみでなく古墳が築造される。中でも前期の代表的な古墳は、森古墳群である。1981・82（昭和56・57）年に調査が行われ、前方後円墳4基、円墳1基から成る一群であることが分かった。この古墳群は妙見山からJR河内磐船駅に向かう、いくつかの尾根の丘陵上に位置する。第1号墳が全長106m、前方部が撥形に開き、高い後円部と低い前方部を持つことなどから、群内最古の古墳と考えられる。また、古墳群全体としても4世紀代の築造であり、北河内でも最古の古墳群と考えられる。二重口縁壺形土器が第1・第3号墳から、円筒埴輪が第3号墳から出土している（註15）。

南山遺跡の範囲内に含まれる鍋塚古墳は、1995（平成7）年に交野市教育委員会によって初めて調査が行われた（註16）。さらに、2000（平成12）年の調査では全長約60mの前方後方墳と推定されることがわかった。葺石はあるが、埴輪は検出されなかった。埋葬施設は竪穴式石室をもち、粘土床と思われる緑灰色の粘土の上面には朱が塗られていた（註17）。

交野市星田に位置する妙見山古墳は1968（昭和43）年の発見時には、すでに南西側が土砂採掘のために削られていた。円墳または前方後円墳と考えられている前期古墳である。主体部は木棺であることまではわかっているが、割竹形木棺かあるいは箱式木棺かは不明である。遺物は、勾玉や管玉などの玉類が墳頂の擾乱された封土中や封土中央の粘土中から、鉄器が古墳床部から出土している。円筒埴輪は中央部封土内の擾乱土中からと墓壙北に北東2mの墳丘裾から出土した（註18）。

生駒山地の西側斜面と平野部が接する地にある車塚古墳群は、前方後方墳1基と円墳4基で構成される。中でも前方後方墳である東車塚古墳は、少なくとも墳長65mを越える規模で、群内最大のものである。内部主体は粘土椁をともなう割竹形木棺1基、それに加えて直葬の箱形木棺2基の合計3基の埋葬施設で構成される。出土遺物は割竹形木棺からのみ出土し、3群に分けられる。北群からは小型三角板の革綴衝角付冑・襟付短甲が出土。短甲の中には巴形銅器が入っていた。周辺からは筒形銅器、鏡・玉・刀剣類が出土している。中央群も北群と同様に、鏡・玉・刀剣類、それに加えて石剣が出土、南群からは玉類、鉄製品、鉄製農耕具が出土した。これらのことから、築造は古墳時代中期と考えられる（註19）。

また、本調査地に近接して東方にある倉治古墳群は関西電力枚方変電所内に位置し、昭和26年の変電所造成に伴い、発掘調査が実施された。隣り合う2基の古墳が単位となって、合計8基の古墳が距離を置いて並んでいた（註20）。墳丘はいずれも削平されていたが、主体部の横穴式石室は8基全てから検出された。それらの石室は片袖式のものがほとんどであり、羨道は短い。これは渡来系氏族の墳墓によく見られる構造の石室であるといわれる。主な出土品は第1・3・8号墳から武具、装身具、須恵器が、それに加えて2号墳からは農工具も出土している。4号墳からは門歛と金環が検出され、5号墳は遺物がなく、7号墳は工事中の発見のため不明である（註21）。

清水谷古墳は古墳時代後期の古墳である。倉治遺跡の北東に位置し、東倉治遺跡内にある。昭和42年に偶然発見された古墳で、昭和61年に交野市教育委員会によって、古墳の範囲確認及び、石室の実測などの調査が行われた。古墳は山渓から流出した花崗岩の砂層によって完全に覆われていた。墳形は円墳または方墳と考えられ、円墳であると仮定すると、径は12m前後に想定される。清水谷古墳は単独での検出であるが、当該期の古墳は群集墳であることが多いため、倉治古墳群のように周辺にも古墳が存在して群を形成する可能性は大きい。清水谷古墳も砂層に埋没していたため、他の古墳も埋没している可能性が高い。遺物は少ないが、人骨、金環、土師器皿などが出土している（註22）。清水谷古墳の石室は無袖式横穴式石室であるが、玄室と羨道との境界を高低差をもって区別することができる。これも渡来系氏族の古墳と類似しており、清水谷古墳の被葬者も渡来系氏族に関係する人物であろうといわれている（註23）。

古墳時代に形成されたものは、古墳だけではない。上私部遺跡は古墳時代中期から後期を盛期とし、中世以降まで存続する集落遺跡である。竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝などの遺構が数

多く検出されている。古墳時代中期の竪穴住居や土坑からは、韓式系土器や韓式系土器を模倣した土師器の甕などが出土しており、渡来系氏族との密接な関係が考えられる。さらに、初期須恵器、ヘラ記号や朱記号をもつ須恵器なども出土している（註 24）。これらは鍛冶関連遺跡の周辺から多数出土しており、平成 19 年度の財団法人大阪府文化財センターによる調査では、砥石や鉄滓が出土したことから、上私部遺跡では何らかの生産活動が行われていた可能性が考えられる（註 25）。

東倉治遺跡では弥生時代後期の竪穴住居が検出されているが、その一方で古墳時代前期の土坑やそれらの遺構に伴う豊富な土器類も出土している（註 26）。飛鳥時代初頭の遺構面も検出されており、それ以降は厚い洪水砂で覆われる（註 27）。この遺跡は今回の調査地の北東に位置するが、一帯は山崩れによる土砂の堆積が著しい地域である（註 28）。

また、交野市域周辺の代表的な遺跡としてその他には上の山遺跡があげられる。旧石器時代から中世にかけての複合遺跡であり、弥生時代中期前半の独立棟持柱を持つ大型掘立柱建物が、竪穴住居や多数の土器とともに見つかっている。古墳時代では竪穴住居群も確認されている。また、上の山遺跡周辺で初期須恵器が焼かれていたことを示す、5世紀初頭の焼け歪み・溶着した土器や窯壁関係遺物が出土した（註 29）。これについては茄子作遺跡が生産地であり、そこに古墳時代の須恵器窯が存在したものと考えられている（註 30）。

奈良時代～平安時代

奈良時代から平安時代の枚方市・交野市域は天皇関係の狩獵・遊行地となるとされる。また、森・寺・本市・星田の集落は石清水八幡宮寺領莊園となる。星田の新宮山には明治の初め頃まで石清水八幡宮の分靈を勧請し、奉祀した新宮山八幡宮があった（註 31）。現在も森・本市の神人は、9月 15 日の石清水八幡宮祭に出仕している（註 32）。

中世以降

中世の遺跡では代表的なものに、倉治遺跡の南に隣接する有池遺跡が挙げられる。交野市教育委員会と財団法人交野市文化財事業団が行った有池遺跡 2002－1 次調査では、12世紀後半から 13世紀末の耕作域と居住域の境あたりで土坑が検出され、そこから樟葉付近で作られた瓦器椀や土師器が出土した。地鎮や豊穣を祈る祭祀を行ったのではないかと考えられる。また、この時の調査では、伏見地震の時のものと考えられる噴砂が確認されている（註 33）。

有池遺跡では縄文時代から近世にかけての遺物が出土しているため、長期に渡ってこの土地が利用されていたことがわかる。平成 14 年の財団法人大阪府文化財センターによる調査の結果、中世の集落は、灌漑システムの限界からそれまで放置された丘陵地や扇状地にまで、技術の発展とともに居住域が拡大して形成されたことがわかった。集住化が顕著になるまでの過程を、生産域・居住域・地割を含めた集落景観の変遷としてとらえることができた（註 34）。平安時代後期から室町時代前期においては、微高地の最上部を居住域、その南北の低い谷地を耕作域や水路として利用し、免除川に近接する低湿地帯には開発が及んでいなかったことが明らかに

なっている（註 35）。有池遺跡の古墳時代中期から飛鳥時代初頭の遺物の中には、陶邑產とはことなる特徴をもつ須恵器や土師器などが出土していたが、（土師器皿などの）中世土器は乙訓地域と近い様相を示す。瓦器椀は大和型と樟葉型が大部分を占め、和泉型は数点の破片の出土のみであった。これまで一括して出土することが少なかった樟葉型瓦器椀が、ここでは 11 世紀後半から終末期に至るまでほぼ全段階のものが出土している。特に 13 世紀から 14 世紀の豊富な資料が出土したことが注目される（註 36）。古代の集落の一部と、生産遺跡である水田跡も発見されている。河道が付け替えられたことや、河道に近い湿地帯の開発は容易でなかったこと、近世に至ってようやく河道近くまで開発が進んだことも明らかになっている（註 37）。

倉治遺跡周辺の遺跡の概略を述べてきたが、交野市域は古来から発展した地であったと言えるだろう。倉治古墳群や清水谷古墳が渡来系氏族の墳墓と類似していることや、上私部遺跡から韓式系土器が出土していること、織物を重要視する機物神社があることなど、倉治遺跡周辺では渡来系氏族である秦氏を連想させる事項が数多くある。また、現在も船戸の地名が残るように、船で天の川を遡れば現在の JR 河内磐船駅周辺まで容易に到達できる。その先の主要道路として磐船街道が大和まで、東高野街道が京都、和歌山まで延びるように、交通の要所であったこともうかがえる（註 38）。

（森）

- （註 1） 交野市教育委員会『2000 年度交野市埋蔵文化財概要』2001 年
- （註 2） 財団法人大阪府文化財センター『倉治遺跡』 2008 年
- （註 3） 交野市『交野市史』考古編 1992 年
- （註 4） 前掲註 3 参照
- （註 5） 前掲註 3 参照
- （註 6） 前掲註 3 参照
- （註 7） 前掲註 3 参照
- （註 8） 前掲註 3 参照
- （註 9） 財団法人大阪府文化財センター『私部南遺跡』 I 2007 年
- （註 10） 交野市教育委員会『森遺跡』 V 1997 年、前掲註 3 参照
- （註 11） 交野市教育委員会『森遺跡』 VII 2001 年
- （註 12） 前掲註 3 参照
- （註 13） 前掲註 3 参照
- （註 14） 前掲註 3 参照
- （註 15） 交野市教育委員会『森古墳群発掘調査概要』交野市文化財調査概要 1983-3 1983 年
- （註 16） 交野市教育委員会『平成 7 年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』 1996 年
- （註 17） 交野市教育委員会『鍋塚古墳 2002-1 次調査 有池遺跡 2000-1 次調査』 2003 年
- （註 18） 前掲註 3 参照
- （註 19） 交野市教育委員会『交野東車塚古墳』調査編 2000 年
- （註 20） 交野市教育委員会『平成 3 年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』 1992 年

- (註 21) 前掲註 3) 参照
- (註 22) 交野市教育委員会・財団法人交野市体育文化協会『清水谷古墳調査概要』 1987 年
- (註 23) 前掲註 3) 参照
- (註 24) 財団法人大阪府文化財センター『上私部遺跡』 I 2007 年
- (註 25) 財団法人大阪府文化財センター『上私部遺跡Ⅲ 有池遺跡Ⅲ』 2009 年
- (註 26) 財団法人大阪府文化財センター『東倉治遺跡』 I 2004 年
- (註 27) 財団法人大阪府文化財センター『東倉治遺跡』 II 2006 年
- (註 28) 交野市教育委員会『平成 12 年度交野市埋蔵文化財発掘調査概要』 2001 年
- (註 29) 財団法人大阪府文化財センター『上の山遺跡』 II 2007 年
- (註 30) 財団法人大阪府文化財センター『茄子作遺跡』 2008 年
- (註 31) 交野市教育委員会・財団法人交野市文化財事業団『新宮山』 1994 年
- (註 32) 交野市『交野市史』民俗編 1981 年
- (註 33) 前掲註 13) 参照
- (註 34) 財団法人大阪府文化財センター『有池遺跡』 I 2007 年
- (註 35) 財団法人大阪府文化財センター『有池遺跡』 II 2006 年
- (註 36) 前掲註 30) 参照
- (註 37) 前掲註 31) 参照
- (註 38) 交野市『交野市史』自然編 I 1986 年

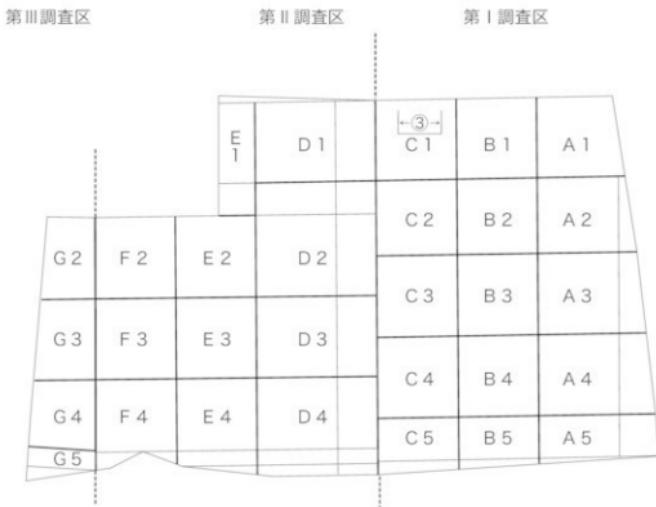
第3章 調査の手順と概要

本調査の対象となった敷地では、庁舎建築予定区画のみでなく、敷地内全域にわたって擁壁や埋管など、設置にあたって地下構造を損壊する可能性の高い地下構造物が計画される。そのため、構造物を伴わない駐車場予定地を除いて、できる限りほぼ全域をカバーできるように調査区を設定した。

残土置き場を確保するために主だった調査範囲を東西に2分し、約30m×45mの台形を呈する東側を第Ⅲ調査区、一部を欠くが約30m×30mのほぼ正方形と約14m×20mの長方形を加えた西側を第Ⅱ調査区とした。またさらに第Ⅱ調査区の西側、敷地の西端に沿って長さ約45mにわたるの細長いトレンチを第Ⅰ調査区とした。第Ⅲ調査区は、府道交野久御山線に面しており擁壁が建設される予定の区画である。

各々の調査区内には、遺物採集地点の確認等のため、便宜上の地区割りを、東から西におよそ10mごとにA～G、北から南におよそ10mごとに1～6と表して用いた。A～Cが第Ⅲ調査区、D～Fが第Ⅱ調査区、Gが第Ⅰ調査区にあたる。

調査に際して、まず東側第Ⅲ調査区から先行して約3ヶ月間弱の調査を、続いての約3ヶ月間弱で残る西側の第Ⅱ調査区の調査を実施した。その後、最後に約1週間弱で第Ⅰ調査区の調査を



※F・G1は無し

図4 倉治遺跡平成21年度調査 調査範囲地区割り図

おこない、本調査は完了した。表土や現代耕土部分を重機で除去した後、遺構・遺物の存在が推測される地層を隨時必要な記録を取りながら、人力により掘削した。

側溝は、調査区の断面観察及び排水のためを兼ね、調査区の平面人力掘削に先行して、調査範囲全体の四周を囲うように掘削した。調査の過程において、20分の1の縮尺による遺構全体の平面図を、出土遺物の残存状況が良好だった場合には10分の1の縮尺による詳細な出土状況図など、記録のために遺構の特徴に応じて必要な図を作成した。また、層序の記録のため、20分の1の縮尺による調査区全体の側溝壁断面図を作成した。

写真撮影は、必要な個々の遺構検出状況及び完掘状況、遺構あぜの断面、遺物の出土状況及び、調査区の東西南北の側溝断面、調査区の全景等を撮影した。全景写真は、第Ⅰ・Ⅱ各調査区2回ずつ、写真撮影用足場の上から撮影した。両調査区とともに1回ずつヘリコプターを用いた航空写真測量を行った。各々の撮影に先行して3級基準点各1点、4級基準点各2点を作成した上で、世界測地系に準じた国土座標値に基づく5m四方のグリッドを測量の基準に用いた。この座標値は、本報告書における遺構平面図に記載した。航空写真撮影は20分の1の縮尺を用いておこない、100分の1の縮尺による遺構平面図を作成した。

本報告書は上記の調査成果の記録をまとめたものである。

(小川)

第4章 基本層序

第1節 調査区の基本層序

交野市は市域の東南部を中心に、およそ3分の2を山地が占める。この山地は生駒山系に属し、主に花崗岩からなる。山地の西麓は比較的急な傾斜をもち、その裾には中位・低位段丘からなる交野丘陵がひろがる。本調査がおこなわれた倉治遺跡は、大阪層群を低位段丘堆積が覆う位置にある。この範囲は小河川による開析をうけた地域でもある（註1）。そのため調査地では、山側にあたる東側が高く、西に向かって低く傾斜する。調査前の当該地は、段々畑状の耕作地であった。

基本層序は主に4層に大別することができ、さらに細分できたものは枝番を附した。主だった遺構面は3面観察できる。一番上の第1遺構面は2層上面で検出でき、中世後期～近世以降に比定できる。第2上遺構面はほぼ第II調査区のみにおいて3層上面で中世頃、第2遺構面は4層の地山上面で第I調査区ではやはり中世、第II調査区では古墳時代中期にあたる。このうち、第1・2上遺構面では繰り返し継続的に耕作がおこなわれた様子がわかる。平面的には同じ遺構面上で耕作に伴う遺構がたくさん重なりあい、地層断面においても攪拌された耕作土が薄く幾重にも堆積する様子がうかがえる。第2遺構面は、ところにより第2上遺構面と深度差はさほどないが、第II調査区では明確に古墳時代中期の生活にともなう遺構のみが観察できる。そこでは、遺構面の上層である3層の堆積が厚くなる。

先述のように、倉治遺跡の東側には山地があり、調査地内においても地山が東から西へ傾斜し、西側ほど遺構の到達深度が深くなる。そのため、第1遺構面は両調査区に共通するが、それ以下は調査地内の東端と西端では異なった様相をみせる。第I調査区では、第2遺構面では主に中世の遺構を集中して検出できた。その一方で、古墳時代遺構は中世の耕作により削平をうけたか、第I調査区には存在せず、調査対象地の西部である第II調査区の西半から第III調査区にかけて検出した。また、第I調査区内においても北半と南半では、南半が微高地状になり遺構の様相も異なる。この詳細については第5章の遺構についての記述を参照されたい。

第I調査区の西端の一部で、段々畑が一段落ちる境界がある。その一段下った箇所よりも西では、それより東の第2遺構面と第1遺構面の間にさらに1面、3層上面に中世の耕作の痕跡が集中して検出される面が存在する。これを第2上遺構面、として、第II調査区でもほぼ一面に検出した。第II調査区では、その下層、4層上面で検出した遺構面が第I調査区の第2遺構面に相当するが、ここでは中世の遺構ではなく、主に古墳時代の遺構を検出した。

主に、東部と西部に分けて、上から順に、調査区側溝壁断面図を参照しながら、本調査地における基本層序の概要を解説する。

まず、第I調査区及び第II調査区の北壁断面（図5）をみると、第1遺構面上面にあたり継続して通る2層上面の両端でおよそ50cmを超える差があり、東が高く西が低い傾斜の様子がわかる。1a-cの1層はすべて現代耕土で、繰り返し客土をともなう整地がなされて耕作がおこな

われたことがわかる。2層も同様に耕作土であるが、包含する遺物から時代は遡る。主に2b・d・i層上面で、第1遺構面の耕作の痕跡がみえる。この2層は5～10cm程度の薄いレイヤーがところにより3～4層重なり、厚いところではおよそ30～35cmに及び堆積する。その下層、3層も主に耕作土で、2～3層、各々10～15cm程度の薄いレイヤーが重なる。これは主に第II調査区でみえる。厚いところでは約40cmに至る。第II調査区ではこの上面には第2上遺構面があり、上層の第1遺構面よりも明確に深さ5～10cmほどの小溝の痕跡が確認できる。第I調査区の西北部では3層が削平されて存在しない箇所があり、そこでは第2上遺構面は存在せず、第1遺構面の直下ですぐ4層上面に第2遺構面がのる。4層は地山で、花崗岩の風化土と考える粗砂やその下層には粘土質の層がある。

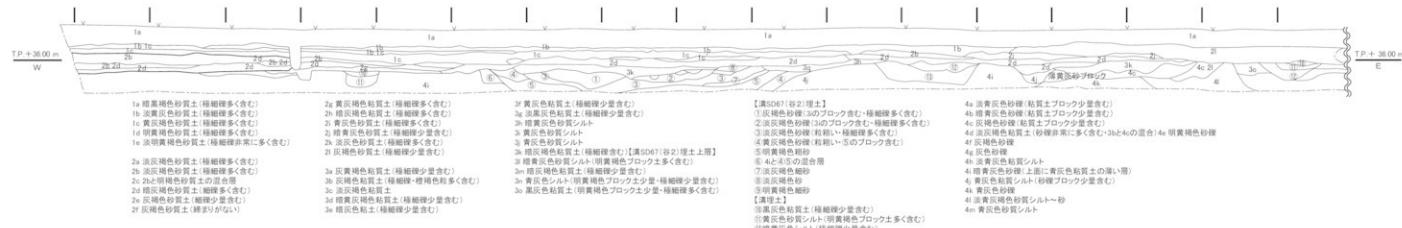
第II・III調査区においても、上層の中世以降の耕作土の堆積は概ね同様である。しかし、西へ下るにつれ3層の堆積が厚くなり、深い所ではおよそ25cmにも及ぶことは先ほども述べた。そこでは第2上遺構面が存在し、その下面、地山である4層の上面において第2遺構面の遺構が見えるようになる。4層は全体的に青味がかった砂質の堆積である。E2・F2・G2区では、幅3mを超える大きな弧を描く堀割のような谷間があり、黒褐色の粘質シルト～細砂が堆積する。この遺構は、断面にもみえる。谷の上面には、耕作土が堆積し、埋没後には谷の上でも耕作がおこなわれていたことがわかる。なお、この谷の埋土は、土壤サンプルの微化石分析をおこなったため、その内容について詳しくは付論を参照されたい。

統いて調査区南壁は、北壁との違いが顕著であり、また遺構の痕跡が多くみえる第I調査区の範囲においてのみ記述する。第II調査区南壁（図6）の概要は統いて述べる第II調査区西壁の南半の様子と大差ないため、それを参照されたい。第I調査区南壁では、同調査区内の他のエリアではあまりみえない3層の堆積が観察できる。これは特に東半で厚く堆積する。主に3層上面で鋤溝の痕跡が明瞭に確認できる。3層下面、4層上面が次章で詳細を報告する掘立柱建物を検出した第2遺構面である。第II調査区で主にみえる谷遺構の埋土と同様の痕跡が3m～3q層のようにこの断面にも観察できるが、調査区内において平面状では、中世の整地・遺構に削平されたのか検出できなかった。しかしながら第I調査区東壁では、谷遺構の埋土に相当する痕跡を確認できなかつたため、この第II調査区から続く谷遺構は第I調査区で南へ抜けた可能性が高い。これについては、遺構の報告及びまとめの章で触れる。

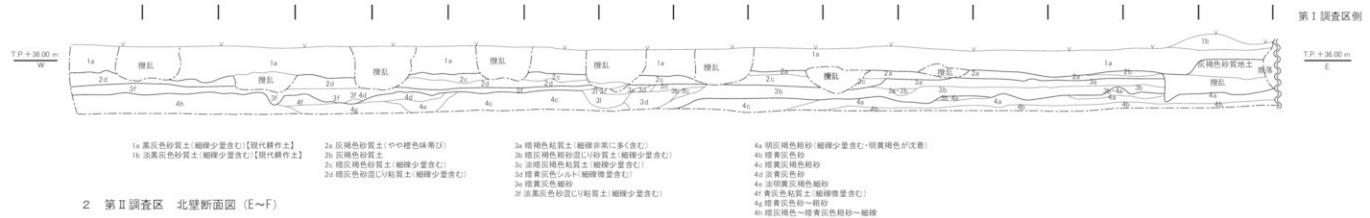
図7は第II調査区の西壁断面で、調査区のほぼ西端にあたる位置の様相をしめす。これは、谷遺構により、南北で大きく堆積の様子が異なる。北半は谷で占められ、堆積土も谷埋土と同様の黒～灰色の砂及び粘土質で一部青味を帯びた箇所があり、地山も黒～暗灰の砂あるいは粘土である。一方で、南半では上層は耕作地のレイヤーが重なり、地山は明褐色～褐色系のおそらく低位段丘に相当する地層で、締まりも強い。

1 第 I 調査区 北壁断面図 (A~C)

第Ⅱ調査区側



2 第Ⅱ調査区 北壁断面図 (D)



2 第Ⅱ調査区 北壁断面図 (E~F)

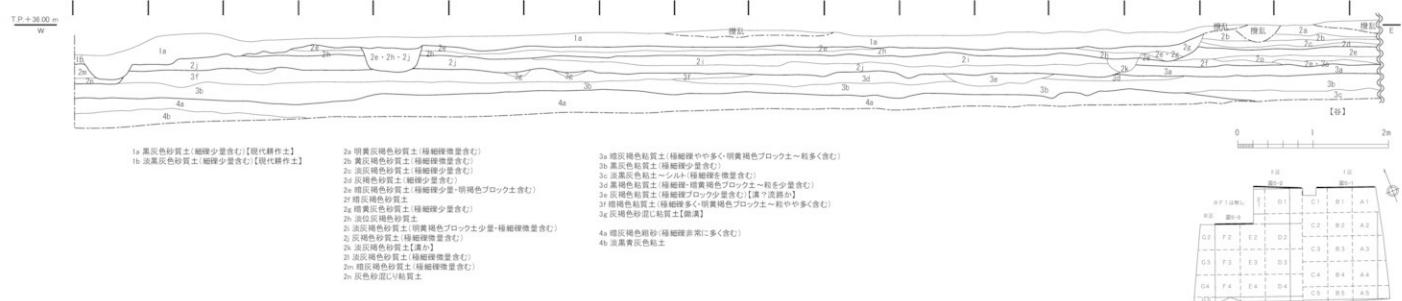
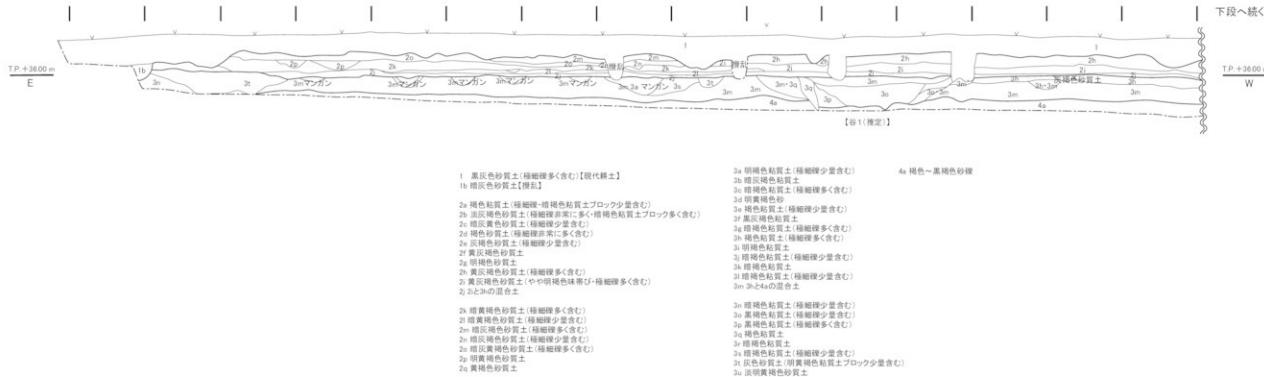


図5 第I・II調査区 北壁断面図

1 第I調査区 南壁断面図 (A~B)



2 第Ⅰ調査区 南壁断面図 (B~C)

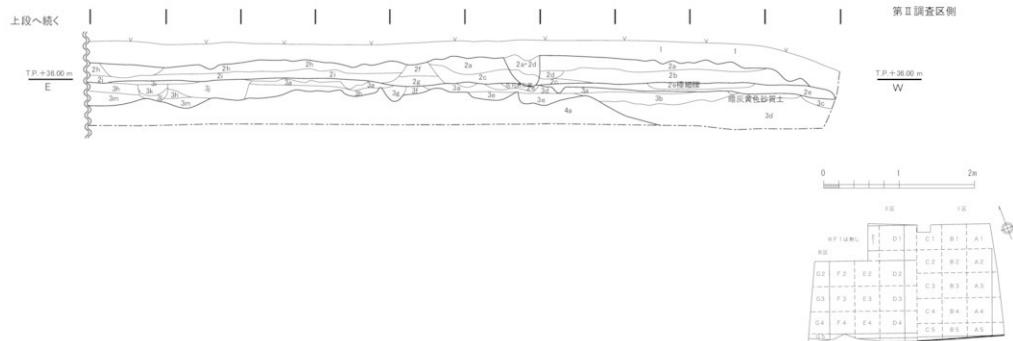


図6 第I調査区 南壁断面図

第1調査区 北壁 層序 近組(厚さcm)		通漬・漬物	時代
1層 周代組上 (ob25)		周代	
a			
b 銅鏡地色 9cm 周代組上(5.10)	周代		
c 銅鏡地色 純質 周代組上(5.10)	周代		
d			
e ~f 銅鏡地色 ~純色 (>30)			
2層 黒・濃黒面 a 銅鏡地色 9cm 周代組上(5.10)	周代	通漬・漬物	時代
b 銅鏡地色 9cm 周代組上(5.10)	周代	通漬・漬物	時代
c 銅鏡地色 9cm 周代組上(5.10)	周代	通漬・漬物	時代
d			
e ~f 銅鏡地色 ~純色 (>30)			
3層 黒・濃黒面 g 銅鏡地色 9cm 周代組上(5.10)	周代	通漬・漬物	時代
h			
i ~j 銅鏡地色 ~純色 (>30)			
4層 黒・濃黒面 k 銅鏡地色 9cm 周代組上(5.10)	周代	通漬・漬物	時代
l			
m ~n 銅鏡地色 ~純色 (>30)			

第1調査区 北壁 層序 近組(厚さcm)		通漬・漬物	時代
1層 周代組上 (ob25)		周代	
a			
b			
c			
d			
e			
f			
2層 黒・濃黒面 g 銅鏡地色 9cm 周代組上(5.10)	周代	通漬・漬物	時代
h			
i ~j 銅鏡地色 ~純色 (>30)			
k			
l			
m ~n 銅鏡地色 ~純色 (>30)			

第1調査区 南壁 層序 近組(厚さcm)		通漬・漬物	時代
1層 周代組上 (ob25)		周代	
a			
b			
c			
d			
e			
f			
2層 黒・濃黒面 g 銅鏡地色 9cm 周代組上(5.10)	周代	通漬・漬物	時代
h			
i ~j 銅鏡地色 ~純色 (>30)			
k			
l			
m ~n 銅鏡地色 ~純色 (>30)			
3層 黒・濃黒面 o 銅鏡地色 9cm 周代組上(5.10)	周代	通漬・漬物	時代
p			
q ~r 銅鏡地色 ~純色 (>30)			
s			
t			
u ~v 銅鏡地色 ~純色 (>30)			
w			
x			
y			
z			
aa			
bb			
cc			
dd			
ee			
ff			
gg			
hh			
ii			
jj			
kk			
ll			
mm			
nn			
oo			
pp			
qq			
rr			
ss			
tt			
uu			
vv			
ww			
xx			
yy			
zz			
aa			
bb			
cc			
dd			
ee			
ff			
gg			
hh			
ii			
jj			
kk			
ll			
mm			
nn			
oo			
pp			
qq			
rr			
ss			
tt			
uu			
vv			
ww			
xx			
yy			
zz			
aa			
bb			
cc			
dd			
ee			
ff			
gg			
hh			
ii			
jj			
kk			
ll			
mm			
nn			
oo			
pp			
qq			
rr			
ss			
tt			
uu			
vv			
ww			
xx			
yy			
zz			
aa			
bb			
cc			
dd			
ee			
ff			
gg			
hh			
ii			
jj			
kk			
ll			
mm			
nn			
oo			
pp			
qq			
rr			
ss			
tt			
uu			
vv			
ww			
xx			
yy			
zz			
aa			
bb			
cc			
dd			
ee			
ff			
gg			
hh			
ii			
jj			
kk			
ll			
mm			
nn			
oo			
pp			
qq			
rr			
ss			
tt			
uu			
vv			
ww			
xx			
yy			
zz			
aa			
bb			
cc			
dd			
ee			
ff			
gg			
hh			
ii			
jj			
kk			
ll			
mm			
nn			
oo			
pp			
qq			
rr			
ss			
tt			
uu			
vv			
ww			
xx			
yy			
zz			
aa			
bb			
cc			
dd			
ee			
ff			
gg			
hh			
ii			
jj			
kk			
ll			
mm			
nn			
oo			
pp			
qq			
rr			
ss			
tt			
uu			
vv			
ww			
xx			
yy			
zz			
aa			
bb			
cc			
dd			
ee			
ff			
gg			
hh			
ii			
jj			
kk			
ll			
mm			
nn			
oo			
pp			
qq			
rr			
ss			
tt			
uu			
vv			
ww			
xx			
yy			
zz			
aa			
bb			
cc			
dd			
ee			
ff			
gg			
hh			
ii			
jj			
kk			
ll			
mm			
nn			
oo			
pp			
qq			
rr			
ss			
tt			
uu			
vv			
ww			
xx			
yy			
zz			
aa			
bb			
cc			
dd			
ee			
ff			
gg			
hh			
ii			
jj			
kk			
ll			
mm			
nn			
oo			
pp			
qq			
rr			
ss			
tt			
uu			
vv			
ww			
xx			
yy			
zz			
aa			
bb			
cc			
dd			
ee			
ff			
gg			
hh			
ii			
jj			
kk			
ll			
mm			
nn			
oo			
pp			
qq			
rr			
ss			
tt			
uu			
vv			
ww			
xx			
yy			
zz			
aa			
bb			
cc			
dd			
ee			
ff			
gg			
hh			
ii			
jj			
kk			
ll			
mm			
nn			
oo			
pp			
qq			
rr			
ss			
tt			
uu			
vv			
ww			
xx			
yy			
zz			
aa			
bb			
cc			
dd			
ee			
ff			
gg			
hh			
ii			
jj			
kk			
ll			
mm			
nn			
oo			
pp			
qq			
rr			
ss			
tt			
uu			
vv			
ww			
xx			
yy			
zz			
aa			
bb			
cc			
dd			
ee			
ff			
gg			
hh			
ii			
jj			
kk			
ll			
mm			
nn			
oo			
pp			
qq			
rr			
ss			
tt			
uu			
vv			
ww			
xx			
yy			
zz			
aa			
bb			
cc			
dd			
ee			
ff			
gg			
hh			
ii			
jj			
kk			
ll			
mm			
nn			
oo			
pp			
qq			
rr			
ss			
tt			
uu			
vv			
ww			
xx			
yy			
zz			
aa			
bb			
cc			
dd			
ee			
ff			
gg			
hh			
ii			
jj			
kk			
ll			
mm			
nn			
oo			
pp			
qq			
rr			
ss			
tt			
uu			
vv			
ww			
xx			
yy			
zz			
aa			
bb			
cc			
dd			
ee			
ff			
gg			
hh			
ii			
jj			
kk			
ll			
mm			
nn			
oo			
pp			
qq			
rr			
ss	</td		

第2節 小結

前項まで述べた各々の調査区の層序の対応関係を図8にまとめた。第I調査区北壁、第II調査区北壁、第II調査区西壁、第I調査区南壁の順で対応関係を示す。

全体的に標高は東の山側が高く西へ向かって低くなる。1・2・4層は調査地内の全域を通して観察できるが、3層は第I調査区の北壁では観察できない。地山は3層の一部と4層で、これらの上面に最終遺構面である第2面を検出できる。第I調査区では中世の遺構、第II調査区では古墳時代中期の遺構が主となる。

(小川)

(註1) 片山長三 編 1963『交野町史』改訂増補1 交野町

宮地良典・田結庄良昭・寒川 旭 2001『大阪東北部地域の地質』 地質調査所

第5章 各遺構面の調査成果

第1節 中世以降の遺構

第I調査区では第1・2遺構面、第II調査区では第1・2上・2遺構面を確認した。第4章でも触れたが、東から西へ傾斜する地形のうえに段々畑が形成されているため、調査範囲の東半にある第I調査区と西半にある第II調査区では、地層の堆積状況がややことなり、遺構の様相もことなる。

第I調査区で検出した遺構の中心時期は中世以降である。第1遺構面では中世末～近世頃に推定できる耕作の痕跡を検出した（図9）。幅15～25cm程度の北東・南西方向に5～25cm程度の間隔をあけて平行して並ぶ小溝群を検出し、第I調査区北西半、B1・2～C1・2区で特に集中していた。その上に、それらの溝を切るように直交する、さらに新しい北西・南東方向の小溝群も検出した。これらの小溝群は現在の地割りの方角と一致するため、当時からの地割りを調査の直前まで踏襲していた様子がわかる。

これら耕作の痕跡の鋤溝群に加え、耕作地設定にともなうものか、区画溝のようなやや大きな溝SD42も検出した。第I調査区の中央よりやや南を東西方向に走る溝SD42は、幅50～100cmの大きな溝で、それより南は鋤溝群が集中する北側とはやや様子が異なることからも、区画溝であった可能性が高い。この溝は、出土遺物も中世～近世までさまざまあり、また溝の断面の堆積状況からも、長期的に継続して、掘り直しなども伴いつつ利用されていた様子がうかがえる（図10-2）。この溝は第II調査区までづき、第2上遺構面でも検出した。また、溝SD42の南側で、第I調査区の南西C4地区の一角では、南北方向の鋤溝が周辺とは異なる淡灰褐色砂の長方形区画の上にあった（図10-1）。この長方形区画に堆積する淡灰褐色砂からは、まとまって中世の遺物が出土した。この堆積は第4章で掲載した第I調査区南壁の断面図（図6-2）では2e層に相当する。ここでは、他の鋤溝よりも深い断面が上端幅20cmほどのU字形で、直交する区画もこの堆積の下層で検出しており（図13）、同様のU字断面区画溝は、倉治遺跡の以前の調査（註1）でも報告されている。この調査区南東の一角でもまた、同様の溝を検出した（溝SD54）。その断面の特徴的な様子は溝SD54の断面図（図6-3）に図示している。

一方で第II調査区でも第1遺構面は同様に検出した。しかし、様相が第I調査区とほぼ同様であったためと、下層の遺構の掘削深度が第I調査区より深いことが確認できたため、スケジュール等の都合もあり、第1遺構面での遺構検出及び製図・写真撮影等の記録作業を省略した。遺構の内容については、第I調査区同様の主に北東・南西方向を中心とした小溝群である。

第II調査区では、その下に第2上遺構面を確認した。第II調査区では、遺構の密集度合いも高かったため、また第I調査区の西端から継続する遺構があったため、この面において航空写真測量による図化をおこなった。

この遺構面の重なりの差は第4章でも述べたが、第I調査区西端にある、段々畑が一段落ちる

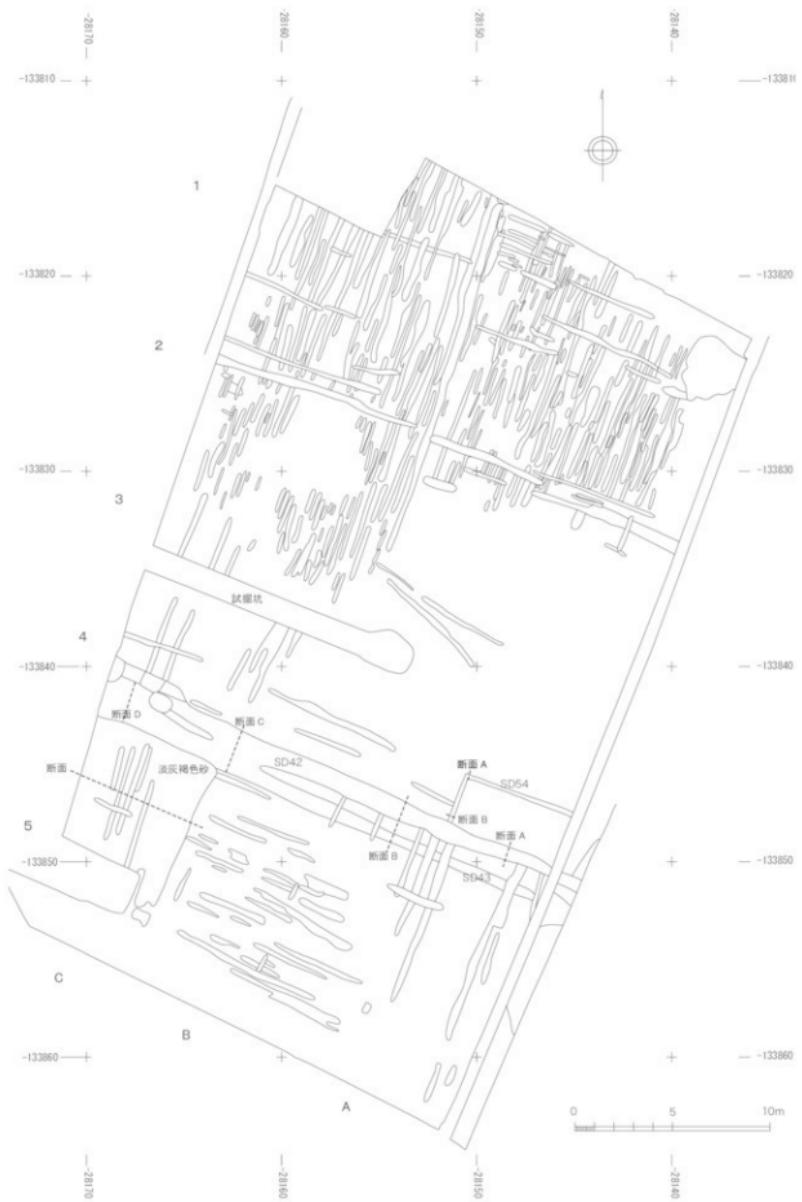


図9 第I調査区第1遺構面 遺構平面図

境界より西側で耕作土の堆積が1層多いことに依拠する。よって、第I調査区の第2遺構面に直接相当するのは、第II調査区では、そのさらに下層、地山直上になる。しかし、そこでは、中世の遺構ではなく、古墳時代の遺構を検出した。古墳時代の遺構については次項で詳しく述べる。

図 12 の第 I・II 両調査区をあわせた遺構図は中世のものである。

第Ⅰ調査区では第2遺構面上の遺構も上層の遺構面同様に、中世の耕作と生活の痕跡である。第Ⅰ調査区の西端近くの南北の段差より西側～第Ⅱ調査区にかけては、この第2上遺構面に鋤溝群がもっとも集中する。溝の形状は上層からほぼ変わらず、幅15～25cm程度、ここでは主に北東・南西方向にのみ走る。第Ⅱ調査区の南半では、また溝の様相が異なる。幅20～30cm程度と比較的大型のものが北西・南東方向に平行に並んで走る。そこには区画溝も存在し、また上層が削平されているため、検出した溝上端の幅は狭いが、第Ⅰ調査区第1遺構面のSD42の下層の痕跡も継続して検出した。

耕作以外の痕跡としては、第1調査区の南東隅で掘立柱建物1棟を検出した。長径30～40cmのややいびつな円形をした柱穴がおよそ1.6～1.8m間隔で並ぶ。柱の径は15cm程度を測る。2間×2間の小型の建物である。柱穴P46からは図28-21の土師器高杯の脚部が出土した。柱穴には建替えをおこなった痕跡もみえ、この場所で継続して建物が使用されていたことがわかる。建物の平面プランがほぼ正方形に推測でき、また柱穴以外の痕跡もみつからないため、どちらが正面であったかはわからないが、建物の主軸はほぼ正南北の方位に一致する。また、調査区内では、建物としてはこの1棟しか検出できなかつたが、別にさらに東にも柱穴が存在するため、

1. C4区 淡灰褐色砂层堆积区面 断面图



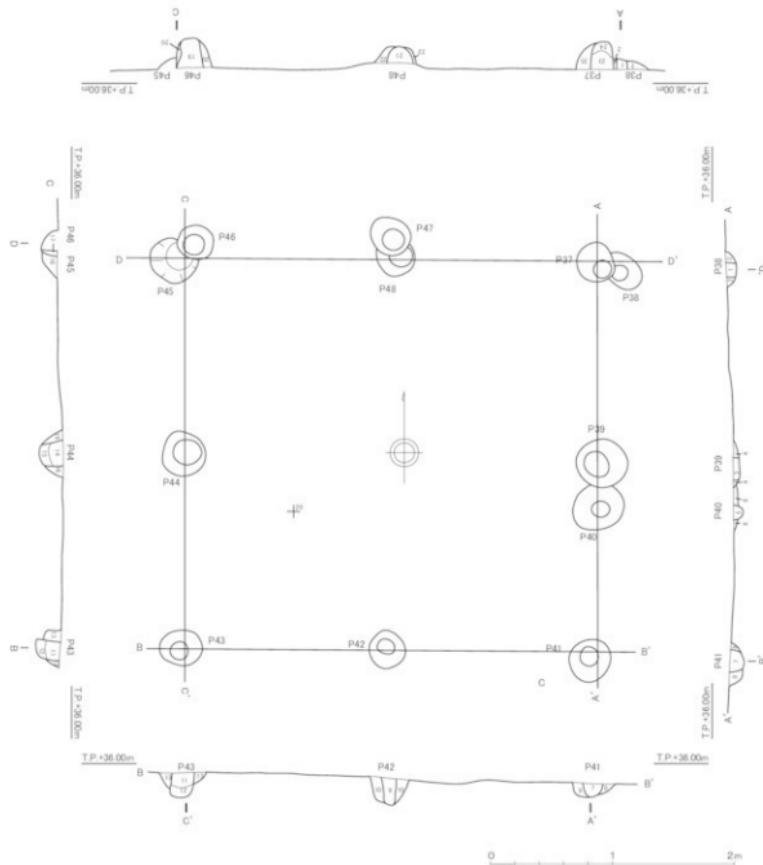
2. 溝 SD42 断面図



3. 溝 SD54 断面図



図 10 第 I 調査区第 1 遺構面 遺構断面図



- 1. 黑灰色粘質土
- 2. 線灰褐色砂混じり粘質土（極細礫少量含）
- 3. 線灰黑色粘質土（極細礫少量含）
- 4. 灰褐色粗砂
- 5. 線灰褐色砂混じり粘質土
- 6. 薄灰褐色粗砂
- 7. 黑灰色粘質土
- 8. 線灰褐色砂混じり粘質土
- 9. 黑灰色粘質土
- 10. 黑褐色砂
- 11. 黑灰褐色粘質土
- 12. 黑灰色粘質土
- 13. 黑灰褐色砂混じり粘質土
- 14. 黑灰色粘質土（極細礫含）
- 15. 黑灰色粘質土
- 16. 黑灰褐色粘質土（極細礫多く含）
- 17. 線灰褐色砂混じり粘質土
- 18. 線灰褐色砂混じり粘質土（極細礫多く含）
- 19. 黑灰色粘質土
- 20. 線灰褐色砂混じり粘質土
- 21. 黑灰色粘質土
- 22. 灰褐色粗質土（極細礫少量含）
- 23. 黑灰色粘質土（極細礫少量含）
- 24. 黑灰色粘質土
- 25. 灰褐色粗砂

図 11 第 I 調査区第 2 遺構面 掘立柱建物 遺構平面・断面図

居住域はここから調査区の外側へ広がり、複数の建物が存在した可能性が示唆される。

第I調査区の中央西寄りでは、埋土に焼土を多量に含む土坑SK01を検出した(図11)。長軸約1.5m、短軸約70cm程度を測るいびつな隅丸長方形～楕円状の土坑内部には多量に焼土塊が含まれる。土器片やその他の遺物はみつからず、焼土塊と炭のみである。焼土塊の中には、半円筒形に凹みをもち、またそのくぼみの内部に布目の様な痕跡や絞った痕跡のようなものがみえる破片も含まれているが、明確に形状が想定できるほど残存状況のよいものはなく、ふいごの羽口

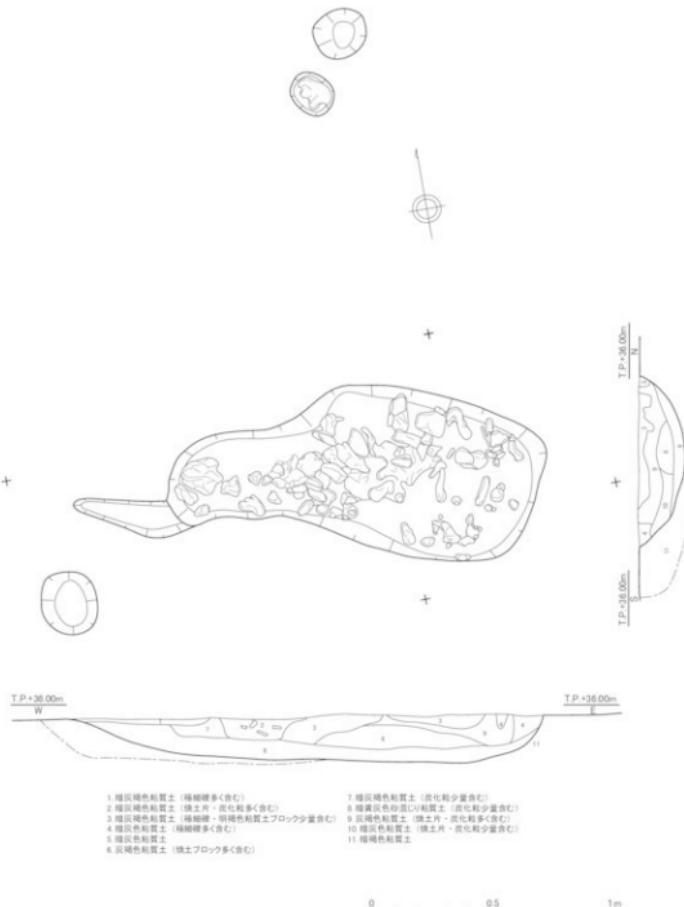


図12 第I調査区第2遺構面 土坑SK01 遺構平面・断面図

など遺構の性質の特定に至るようなものも見あたらなかった。そのため現段階では遺構の性格もよくわからず、今後の類例が待たれる。

他にも、調査区の北部では、第Ⅰ・Ⅱ調査区にかけて、溝SD67のような大きく屈曲する大型の溝もいくつか検出した。溝の中から、特に際立った遺物等は出土しなかった。

さらに第Ⅰ・Ⅱ両調査区全域にわたって、カーブのかかった不定形の土坑が多数見つかっている。いずれも北側には一般的な溝などの形状どおりの外傾する遺構の肩が見つかるが、反対側はえぐれるようになる。埋土は黒～暗灰色で締まりのないものがほとんどで、深さはきわめて深く1mを超えるものもある。これらは、他の遺構と重なる箇所ではいずれも他の遺構に切られており、どの遺構よりも古い。後述する第Ⅱ調査区の第2遺構面においても、古墳時代の竪穴住居に切られた状態で検出している。これらは特定が難しいが、きわめて古い時代に形成されたもので、倒木の痕跡のようなものである可能性が高い。

このように、今回の調査敷地内全域にわたってみえる主な遺構も、これまでの倉治遺跡の調査で報告されるとおり中世の生活・耕作に伴うものである。東から西に傾斜がかる地域を、開墾して生活していた様子がわかる。また、掘立柱建物などがある居住域が調査区の東端からさらに東へ広がることも、その一画がこの微地形の高地部にあたることに由来するのであろう。

(註1) 財団法人 大阪府文化財センター 2008年『倉治遺跡』



図 13 第 I・II 調査区第 2・2 上遺構面 遺構平面図

第2節 古墳時代の遺構

今回の調査であらたにわかった倉治遺跡の様相は、第1節で述べたよりも下層の第Ⅱ調査区の第2遺構面で古墳時代の遺構を検出したことである。主なものは竪穴住居址2棟、それを囲うように弧を描く谷、土坑、溝などである。

竪穴住居1

竪穴住居址2棟はともに小ぶりで、その2棟でも竪穴住居1はより小さく、南北約3.4m×東西約3.8mを測る。建物の主軸はわずかに東にふれるが真北方向に近く、作り付けのカマドを北側にもつ。遺構の残存状況はあまりよくなく、完掘までの深さは10cm余りで、確認できた貼床は1面のみであった。カマドについても立ち上がりがわずかに確認できる程度である。

しかしながら住居内からは生活の痕跡をとどめる炊飯供膳具を中心とした土器が多く出土した。カマド内では、支脚として使用された可能性もある甕の破片が散乱していた。他にも、土師器の高杯や甕、鉢などが出土した。これらの土器についての詳細は次章を参照されたいが、この住居を特徴づける出土遺物には軟質の韓式系土器平底鉢（図24-8）と長胴甕（図24-2）がある。どちらも渡来系集落に特徴的であるとされる土器である。また、住居内の北東隅、壁溝の底からはTK208型式に属する須恵器の杯蓋が出土し、この住居の廃絶年代を考える上で大きな手がかりとなる。

竪穴住居2

竪穴住居2は竪穴住居1よりはやや大きく南北約4.0m×東西約4.4mである。同じ方向に主軸をとり、並列するような両者の位置関係からもおそらく同時に存在していたのであろう。竪穴住居1同様に、完掘した状態で深さ10cm余りまでしか確認できなかった。貼床は1面確認し、北側にカマドの痕跡が残る。カマドの残りは竪穴住居1よりいっそう悪く、立ち上がりは確認できないが、炭化物と炭が長径90cm程度の範囲でひろがるのみであるが、位置的にもここが最終的にカマドであった場所と見てよいだろう。住居内の南東隅にもわずかに炭化物が広がるエリアがあった。

残存状況もよくなかったため、こちらの住居址からは出土遺物もあまり多くないが、住居址を検出した時点で製塙土器（図25-9・10）がみつかった。そのほかの遺物の詳細については、次章を参照されたいが、こちらも土師器を中心とする炊飯供膳具が主な出土遺物となる。

これら2棟の住居跡は、どちらも完掘した状態においても明瞭な柱穴を確認することはできなかった。また、どちらも住居の縁を壁溝がまわるが、その壁溝が住居の北東隅で一部他よりも深く凹んで小さな土坑状を呈する。

土坑SK2-6

竪穴住居2棟から10mほど離れた南東側、ちょうど第I・II調査区の境界近くに、土坑SK2-6を検出した。隅の丸い三角形を呈した様なこの土坑は、西側にあたる南北方向の1辺を底辺と見ると、底辺約3m、高さ約2.5mの隅丸三角形を呈する。黒～暗灰色の埋土が特徴的で、

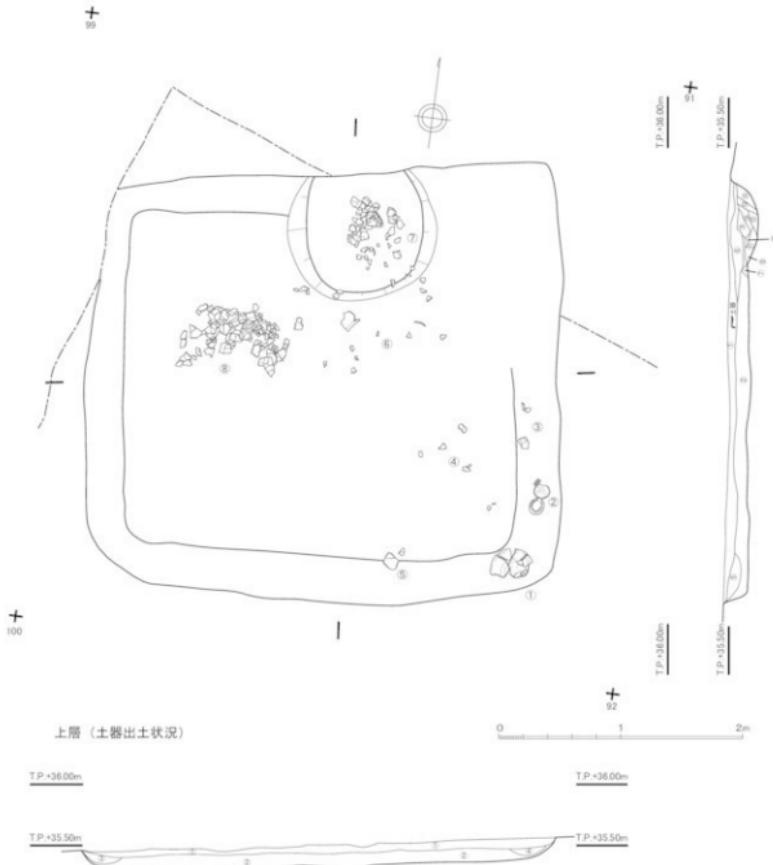
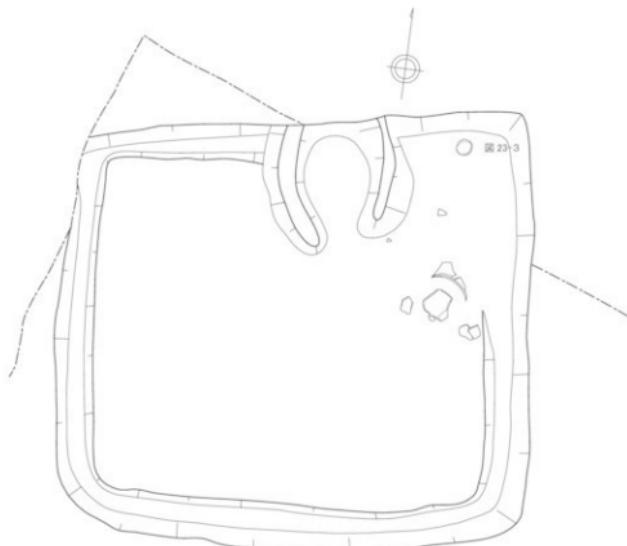


図 14 第Ⅱ調査区第2遺構面 竪穴住居1 土器出土状況

+

99



+

100

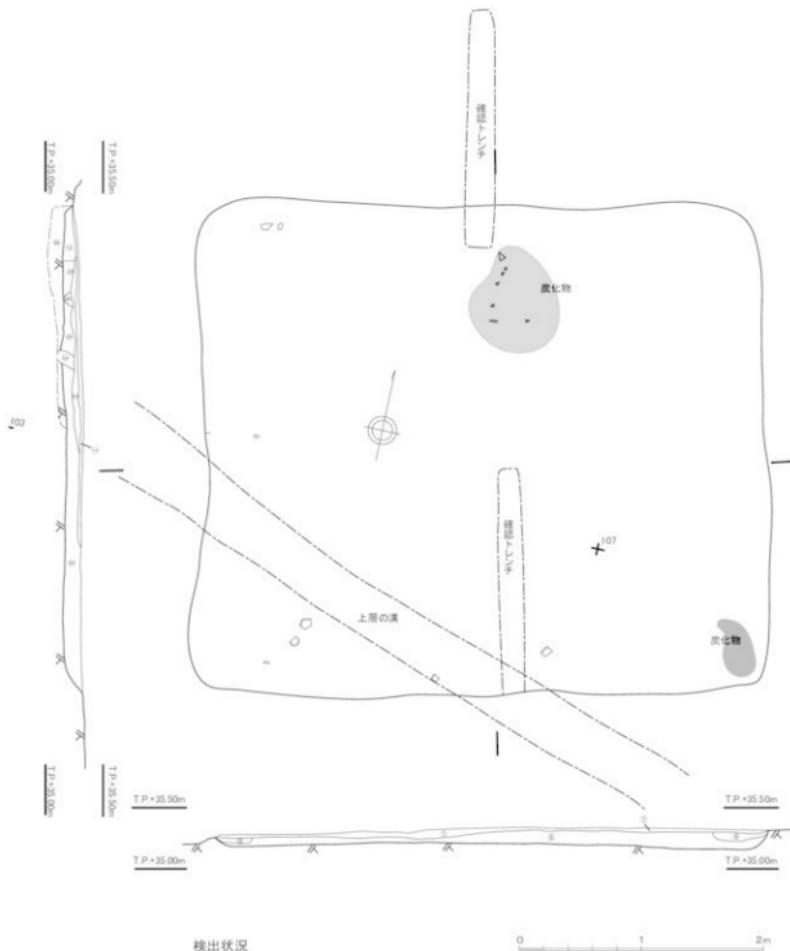
+

92

下層（貼り床）

0 1 2m

図15 第II調査区第2遺構面 竪穴住居1 下層



- (1) 鮎灰褐色粗砂混じり粘質土
(2) 灰褐色粘質土 (粗砂多く含む)
(3) 細黄灰褐色砂質土
(4) 細灰褐色粘質土
(5) 油灰褐色粘質土

図 16 第Ⅱ調査区第2遺構面 積穴住居2 貼床面

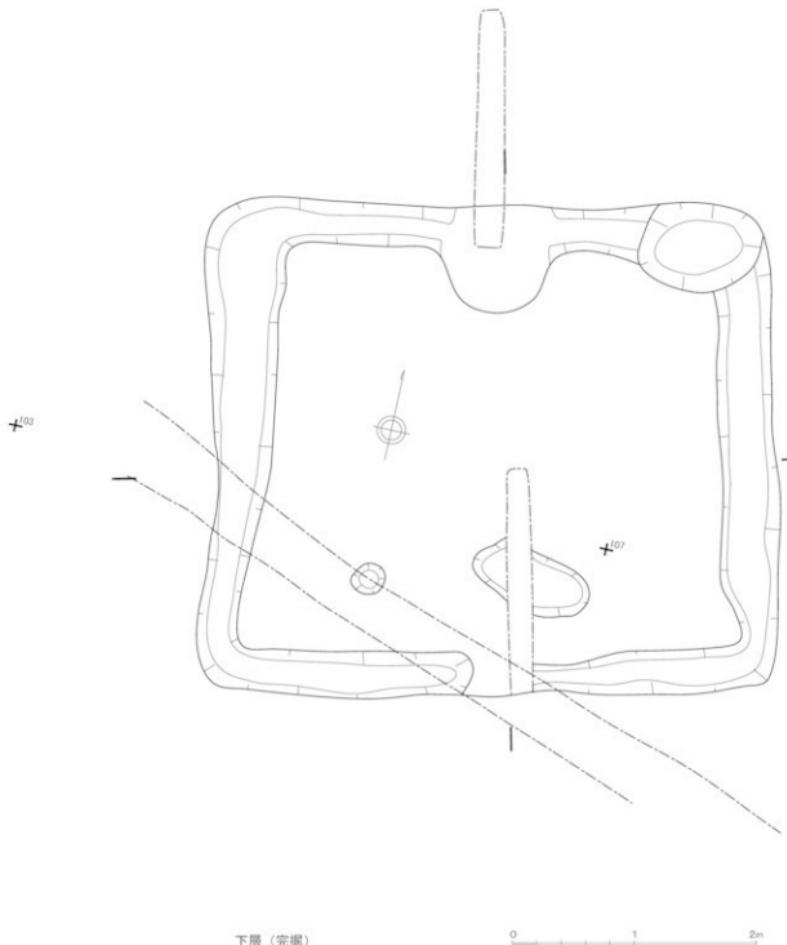


図17 第Ⅱ調査区第2遺構面 竪穴住居2 下層



図 18 第Ⅱ調査区第2遺構面 土坑SK 2-6 土器出土状況図



図19 第II調査区第2遺構面 土坑SK 2-6 遺構平面図

この狭い範囲から特に集中して多くの土器が出土した。

土坑内には土坑の西側の底辺に沿って溝 SD 2-04 が走る。この溝は検出状況では、土坑を切る溝の様にみえるが、掘削断面にもあるように、土坑 SK 2- 6 の一部ではある。ただ、一部底がえぐれる様に深くなっている。そのため、この溝は検出時の状況のように、土坑 SK 2- 6 に流れ込んで、またそれを越えて続く細長い溝であったわけではなく、土坑 SK 2- 6 が本来は検出時の残存状況よりも大きな遺構であり、おそらく土坑外にはみ出しているようにみえる溝の部分も含めて広がっていたのであろう。後世に削平されたため、土坑内でもより深かった溝状の一部のみが残って、調査時に検出されたといえる。それを裏付けるように、試掘坑を挟んで土坑 SK 2- 6 の北側にも、同様の黒～暗灰色の埋土をもつ小さな土坑状の遺構を検出しており、そこからも須恵器片が出土する。

出土遺物の内容詳細についてはこちらも次章を参照されたいが、須恵器蓋杯 1 組（図 26-21・22）、甕・壺（図 26-23・24）の破片以外はすべて土師器であった。土師器は、鉢、甕、壺、楕形高杯などがあり、摩滅が著しい破片を含むものの、全体の形状を把握できるまでに復原可能な比較的良好な残存状況のものが多かった。

また溝状の深い部分（溝 SD 2-04）の底近くから出土した甕（図 26-20）は土師器の長胴甕で、豎穴住居 1 から出土のもの（図 24-2）と直接接合はしないが、形状や調整、色調や胎土どれをとっても非常によく似ており同一個体であることはほぼ間違いない。このことから、豎穴住居 1 の廃絶時にはこの土坑も存在していたことになる。年代については、TK208 型式の須恵器蓋杯が 1 組（図 26-21・22）出土しており、豎穴住居 1 の出土土器でも同じく TK208 型式の須恵器杯蓋（図 24-3）がある。ここでは後者よりやや新しい様相をもつものの、2 つは同時代に存在した遺構であるとみて矛盾がない。

谷

豎穴住居 2 棟の北東から第 I 調査区にかけて、大きな谷間がある。堀割のように豎穴住居 2 棟が存在する微高地部を大きく囲う弧を描く。埋土は主に黒～暗灰色を呈する粘土と砂の互層で、上層は攪拌を受け耕作がおこなわれていた様子もわかる。埋土内の微化石等については、付論で土壤分析の結果を報告しているのでそちらを参照されたい。下層からは、多量の須恵器を中心とする土器類が加工された木製品とともに出土した。ただ、埋土の堆積状況から、長期間オープンな状態にあった、また一定期間水没していた遺構であることには違いないが、流路のように水が流れていたという様子はみえない。

谷は西側では、弧を描きながら第 III 調査区からさらに西へ抜け、東は豎穴住居 1 の東側あたりで屈曲して第 I 調査区から続く大きな溝 SD 67 へ続く。この不自然な屈曲は 2 つの遺構が重なることによる。谷埋土の堆積状況を観察するために残した畦の断面（図 21）をみると、2 つの遺構が重なっていたであろう様子がわかる。溝 SD 67 が谷に流れ込んでいたのであろう。谷 1 は、弧を描いたまま土坑 SK 2- 6 を含み、第 I 調査区へ続き、南壁断面（図 6-1）に観察されるよ



図20 第II調査区 第2遺構面 遺構平面図

うに南で調査区の外へ抜ける。

この谷の本来の形状については、第7章のまとめで復原を試みるが、土坑SK2-6が谷と同一の遺構であることは出土遺物の年代からも矛盾しない。ただ、谷の主だった部分から出土した遺物には、例えば土坑SK2-6などの他の遺構から出土のものと比較して圧倒的に須恵器が多いことが異なる。これは、竪穴住居廃絶時に住居に近い土坑SK2-6付近に、住居内での生活に使用していた土師器類をそのまま廃棄したことによるのかもしれない。

出土した須恵器はTK208型式に属するものがほとんどで、前述の竪穴住居及び土坑SK2-6と併行して存在した。ただ、それらの他の遺構よりも杯身や甌（図27-27・28）にみられるように、それらよりも新しい段階の遺物も含んでおり、住居が廃絶した後もしばらくこの谷は埋没せずに谷のまま存在していたことが分かる。

土師器では、住居址や土坑から出土したものと同様の楕形高杯（図27-31～33）や、甌の破片（図27-34）など渡来系要素をもつ土器、製塙土器（図27-30）なども出土する。

また、多くの木製品及び木片も出土した。木製品は何らかの加工の痕跡を残すものが多くあつた。長い棒状を呈するものが多く、並んでまとまって出土したり、あるいは甌とともに出土したりしている（図23）。祭祀等がおこなわれ、それにともない意図的に廃棄された可能性もある。

これらの古墳時代中期の遺構は、概ね年代差がなく、また第II調査区内に偏在する。竪穴住居は2棟とも残存状況がよいとは言えず、また住居址が存在するあたりは微高地にあるため、住居は当初もっと多く存在しており、後世の耕作のための整地で削平されたのであろう。

（小川）

* 発掘調査の実施に際しては、奥野和夫、真鍋成史、寺前めぐみ（交野市教育委員会）、小川暢子、吉田知史（財團法人 交野市文化財事業団）、一瀬和夫（京都橘大学）、富田卓見（現・茨木市教育委員会）、森真奈美（現・八幡市教育委員会）、幸前音伸、上妻敦子、坂本聰美、竹村亮仁、山崎美輪、中島康佑、須佐見恭子、松田悠乃（敬称略）他諸氏のご教示・ご協力を賜りました。ここに厚く謝意を表します。

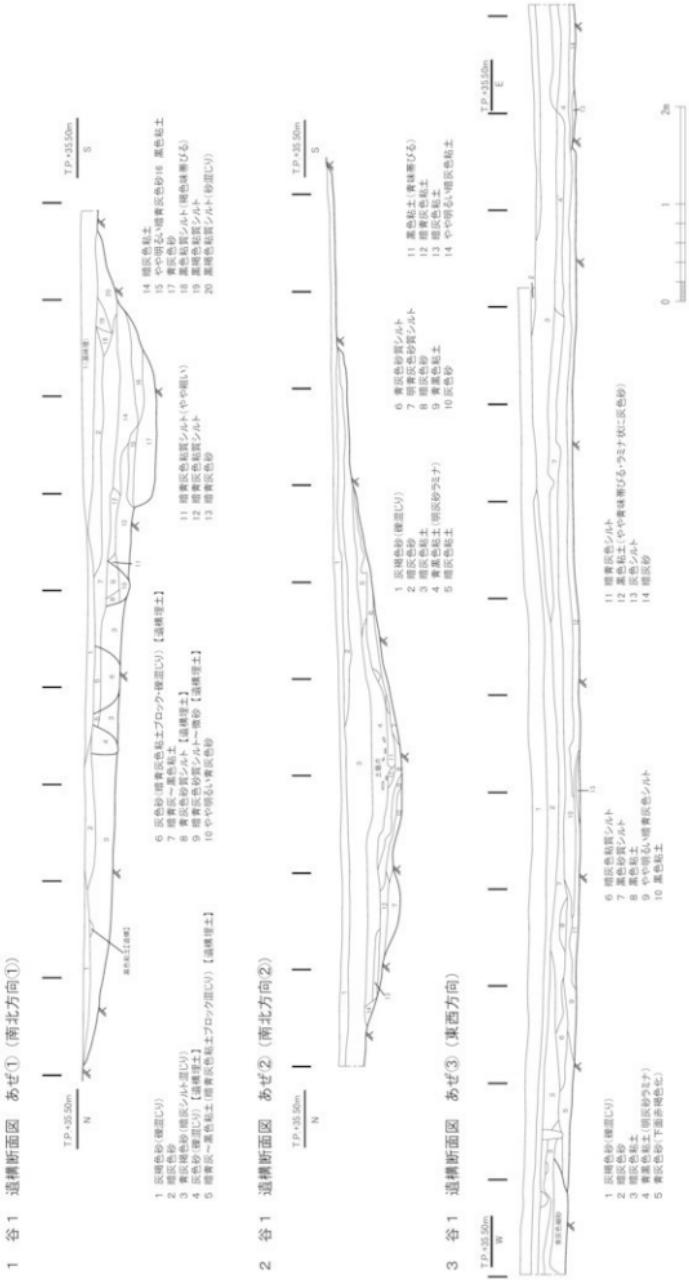


図 21 第Ⅱ調査区第2透構面 谷 透構断面図

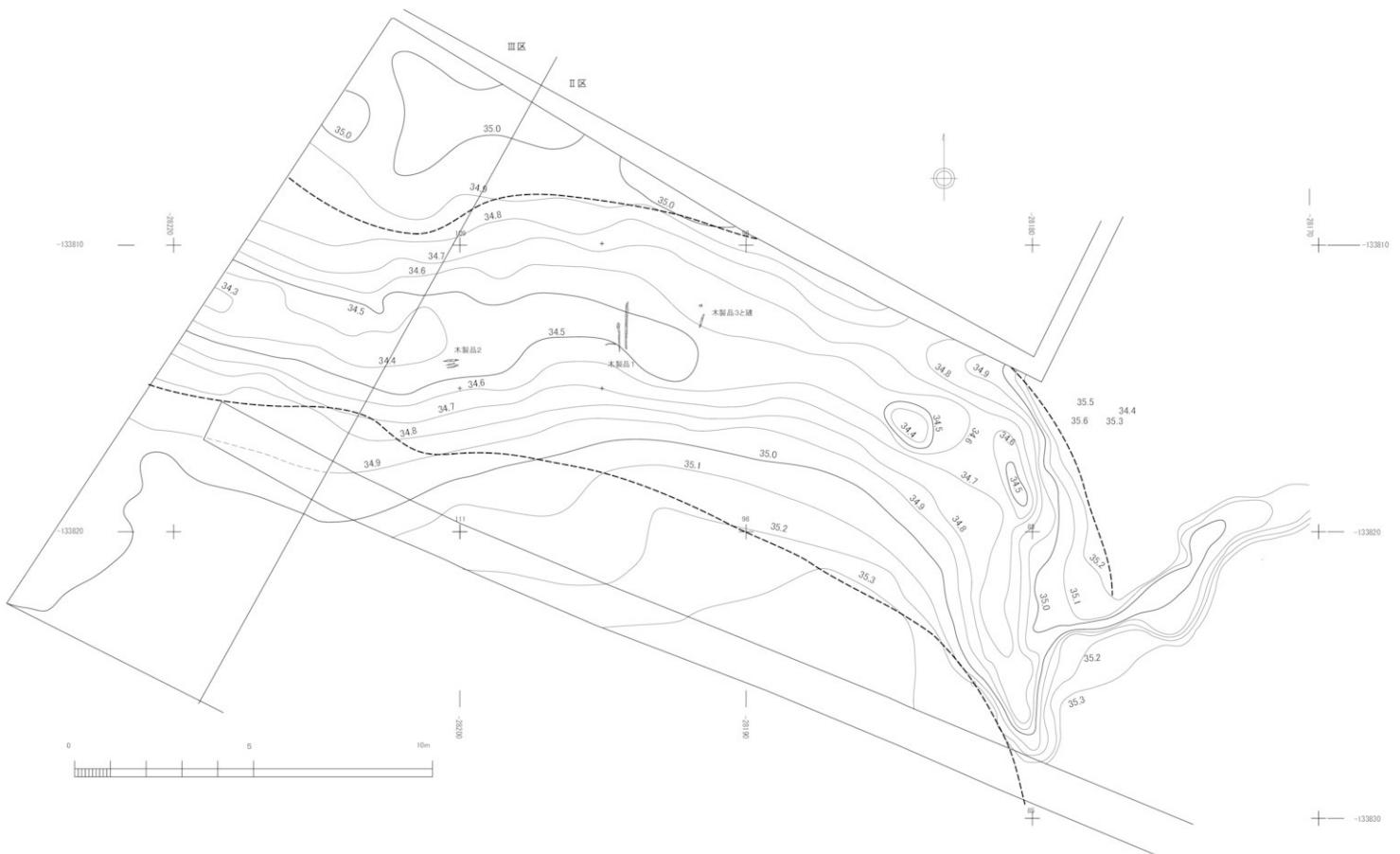


図22 第II調査区第2遺構面 谷 测量図



木製品3と鍵



木製品1

+¹⁰³

+¹⁰⁴



木製品2

+



+¹⁰⁵



図23 第II調査区第2遺構面 谷 木製品出土状況図

第6章 出土遺物について

今回の調査で出土した遺物のうち、もっとも主要なものは土器であるが、その他にも、木製品、瓦片、馬齒など、様々なものが出土した。ここでは、まず、第3遺構面の主だった遺構から出土した古墳時代の土器、つづいて上層から出土した中世以降の土器、そして最後に土器以外の出土遺物について、順にその詳細を述べる。

第1節 主だった遺構からの出土土器（古墳時代）

古墳時代の出土遺物は土器と木製品である。ここでは土器についてのみ扱うこととする。これらの土器の大半は、竪穴住居1・2、土坑SK2-6、谷の4つの遺構から出土したものであり、遺構ごとに報告する。

竪穴住居1

主に生活の痕跡がうかがえる土器が出土した。計8点のうち、須恵器は1点（3）のみで、あとはすべて土師質で炊飯供膳具が目立つ。うち2点、長胴甕（2）と平底鉢（8）は、韓式系軟質土器である。

まず唯一の須恵器である3は、口径13.6cm、高さ4.6cmの完形の杯蓋で、住居の壁溝北東隅の底から口縁を上に向けた状態で出土した。内部には炭化物を含む土が詰まっていた。外面は、天井部まで丁寧に回転ヘラ削りが施され、内側は回転ナデで仕上げられる。ただ、焼成は悪く、生焼けに近い状態であり、胎土も色調も陶邑のものとは一線を画するように見える。むしろ、同じ交野市内の森遺跡から出土する須恵器とはよく似た様相を示す（註1）。天井部と口縁部の境界に稜をもつ。口縁端部はわずかに肥厚して面をもち、その面の中央部に段をもつ。TK208型式に属する（註2）。

1・2及び4～8はすべて土師器である。1は土師器高杯の杯部のみで、住居址の南東隅で口縁が上を向いた状態で出土した。脚部を欠失するものの杯部はほぼ完形に近い。口径は28.1cmと大型で、体部と底部の境界に稜を有する。体部は口縁へ向けて開き、口縁部は外反する。内外面ともに丁寧にナデ仕上げをされた後、密なミガキが施される。2の長胴甕は、口径20.7cm、復元高36.2cm、底部は丸く、口縁部は外反する。いわゆる韓式系土器で、甕と組み合う炊飯具であろう。器面の劣化が著しいものの、外面には縱方向のハケ目が密に施された様子が見える。内面は縱方向の指ナデ痕が残る。底部内面には、反時計回りに絞って、底を閉じた痕跡が粘土にみえる。この長胴甕は、後述する土坑SK2-6出土の長胴甕（20）と直接接合はしないものの、大きさや形状、調整の様子から同一個体にほぼ間違いない。

4・5はともに小型の壺か甕の口縁部で内外面とともに体部はハケ目、口縁部は外面に横ナデ、内面に横ハケが施される。5の方が口縁部の開きは大きく、4は口径9.8cm、で5は12.1cmとなる。6は口径18.6cmの甕で、4・5と同様に体部は内外面とともにハケ目が施され、外面のハ

ケ目は縦方向、口縁部は内面には横ハケが施され、外面は横ナデで仕上げられる。口縁部の屈曲はさほど顕著でない。7は供膳具の小型鉢である。TK216～208型式期に増加する器種である（註3）。口縁端部をわずかに欠くものの、ほぼ完形に近い。最大径が11.9cmで全体的に球形に近い丸底をもつ。外面にはわずかに縦方向のハケ目の痕跡がのこり、内面には水平方向に粘土紐の接合痕が2ヶ所みえ、指で押された跡も残る。また底部内面には煤が付着し、火があたった痕跡もある。8は軟質の韓式系平底鉢である。口径は11.5cm、底径8.2cm、高さ9.9cmで、わずかに外反する短い口縁部をもつ。口縁部は横ナデで仕上げられ、体部外面には格子タタキがみえる。体部内面の上半にはナデられた、下半には回転ヘラ削りの痕跡が残る。体部外面の下端には静止ヘラ削りが1周施される。また、底部外面には、ロクロの痕跡と思われる、いわゆる下駄痕がうっすらとみえる（写真67）。

田中清美氏によると、この時期の長胴甕は概ね口径20cm前後、器高30～40cmあり、丸底

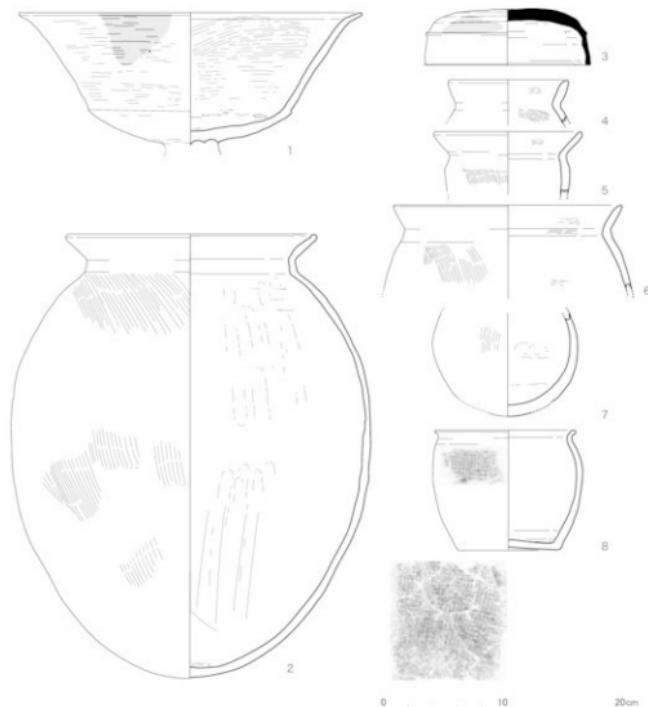


図24 積穴住居1 出土土器

のものが多く、また初期のものはタタキ整形が主体を占めるが5世紀第3四半期以降になると大半がハケ目調整となるという。平底鉢に関しては、初期のものは底部が平底でタタキ整形の後、外面下端部に静止ヘラ削りを加えるが、5世紀第3四半期以降になるとタタキ技法はわずかながら残存するが概ね底部が丸くなりハケ目調整に移行するという（註4）。ここでみた竪穴住居1から出土の韓式系土器では、3の長胴甕が5世紀第3四半期以降の例にあてはまり、平底鉢はそれより古い要素をもつものとなる。平底鉢について、集落跡から出土する韓式系土器の組成の中でも一定量を占め、また横穴式石室でもミニチュア炊飯具とともに副葬される例もあることから、銘々器的な扱いを受けていた可能性を田中清美氏が指摘するように（註5）、倉治遺跡に定住した渡来人が本来の韓式系土器の色合いが濃い土器を長期にわたって保持していたと考える。共伴する須恵器杯蓋（3）もTK208型式であり、この竪穴住居の廃絶年代は、概ねTK208型式期、5世紀中葉といえるであろう（註6）。

竪穴住居2

竪穴住居1と比較すると遺構の残存状況がさほどよくなかったこともあるが、出土土器も極端に少ない。すべて土師器で、計4点が出土し、各々の残存率も低い。

もっとも残りのよいものは、9の製塙土器でほぼ底部近くまで残る。口径4.4cm、残存高8.4cmを測り、内面の底部近くは器面がとてもなめらかである。外面には煤が付着し、内面はナデられた痕跡がみえ、上部に粘土紐を重ねた接合痕が残る。10も同様に外面に煤が付着する製塙土器で、口縁部内面に粘土を絞ったような縱方向の細かな筋が複数はしる。11はやや分厚めで大きく外反する甕の口縁部で口径は15.5cm、横ナデで仕上げられる。体部片を伴わないと断定はできないが、長胴甕の可能性もある。12はおそらく甑の取っ手で、外面は静止ヘラ削りで整形されているが、中央上面に切り込み等はなく、竪穴住居1の韓式系土器と同じ頃のものであろう（註6）。

土坑SK2-6

竪穴住居1の東に隣接して検出したこの土坑からは残存状況のよい土器がもっとも集中して出土した。ここでも土師器（13～20）が多い数を占める。

まず、多くを占める土師器からみる。13の直口壺は劣化が激しく器面もあれているが、外面の体部上半は横ナデと回転ヘラ削りのような痕跡がみえ、肩部以下はハケ目が施される。内面は、外面での削り痕跡にあたる位置には粘土紐の接合痕がみえ、上半はナデ調整が施される。下半には指で押された痕がのこる。橙褐色を呈するこの土

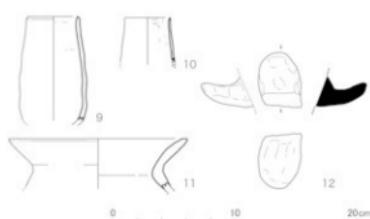


図25 竪穴住居2 出土土器

器は、焼成が悪くとももろい。しかしながらその色調の赤味は顯著で、故意にこのような色に仕上がるよう焼かれた可能性もある。14・15はともに丸みの顯著な小型の壺で、14は口径11.6cm、15は13.1cmで15の方が口縁部がより大きく外反する。14は器面の劣化が著しく、口縁部内外面に横ナデの痕跡がわずかにみえる以外の調整痕は確認できない。15も器面があれているが、外面は口縁部に横ナデ、体部には縱方向のハケ目がみえ、内面にはナデ調整が施されるものの粘土紐を積み上げた痕跡が明瞭に残る。16は口径12.7cmを測り大きくカーブを描いて外反する小型の壺・甕の口縁部で横ナデ痕跡がわずかにみえる。

17の小型杯は口径9.4cmで、丸みをもった体部に、直立に近い短い口縁部がとりつく。口縁部には横ナデが施される様子がみえるが、体部は器面の劣化が著しく、破片も小さいため調整の痕跡が確認できないが、おそらくナデは施される。このような器種は、須恵器が充分に供給される地域ではみられないという（註7）。

18・19はともに椀形高杯である。18は口径14.0cmで、19は口縁端部を欠失するものほ

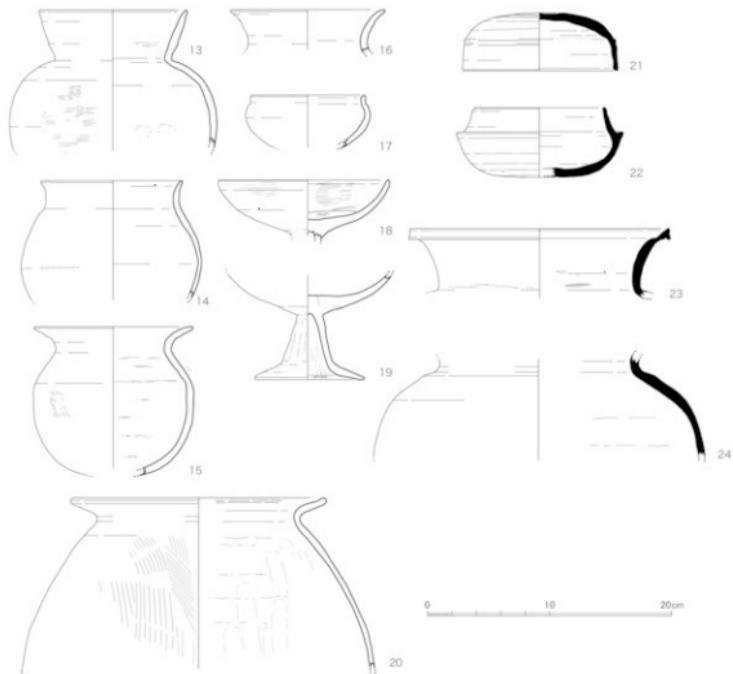


図 26 土坑 SK 2-6 出土土器

ぼ同じ大きさで、焼成や色調もよく似ている。ともに杯部の外面に密にミガキが施され、18の底部内面には暗文もみえる。19の脚部外面は縦方向にヘラ削りで整形されたのちにミガキが施される。内面には筒状の粘土を絞った痕跡が残る。脚部裾は大きく屈曲して折り、その径は9.0cmをはかる。裾部外面は横ナデ、内面は横ハケで、端部は丸く仕上げられる。

20の甕は上半のみがこの土坑から検出したが、前述のように、竪穴住居1出土の長胴甕（2）と同一個体である。成形・調整の痕跡、焼成、色調すべて同一個体とみて違和感はない。また、図化はしていないが、取っ手を欠失した甕の体部片（写真81左）もこの土坑SK2-6から出土した。内面は韓式系土器の製作技術を採用したような丁寧な板ナデ仕上げで、削りの痕跡がみえない。これは、枚方をはじめ北河内によくみえる地域色であるといわれる（註8）。外面には通常のハケ目が施される。

須恵器杯21・22の蓋と身は、ともに生焼けに思えるほど環元焼成でなく、おそらく一对である。21の蓋は口径が12.6cm、器高4.8cmを測り、天井部外面は頂部まで丁寧な回転ヘラ削りが施される。竪穴住居1出土の杯蓋（3）よりはプロポーションにやや丸みがあり、わずかに新しい様にもみえるが、1型式分の差ではなく、ともにTK208型式に比定できるであろう。天井部と口縁部の境界には稜があり、口縁端部はわずかに内傾する面をもち、その面の中央は凹む。22の身も底部外面には丁寧な回転ヘラ削りが施される。立ち上がりは高く、わずかに内傾する。焼成が悪く生焼け状態なので摩滅が著しく口縁端部は丸くおさめられ蓋のような面をもたないようみえる。口径10.8cm、受け部径13.8cm、器高5.6cmを測る。23は須恵器甕、24は壺の破片である。23の口縁部は横ナデ仕上げ、24の体部内面にはナデ調整はみえるが、粘土紐の接合痕も残る。ともにオリーブがかった色調をしており、焼成もプロポーションも悪く、上手につくられたものとはいえない。在地生産による可能性が高いとみる。

須恵器蓋杯（21・22）のTK208型式をみても、楕形高杯の比率が高く、体部が丸みをもって張る小型の壺・甕・鉢等を含む組成の土器師の組成をみても、竪穴住居とほぼ同時期、辻編年の4段階（註9）、5世紀第3四半期前後に比定できる。さらに、竪穴住居1と同一個体の長胴甕が出土したことからみても、これらの遺構は併行して存在したことがわかる。しかしながら、楕形高杯（18・19）はともに、杯部が比較的浅く、丸みをもち、TK208型式よりやや新しいようみえる。また須恵器杯（21・22）についても、TK208型式に比定できるものの、竪穴住居1出土のものよりは、器高が高くなつて丸みを帯び、やや新しい要素をもつ。2棟の住居址とこの土坑の出土土器を比較すると、ほぼ併行するものの、土坑SK2-6の方がやや新しい年代のものを多く含むことになる。

谷

これまでに挙げた竪穴住居1・2及び土坑SK2-6の3つの遺構からの出土土器では、すべてにおいて土器師が圧倒的多数を占めるのは異なり、谷からの出土土器は須恵器が圧倒的に多い。またそれらの須恵器の中には、前掲の生焼け須恵器とは明らかに異質の、シャープなつくり

で焼成も堅緻な陶邑産のものと比較しても遜色のないようなものも含まれる。25～29は須恵器、30～35は土師器である。35～37は谷の中ではなく、周辺から出土した須恵器である。

まず、谷内部の同地区から出土した25と26の須恵器杯蓋と身は一对である。焼成も堅緻で薄くてシャープなつくりをしており、在地生産によるものとは思えない。蓋（25）は口径12.5cm、器高4.8cm、天井部外面は頂部まで回転ヘラ削りが施され、一部灰かぶりの痕がみえる。身（26）は、口縁10.3cm、器高4.4cm、こちらも底部外面は、蓋（25）の天井部ほど丁寧ではないが、全面に回転ヘラ削りがほどこされる。底部内面は回転ナデ仕上げであるが、ところどころ指の痕がのこる。ともに口縁端部は内傾する面をもち、その端面の中央にはわずかに凹む。これまで報告した竪穴住居1や土坑SK 2-6出土の須恵器杯（3・21・22）と比較すると、同様にTK208型式の範囲内におさまるが、身（26）は受け部のつくりなど、やや新しい印象をうける。27は印象的な暗赤褐色を呈する須恵器杯身である。全体的に分厚く鈍いつくりで、在地生産の可能性が高い。口径13.1cm、器高5.2cmと深く、プロポーションからみて欠失する底部は平底に近い形状が想定できる。口縁端部は肥厚し丸みはあるが、内傾する面をもつ。前掲の須恵器杯（25・26）よりも新しく、TK10型式に比定できるであろう。

28はシャープで堅緻なつくりの趣で、陶邑産のものと比較しても遜色がない。口縁部を欠失するが、頸部径5.9cm、体部高7.5cmを測る。体部は内外面ともに横ナデ仕上げで、肩部には一部灰がかぶる。体部中央に穿孔され、8条の波状文が施される。底部外面はタタキで仕上げら

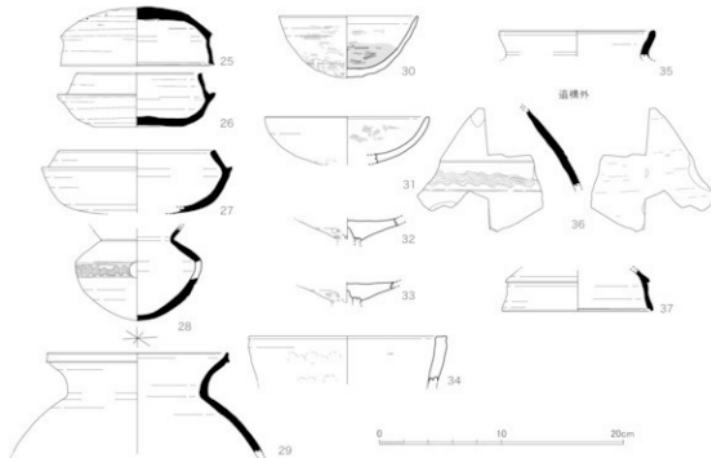


図27 谷他 出土土器

れ、内面には指頭圧痕が残る。また、底部外面のほぼ中央に米印のヘラ記号がある。これも他の出土須恵器と比較するとやや新しく、ほぼTK23型式に比定できる。また、この甌は、棒状の木製品1点と並んで谷の中央部から出土した（図22の上部参照）。祭祀をともなう廃棄である可能性も示唆される。体部の内面には、黒い液体状のものがべつとりと付着しているが、土器本来の用途あるいは焼成時とともにものであるとは断定できない。位置的に穿孔部から何かが流れ込んだ場合に溜まる位置であり、出土状況は穿孔部を上に、その液体が付着する部分を底にしていたため、埋没時に流れ込んだものである可能性もある。

29の須恵器甌は谷の北肩付近から出土した。内外面ともに、口縁部は横ナデが施される。体部は、外面は肩部付近、内面は全面ではタタキ目がナデ消され、体部外面の下方へいくとタタキ目が残る。口径14.7cm、焼けむらはあるが堅敏である。

他に谷から出土した須恵器には、図化していない破片が数点ある（写真89参照）。2段の8条波状文を有する暗灰色の甌、あるいは甌の口縁部片（写真89上段右）は谷理土から、2段の8条波状文を有する灰白色の甌頸部の破片（写真89中段右）は谷の北肩付近から出土した。白っぽい胎土の後者は在地産による可能性もある。また、一見何かの底部に高台が付いているかのようにはあるが器形がはっきりしない須恵器の小破片3点（写真89中段左）が出土している。これらは断面が紫味を帯びた灰色を呈し、焼成はよい。

出土総数は須恵器ほど顕著ではないが、土師質のものも一定量この谷から出土した。30は淡橙を呈する土師質の椀で、内面に一部煤が付着する。おそらく製塙土器であろう。口径11.4cm、器高5.1cmを測り、外面は横ナデ仕上げで棒状の工具でこすったような痕が残る。内面にも同様の工具痕がみえる。底部外面には指頭圧痕が残るが、上からその工具による調整が施される。

31～33は楕円高杯で、31と32は出土地とともに谷内ではあるがやや距離がある。しかし、様々な特徴が一致し、直接接合はないがおそらく同一個体であろう。31は口径13.5cmで杯部は丸みをもつが比較的浅く、土坑2～6出土のもの（18）と同様、辻編年の4段階（註10）に比定できる。口縁端部は内外面ともに横ナデが施され、杯部内面はハケ目、外面は横ナデが施される。外面の杯部底部付近では指頭圧痕がのこる。32・33は杯部底部のみの破片で、内面は中央部ではナデ、体部が立ち上がる付近ではハケ目がみえる。外面の底部中央、脚部が貼り付けられた痕跡のある位置には縦方向のハケ目が残る。底部外面中央には脚部を差し込んだ孔が残る（写真88下段左・中央）。34は甌の口縁部片で、端部は内外面ともに横ナデが施され、平たい端面をもちその中央がやや凹む。体部は内面にはヘラ削りの痕、外面には指で押された痕がのこる。この他にも、数点甌の破片は谷内部から出土しており、内1点（写真88中段左から2番目）は木製品と甌が出土した付近でみつかった。35は谷理土の断面観察用のあぜで検出した甌の口縁部片で、内外面ともに横ナデが施される。

遺構周辺

その他に、厳密には遺構内ではないが前掲の遺構周辺から出土した古墳時代の土器もここで報

告する。36は波状文が施された、器形不明の須恵器体部片である。ただ、破片の上端はくびれた痕跡がみえ、おそらく頸部にあたる。37の須恵器杯は口径12.5cmを測る口縁部片で、内外面ともに横ナデ仕上げである。口縁部はわずかに下方に拙り、端部は内傾する面をもち、その中央は凹む。つくりは薄手であるがやや鈍く、焼成はあまりよくない。おそらくTK208型式に比定できる。ともに、土坑SK2-6付近から出土した。

また第Ⅲ調査区の土坑SK3-3から出土した土師器甕の破片（写真91左参照）は、残存状況がよくないものの、体部外面にわずかにハケ目の痕跡がみえる。やや分厚い口縁部をもち、長胴甕になる可能性も高い。

小結

第3遺構面の主だった遺構からの出土遺物を概観したが、概ねすべての遺物は5世紀後半期前後、須恵器でいうTK208型式前後に当たり大きな差はない。これを遺構の廃絶年代としてよいであろう。生活の場である住居址からは土師器が主に出土し、中でも炊飯・供膳具がその大半を占める。北河内の在来のものに加えて、韓式系土器も使われている。ある程度定着化は進んだものの、この地が渡来人系の集落であった可能性は高い。在地の生活スタイルに移行期であったのかもしれない。また、須恵器の多くについては、焼成が悪く、つくりが不格好で、在地で生産されたと考える。土師器の供膳具が多く出土することからも、須恵器の供給は充分でなかったのであろう。

（小川）

（註1） 交野市教育委員会 1997『森遺跡』V

（註2） 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

本稿での須恵器編年は、今後逐次註記しないが、すべてこれに依拠する。

（註3） 辻 美紀 1999『古墳時代中・後期の土師器に関する一考察』『国家形成期の考古学』

大阪大学考古学研究室10周年記念論集 大阪大学考古学研究室 pp.351-365

（註4） 田中清美 2005『河内湖周辺の韓式系土器と渡来人』『ヤマト王権と渡来人』

大橋信弥・花田勝広編 サンライズ出版 pp.65-89

（註5） 前掲註4）参照

（註6） 長原周辺地域を中心に、辻美紀氏がまとめた河内地域の古墳時代中期の土師器編年をみても、5世紀後半期前後に比定して、概ね遜色のない組成である。

財団法人 大阪市文化財協会 2002『長原遺跡発掘調査報告』IX

財団法人 大阪市文化財協会 2005『長原遺跡発掘調査報告』X II

辻 美紀 1999『古墳時代中・後期の土師器に関する一考察』『国家形成期の考古学』

大阪大学考古学研究室10周年記念論集 大阪大学考古学研究室 pp.351-365

（註7） 中久保辰夫氏（大阪大学大学院）のご教示による。

（註8） 同上

（註9） 前掲註3）参照

（註10） 前掲註3）参照

表1 出土土器觀察表 古墳時代

番号 登録 番号	出土地 点	器種	種類	時代	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	調査 内面		色調 内面		土工 構成	実測 写真 番号		
								外面	内面	外面	内面				
1 326 〔1〕	堅穴1 高杯	土器皿	灰	中葉	29.1	-	(10.5)	ヨコナダ ミガキ	ヨコナダ ミガキ	赤褐色～淡褐色	淡褐色～淡褐色	赤褐色～淡褐色	良 101 61		
2 380 〔1〕	堅穴1 長柄 便	土器皿	灰	中葉	(20.7)	-	36.2	ヨコナダ タツナハ・黒底	面ナダ (タツナハ)	内面に渦巻き (反時計回り)	淡黄褐色～ 浅黃褐色	浅黃褐色～ 淡黃褐色	小穴 板	良 140 62	
3 386 〔1〕	堅穴1 杯底	土器皿	灰	中葉	TK208	13.6	-	4.6	ヨコナダ 回転ケズリ	内面回転ナダ 内面回転ナダ	内面回転ケズリ 内面回転ナダ	白褐色～ 褐色	白褐色～ 白褐色	板(生)	良 105 69
4 382 〔2〕	堅穴1 小型 便	土器皿	灰	中葉	(9.8)	-	(3.7)	ヨコナダ (体部・器面既)	ヨコナダ	-	明褐色	明褐色	小穴 板	良 103 68	
5 382 〔2〕	堅穴1 小型 便	土器皿	灰	中葉	(12.1)	-	(10.1)	ヨコナダ タツナハ	ヨコナダ タツナハ	ハケメ	-	淡褐色	淡褐色	小穴 板	良 102 65
6 384 〔2〕	堅穴1 便	土器皿	灰	中葉	(18.6)	-	(7.0)	ヨコナダ (体部既面既)	ヨコナダ (タツナハ既)	-	明褐色～暗褐色	明褐色～明褐色	明褐色～明褐色	良 104 68	
7 377 〔2〕	堅穴1 銘	土器皿	灰	中葉	-	龜大	(8.5)	タツナハ	ナダ(タツナハ)	外・ハケメ 内・スズメ	明褐色～淡褐色	明褐色～淡褐色	小穴 板	良 106 64	
8 377 〔2〕	堅穴1 平底 銘	土器皿	灰	中葉	(11.5)	(8.2)	9.9	ヨコナダ タツナハ	ヨコナダ タツナハ	内・内底ナダ (スヌ)	赤褐色～明褐色	赤褐色～明褐色	小穴 板	良 111 65	
9 379 堅穴2 製風	土器皿	灰	中葉	(4.4)	-	(8.4)	スズメ付着	ナダ	内面面既	白	白褐色～ 白褐色	白褐色～暗褐色	小穴 板	良 109 67	
10 336 〔2〕	堅穴2 製風	土器皿	灰	中葉	(3.6)	-	(3.6)	器面既 (一部スヌ)	器面既 (一部スヌ)	-	白	白褐色～ 白褐色	白褐色～暗褐色	良 110 70	
11 397 〔2〕	堅穴2 便	土器皿	灰	中葉	(15.5)	-	(3.9)	ヨコナダ	ヨコナダ	-	白	白褐色～ 白褐色	白褐色～暗褐色	小穴 板	良 107 71
12 399 〔2〕	堅穴2 北東角 取手	土器皿	灰	長柄 中葉	厚み	近輪	(13.5)	相間正板 相間ナダ	器面既	-	淡黃褐色	-	白褐色	良 108 71	
13 346 SK2-6 〔4〕	直口 道	土器皿	灰	中葉	(12.1)	-	(11.0)	ヨコナダ タツナハ	ナダ	相オナエ 相オナエ	相転～淡褐色	相転～淡褐色	小穴 板	良 129 78	
14 343 SK2-6 〔1〕	小型 道	土器皿	灰	中葉	(11.6)	-	(9.0)	ナダ(体部既)	ハケメ	-	相転～淡褐色	相転～淡褐色	小穴 板	良 127 75	
15 351 SK2-6 〔6〕	小型 道	土器皿	灰	中葉	(13.1)	-	(12.2)	ヨコナダ (一部スヌ)	ヨコナダ (粘土接合既)	-	淡褐色～淡褐色	淡褐色～淡褐色	小穴 板	良 115 77	
16 326 SK2-6 便	土器皿	灰	中葉	(12.7)	-	(3.5)	ヨコナダ ハケメ	ナダ(一端スヌ)	-	明褐色～ 二二・白	明褐色～ 二二・白	明褐色～ 二二・白	良 126 -		
17 313 SK2-6 便	土器皿	灰	中葉	(9.4)	-	(4.3)	ヨコナダ	ナダ?	-	明褐色	明褐色	小穴 板	良 122 81		
18 349 SK2-6 〔2〕	高杯	土器皿	灰	中葉	14.0	-	(4.7)	ヨコナダ ミガキ	外・脚輪付既 内・内底ナダ	ミガキ	淡褐色～ 淡褐色	淡褐色～ 淡褐色	小穴 板	良 114 73	
19 345 SK2-6 〔2〕	高杯	土器皿	灰	中葉	-	9.0	(8.5)	ミガキ 脚輪付内・ハラ タツナハ	脚輪付ナダ ミガキ	淡褐色～ 淡褐色	淡褐色～ 淡褐色	淡褐色～ 淡褐色	良 116 74		
20 345 SK2-6 〔2〕	便	土器皿	灰	中葉	(21.0)	-	(14.0)	ヨコナダ 脚輪既	ヨコナダ 脚輪既	-	淡褐色～ 淡褐色	淡褐色～ 淡褐色	小穴 板	良 128 76	
21 347 SK2-6 〔2〕	直口	直口 道	灰	中葉	TK208	12.6	-	4.8	ヨコナダ 回転ケズリ	回転ナダ	外・内底ケズリ 内・回転ナダ	淡褐色～ 淡褐色	淡褐色～ 淡褐色	良 122 79	
22 344 SK2-6 〔2〕	身	直口 道	灰	中葉	TK208	10.8	13.8	5.6	ヨコナダ 回転ケズリ	回転ナダ	外・内底ケズリ 内・回転ナダ	白褐色～ 淡褐色	白褐色～ 淡褐色	小穴 板	良 113 89
23 326 SK2-6 便	土器皿	古墳 中期	(21.4)	-	(5.6)	ヨコナダ	(土接合既)	ヨコナダ	灰～ オーバープ	白褐色～ 淡褐色	白褐色～ 淡褐色	白褐色～ 淡褐色	良 135 -		
24 330 SK2-6 〔5〕	便	直口 道	灰	中葉	(16.6)	-	(8.3)	ヨコナダ	(土接合既)	ヨコナダ	明褐色～ 淡褐色	明褐色～ 淡褐色	小穴 板	良 124 81	
25 392 E2	谷	直口 道	灰	中葉	TK208	(12.3)	4.8	ヨコナダ (スヌ)	回転ナダ	外・ケズリ 内・回転ナダ	明オリーブ 明オリーブ	明 (空心) 明	良 117 84		
26 361 E2	谷	杯身 直口 道	灰	中葉	TK208	10.3	7.1	4.4	ヨコナダ 回転ケズリ	回転ナダ	外・内底ケズリ 内・回転ナダ	明オリーブ 明オリーブ	明 (空心) 明	良 116 85	
27 366 E2-3 谷	身	直口 道	灰	中葉	TK10	(13.1)	-	(5.2)	回転ナダ 回転ケズリ	回転ナダ	明オリーブ 明オリーブ	明 (空心) 明	良 129 89		
28 371 E2-F2 谷	身	直口 道	灰	最大 5.9	10.3	(7.5)	ヨコナダ 脚輪既	ヨコナダ 脚輪既	外・タツナハ 内・脚輪既	灰	灰	灰	良 125 83		
29 369 F2	谷	直口 道	灰	中葉	TK208	(14.7)	-	(8.2)	ヨコナダ タツナハ消し	ヨコナダ タツナハ消し	-	灰白	灰	良 133 86	
30 367 E2	谷	直口 道	灰	古墳 中期	TK208	11.4	-	5.1	ヨコナダ 筋状・具輪 (一部スヌ)	ヨコナダ 筋状・具輪 (一部スヌ)	ナダ・工具既 (一部スヌ)	外・脚輪付 内・工具既	脚輪	良 119 87	
31 357 F3	谷	身	直口 道	灰	中葉	(13.5)	-	(3.9)	ヨコナダ 脚輪既	ヨコナダ ハシメ	ヨコナダ ハシメ	二二・黄褐色 二二・黄褐色	二二・黄褐色 二二・黄褐色	良 132 89	
32 409 G3	谷	身	直口 道	灰	中葉	(2.6)	-	(1.6)	ナダ・ハケメ 脚輪既	ヨコナダ	-	二二・黄褐色 二二・黄褐色	二二・黄褐色 二二・黄褐色	良 130 89	
33 364 F2	谷	身	直口 道	灰	中葉	(2.4)	-	(1.5)	ヨコナダ ハケメ	ナダ・ハケメ	-	二二・黄褐色 二二・黄褐色	二二・黄褐色 二二・黄褐色	良 129 89	
34 369 F2	谷	身	直口 道	灰	(16.4)	-	(8.2)	ヨコナダ 指オナエ	ナダ・ハケメ ハケメ	-	脚輪灰	脚輪灰	良 134 89		
35 276 B2-B3	谷	直口 道	灰	中葉	-	-	-	-	ヨコナダ 段状既	ヨコナダ	-	灰白	灰	良 136 91	
36 391 E2	谷	身	直口 道	灰	中葉	(12.8)	-	(2.2)	ヨコナダ	ヨコナダ	-	脚轮灰	脚轮灰	良 131 89	
37 325 B3 2面	杯底	直口 道	灰	中葉	(12.5)	-	(3.3)	回転ナダ (スヌカブリ)	回転ナダ	-	淡褐色	淡褐色	小穴 板	良 98 -	

※()内値は反転復元前の値及び残存高

* この項で報告した出土土器の観察・所見などについては、田中清美（財団法人 大阪市博物館協会）、一瀬和夫（京都橘大学）、大竹弘之（枚方市教育委員会）、西田敏秀（財団法人 枚方市文化財研究調査会）、吉田知史（財団法人 交野市文化財事業団）、中久保辰夫（大阪大学大学院）をはじめ諸氏のご教示を賜りました。ここに記して厚く御礼を申し上げますとともに、その他いっさいの誤認や観察不足による間違いについては筆者の責任の負うところにあります。

第2節 他の出土土器について（中世以降）

ここでは、上層で出土した中世以降の土器を報告する。まず、第I調査区の南西隅の一角で検出した区画遺構の淡灰褐色砂（図6-2断面図2e層に相当）では瓦器を中心に一定量の土器片がまとめて出土したため、それを報告し、小溝などその他の遺構から出土したものがそれに続く。その後は、土師器・瓦器・陶磁器の順に各々種別にまとめた。

第1遺構面 淡灰褐色砂層

1～5はすべて瓦器椀である。この遺構内の出土に限らず、本調査で出土した瓦器は大半が樟葉型と呼ばれるものに類似する（註1）。1は口径11.8cmを測り、外面は器面があれ調整痕が不鮮明であるが、内面にはミガキが施される。口縁部は湾曲せずにまっすぐ外傾し、端部は丸く收められる。2は口径12.2cmで、外面には横ナデと指頭圧痕が、内面にはミガキが残る。やや厚めの口縁部が上方に向かって丸みをもちながらほぼ垂直に屈曲し、端部は丸くおさめられ、内側に段を有する。3も口径12.2cmを測り、わずかに体部が内湾しながら外に開き、口縁端部でわずかに肥厚する。外面には横ナデと粗いミガキが施されるが指頭圧痕がこる。内面には、比較的密なミガキが施される。この2点（2・3）は概ね13～14世紀頃の樟葉型瓦器椀であろう。4は口径12.9cm、体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁部でわずかに屈曲する。口縁端部は丸く、内側に圓線状の凹みがみえる。口縁部外面のミガキは比較的密であるが、体部には指頭圧痕がこる。内面も全体的に粗いがミガキが施される。前述の1～3と比較するとミガキは丁寧でやや古い12世紀頃までのものと推定できる。5は体部から口縁部にかけて直線的に外傾して広がり、口径16.1cmを測る。内面にはミガキの痕跡が、外面には指頭圧痕が残り、口縁端部

は横ナデで丸く仕上げられる。器面のあれが著しく、それ以上の詳細は観察できない。

6は底径9.1cmの瓦質のすり鉢で、15世紀後半から16世紀頃のものにあたる。7条で一単位の溝が彫られ、底部外面は調整が施されないままである。

7は中世の輸入白磁碗で、口径9.4cmを測り、丸い縁をもつ。

8～12はすべて土師器の小皿で、個々に多少の年代差はある、概ね中世におさまる。8は口径6.6cmで、内外面ともに横ナデで仕上げられる。口縁端部がわずかに外反し、断面が丸みを帯びた三角形を呈する。9は口径7.2cmを測り、

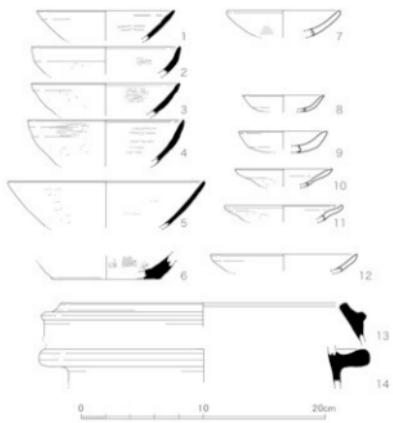


図28 淡灰褐色砂 出土土器

全体が分厚く、口縁端部の断面は丸みを帯びた三角形である。内外面ともに器面があれ、調整痕の確認は難しいがなめらかで指頭圧痕は残らない。10は口径7.9cm、体部から屈曲して外に開く口縁部は横ナデ仕上げで、端部で肥厚し、断面形は三角形に近い形状を呈する。体部外面には指頭圧痕が残る、15世紀頃のものであろう。11は口径9.6mの退化が進んだての字皿で、他の出土遺物よりやや古く11～12世紀頃のものか。口縁部は横ナデ仕上げで、端部は丸い。体部外面には指頭圧痕が残る。12は口径11.3cmを測り、内外面ともに横ナデが施される。口縁端部は面取りがほどこされる。体部から底部にかけて指頭圧痕が残っていた可能性が高い。

13・14はともに瓦質の釜である。13は口径23.6cm、鍔部の最大径26.6cmを測る三足釜で、口縁部には横ナデが施される。14は口縁端部を欠失するが、鍔部の最大径が27.3cmで、鍔の裏側（下部）には煤が付着する。

その他に図化していないが、写真93-1・2の須恵質の練り鉢で13～14世紀頃に比定されるものや、12世紀ごろの東播系の同じく練り鉢（写真93-3）、その他にも須恵質の土器の底部が数点（写真93-4・5・6）出土した。

全体的に遺物は13～14世紀頃のものが多く、さらに遡る遺物も含む。第I調査区のその他第I遺構面上遺構からの出土遺物より古い年代を示す。これは、当該遺構は第I遺構面と同時に検出されたものの、第I調査区南壁断面（図6）でもみえるように第I調査区の南端近くは3層の堆積が厚く、これらの遺構及び遺物は第II調査区でいう第2上遺構面に対応することによる。この2箇所での出土遺物を比較しても概ね年代は矛盾しない。

小溝他遺構

15～21はすべて第I調査区第2遺構面及び第II調査区第2上遺構面から、あるいは遺構面で検出した鋤跡の小溝内から出土したもので、うち15～19はすべて土師器である。15は口径6.9cmで、溝SD57から出土した小皿である。口縁部は内外面ともに横ナデが施され、端部の断面形状は丸みを帯びた三角形である。底部外面に指頭圧痕が残る。16は口径9.3cmの退化したての字皿で11～12世紀頃のものであろう。溝SD59から出土した。内外面ともに口縁部は横ナデ、底部は指頭圧痕が残る。口縁端部は丸く内側に折り返され、内側に沈線状の凹みがみえる。17は口径8.6cmで溝SD2-57から出土した小皿で、口縁端部の断面は丸みを帯びた三角形を呈する。口縁部の横ナデは強めに施されるため、外面がやや凹む。体部から底部にかけては、内面は横ナデが施され、外面には指頭圧痕が残る。18は第II調査区第2上遺構面の溝SD2-10から出土した口径12.9cmを測る杯で、内面は全面的に横ナデが施され、外面では口縁部が強めにナデられてやや凹み、わずかに屈曲して立ち上

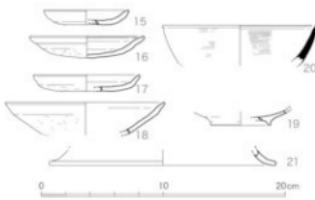


図29 その他の遺構内 出出土器

がる。体部外面には指頭圧痕が残る。口縁端部の断面形状は丸みを帯びた三角形で、やや新しく15～16世紀のものか。19は径が4.9cmの貼り付け高台をもつ楕で、高台の断面形状は台形を呈する。内面は磨耗が激しいものの、内外面とも全体的に横ナデ調整がみえる。

20は内外面ともに密にミガキが施され、丁寧なつくりの瓦器楕で、口径12.5cmを測る。口縁端部は強くナデられて内側に圓線状の凹みをもち、断面形状は丸い。樟葉型の12世紀頃のものであろう。21は底径18.4cmを測る土師器の高杯脚部で、柱穴P46から出土した。内外面ともに横ナデで仕上げられ、裾は外反しながら端部に平らな面をもつ。

ここであげた土器も概ね中世のものばかりで、第2遺構面の遺構から出土のものはやや古く11～12世紀のものも含まれる

土師器

22～36は主に遺物包含層から出土した土師器で、22～30は小皿である。22・23はともに内面から外面の口縁部までは横ナデ、底部外面は指頭圧痕が残り、体部から口縁部は大きく外傾する。口縁端部の断面形状は三角形を呈する。底部が残存していないため断定はできないが、推定できる形状から14世紀頃のへそ皿の可能性がある。24はやや浅く平底気味で、全体的に横ナデ調整で仕上げられる。口縁端部の断面形状は三角形、口径は7.1cmを測る。25は口径7.4cmでやや深く、内外面ともに横ナデ仕上げである。口縁部の横ナデがやや強めに施されるため端部はわずかに外反し、断面形状は丸みを帯びた三角形になる。26は口径8.4cm、27は8.8cm、とともに横ナデ仕上げであるが、口縁部が26では屈曲して大きく広がり、27では分厚めできつめの傾斜で立ち上がる。28・29はともに屈曲して大きく外形する口縁部をもち、内面から口縁部外面は横ナデが施され、体部外面には指頭圧痕が残る。端部断面の形状はわずかに内湾する細めの三角形を呈し、口径もともに10.4cmを測る。これらはやや新しく、16～17世紀頃のものに比定できる。



図30 土師器

30は口径10.5cmのきわめて浅い小皿である。指頭圧痕が残る底部外面以外は横ナデが施される。口縁端部は厚く丸く、内側に折り返されさらに肥厚する。31は土師器の杯で口径11.6cmを測る。指頭圧痕の残る外面の体部から底部にかけて以外は横ナデが施される。口縁部断面の形状は丸みを帯びた三角形を呈する。32は27と同じタイプで、口径7.7cmを測る。これはさらに上層の第1遺構面の小溝SD18から出土した。

33・34は口径が10cmをこえる土師器皿で、33で10.1cm、34で11.9cmを測る。

33は全体的に横ナデが施されるが、口縁部の横ナデがやや強く、端部がわずかに外反する。その断面形状は丸味の強い三角形を呈する。34は底部から体部にかけて屈曲せずに緩やかに丸味を帯びて立ち上がり、口縁部は大きく外に広がる。わずかに肥厚して丸い口縁端部は内側に沈線状の凹みをもち、指頭圧痕が残る底部外面以外はすべて横ナデが施される。

35は土師器小型壺あるいは甕の口縁部で、内面には横ハケ、外面には横ナデが施される。口径は残存部で8.8cmが復元できるが、残存率が極めて低いため、ひずみを考慮するともう少し大きくなる可能性が高い。36は口径26.0cmの土師器甕で、内外面ともに横ナデで仕上げられる。口縁端部は肥厚し、内湾する。

瓦器

37～44は瓦器榤である。37は口径9.7cmを測り、外面下半に指頭圧痕が残る。口縁部仕上げ時に強くナデされたためか体部から口縁部の境界でやや外反し、口縁端部で屈曲する。38は口径10.5cmで、内面にはミガキが施され、外面には指頭圧痕が残る。39は口縁が大きく外反し、端部で肥厚する。口径は10.8cmを測り、外面にはミガキが施される。これらは本調査で多く出土する樟葉型のものには属さない。40は全体的に内湾する深めのプロポーションに、口縁端部は丸く仕上げられるがわずかに内傾する面をもち、その面には圓線状の凹みがみえる。外面は器面の磨耗が著しく調整の痕跡がみえないが、内面には密なミガキと暗文が施される。41は口径が14.9cmと比較的大型ではあるが、口縁端部の形状が40に類似し、この2点は樟葉型に属する。内外面ともに比較的密なミガキが施される12世紀頃のものであろう。42は体部から口縁部に

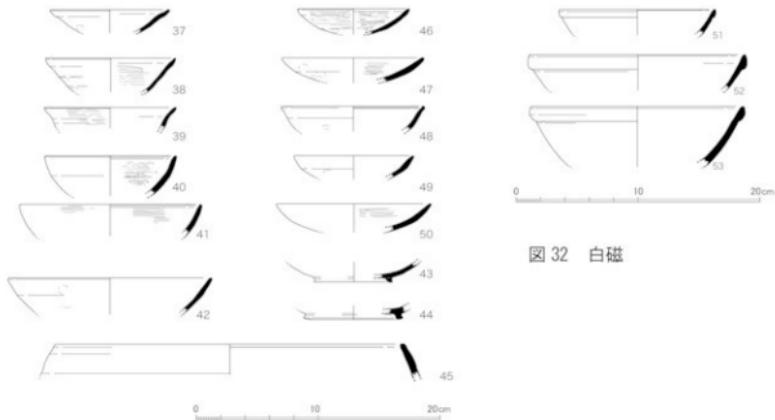


図31 瓦器

図32 白磁

かけて大きく開き、口径 16.5cm を測る。内面は器面がアレで調整痕が確認できないが、外面には指頭圧痕がのこる。口縁部でわずかに屈曲し、端部は丸く仕上げられる。退化の進んだ 14 世紀後半頃のものであろう。

43・44 は瓦器椀の高台付き底部である。43 は底径 6.3cm を測る貼り付け高台はやや退化し、断面が三角形に近い台形を呈する。器面の摩滅が著しく調整痕はほぼ確認できないが、退化した高台から 14 世紀後半頃のものであろう。44 はしっかりと踏ん張った断面台形の貼り付け高台をもち、その径は 8.0cm を測る。内面は摩滅しているが、外面にはわずかにミガキ痕が確認でき、底部まで丁寧にミガかれ、光沢をもった明灰色を呈する。12 世紀頃に比定できる。

45 は口径 28.5cm を測る三足釜の口縁部である。残存部下端近くの外面には鈸が貼り付けられていたであろう痕跡が残る。内外面ともにナデで滑らかに調整されている。このほかにも、圓化はしていないが三足釜の脚や羽釜の破片は多く出土した（写真 97 参照）。

46 は内外面ともに密なミガキが施され、底部内面には暗文もみえる。口径 9.2cm を測る瓦質の小皿である。底部外面には指頭圧痕が残り、口縁端部はわずかに肥厚する。丁寧なつくりから他より比較的古く 12 世紀頃のものであろう。47 は深めの小皿もしくは瓦器椀で、口縁端部が丸くおさめられ、口径は 11.6cm を測る。外面には指頭圧痕、内面にはミガキの痕跡が残る。48 は口径 11.7cm を測る瓦器椀で、口縁端部の断面形状は 41 同様の丸い端部の内側に圓錐状の凹みをもつものであるが、口縁部がわずかに外反する。外面には指頭圧痕と、わずかにミガキの痕跡が残る。

49 は第 1 遺構面の溝 SD43 から出土した瓦器椀もしくは小皿で口径 9.8cm を測る。体部と口縁部の境で屈曲し、口縁部がやや分厚くなる。口縁端部の断面形状は丸みを帯びているものの三角形に近い。体部外面に指頭圧痕が残り、14 世紀末頃にあたる。50 は口径 12.6cm を測る浅めの瓦器椀で、外面は器面の摩滅により調整痕が確認できないが内面には比較的密なミガキが施される。体部は大きく開き、口縁部へやや屈曲して切り替わる。端部はシンプルに丸く仕上げられる。

以上、概ね樟葉型の瓦器椀が多く、14 世紀頃が中心年代となり、ところによりやや古い 12 世紀頃のものも含む。

陶磁器

51～53 はいずれも輸入白磁椀である。口縁端部が肥厚し、断面が丸みをもつ三角形を呈する玉縁をもつ。51 は口径 12.8cm、52 は 17.8cm、53 は 17.6cm を測る。いずれも平安時代末期～12 世紀頃のものであろう。

小結

中世の出土土器は、同時代の遺構が主に耕作の痕跡であるため、遺物の出土量は古墳時代と比べて少ない。その中でも、残存状況のよくない小破片が大半を占める。しかしながらそれでも出土した瓦器類や土師器の年代観から、概ね 12～15 世紀頃を中心に、この周辺で耕作がおこなわれていたことがわかる。上記で報告したものに加えて、平安時代～中世の須恵器や須恵質の土

表2 出土土器観察表 中世以降(1)

序号	登録 番号	出土地點	器種	種類	時代	口径(cm)	底径(cm)	脚高(cm)	調査			色調			出土 状況	備考	実測等高 番号	
									外面		内面	外面		内面	断面			
									ナデ	ミガキ	ナデ	ミガキ	ナデ	ミガキ	ナデ			
1	54	AB1 1面	楕	瓦器	中世	(11.2)	-	(2.4)	ナデ(皮)	ミガキ	-	灰白~暗灰	灰白~暗灰	灰白	直	良	47 -1	
2	53	C1 1面	楕	瓦器	13C~ -14C	(12.2)	-	(2.3)	ナデ	ミガキ	-	暗灰	暗灰	灰白	直	良	48 -4	
3	62	E3 1面上	楕	瓦器	13C~ -14C	(12.2)	-	(2.6)	ナデ・ミガキ 指印压痕	荒れ	-	灰~暗灰	灰~暗灰	深灰褐色	凹 凸	良	43 -	
4	55	C2 1面	楕	瓦器	12C~	(12.9)	-	(3.6)	ナデ・ミガキ 指印压痕	ミガキ	-	暗灰	暗灰	淡褐	直	良	45 -	
5	54	AB1 1面	楕	瓦器	14C~	(16.1)	-	(3.7)	ナデ	ミガキ	-	暗灰~灰褐	暗灰~灰褐	白灰	直	良	46 -8	
6	48	A1 2面	瓦質	瓦質	13C後~ -16C	-	(9.1)	(2.6)	ナデ	薄(?)	未調整	暗灰~浅黄	暗灰~浅黄	灰白~浅黄	凹 凸	良	39 -2	
7	58	C2 1面上	白磁	白磁	中世	(9.4)	-	(2.1)	施釉	施釉	-	白~灰白	白灰~乳褐	白褐	直	良	53 -6	
8	58	C2 1面上	小口土器	中世	(6.6)	-	(1.3)	ヨコナデ	ヨコナデ	-	に高い壇~標 に低い壇~標 に高い壇~標	に高い壇~標 に低い壇~標 に高い壇~標	直	良	18 -			
9	33	B1	小口	土器	中世	(7.2)	-	(1.7)	白線(?)	瓦	-	淡褐	淡褐	淡褐	凹 凸	良	17 -	
10	53	C1 1面	小口	土器	15C~	(7.9)	-	(1.4)	ヨコナデ 指印压痕	ヨコナデ	-	に高い壇	に高い壇	に高い壇	直	良	26 -	
11	60	B1	小口	土器	11C~ -12C	(9.6)	-	(0.2)	ヨコナデ 指印压痕	ヨコナデ	-	に高い壇	に高い壇	に高い壇	直	良	19 -	
12	54	AB1 1面	小口	土器	中世	(11.3)	-	(1.4)	ヨコナデ 指オサエ?	ヨコナデ	-	に高い壇~ に低い壇~ 汽黄	に高い壇~ に低い壇~ 汽黄	直	良	20 -		
13	64	A1 1面	瓦質	中世	(23.6) -24Z	(26.1)	-	(2.8)	ヨコナデ (スヌ)	ヨコナデ	-	浅黄	浅黄~灰白	浅黄~灰白	凹 凸	良	137 -5	
14	54	AB1 1面	羽墨	瓦質	中世	(27.3)	-	(2.8)	ヨコナデ (スヌ)	ナデ	-	浅黄~ 灰褐	浅黄~ 灰褐	浅黄~ 灰褐	直	良	107 -10	
15	170	C1 SD67	小口	土器	14C~ -15C	(6.9)	-	(1.2)	ヨコナデ 指印压痕	ヨコナデ	指印压痕	に高い壇	に高い壇	に高い壇	直	良	1 -3	
16	173	C1 SD69	小口	土器	11C~ -13C	(9.3)	-	(1.8)	ヨコナデ 指印压痕	ヨコナデ	指印压痕 (外:スヌ)	に高い壇~ に低い壇~ に高い壇~ に低い壇	に高い壇~ に低い壇~ に高い壇~ に低い壇	直	良	11 -		
17	307	D1 SD-57	小口	土器	中世	(6.6)	-	(1.3)	ヨコナデ 指オサエ?	ヨコナデ	指オサエ	に高い壇~ に低い壇~ 汽黄	に高い壇~ に低い壇~ 汽黄	直	良	29 -2		
18	257	D1 SD-16	杯	土器	15C~ -16C	(12.9)	-	(2.6)	ヨコナデ 指印压痕	ヨコナデ	-	白~ に高い壇~ に低い壇	白~ に高い壇~ に低い壇	浅黄	直	良	22 -1	
19	246	D1 2面	楕	瓦器	中世	(4.9)	-	(1.2)	ヨコナデ	瓦	點付高台	明褐	明褐	明褐	凹 凸	良	34 -	
20	258	D2 SD-12	楕	瓦器	12C~	(12.5)	-	(3.2)	ナデ	ミガキ	-	灰灰~暗灰	暗灰	直	良	51 -		
21	190	SA-250 P66	高柄	土器	中世	-	(18.4)	(1.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	に高い壇	に高い壇	暗褐~暗灰	直	良	30 -	
22	223	B1 2面上	小口	土器	14C~	(6.7)	-	(1.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	指オサエ	に高い壇~ に低い壇~ に高い壇~ に低い壇	に高い壇~ に低い壇~ に高い壇~ に低い壇	直	良	25 -		
23	228	HE -へそ	小口	土器	14C~	(6.7)	-	(1.30)	ヨコナデ(スヌ) 指オサエ?	瓦	-	に高い壇~ 指印	に高い壇	に高い壇	直	良	15 -2	
24	157	HE 灰色砂	小口	土器	中世	(7.1)	-	(1.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	に高い~明褐	に高い~明褐	直	良	9 -		
25	249	HE 2面上	小口	土器	中世	(7.4)	-	(1.6)	ヨコナデ(スヌ)	ヨコナデ(スヌ)	-	に高い壇~ 指印	に高い壇~ 指印	直	やや 良	21 -		
26	146	ED 2面上	小口	土器	中世	(8.4)	-	(0.4)	ヨコナデ	ヨコナデ	-	浅黄	浅黄	直	良	13 -		
27	246	DE1	小口	土器	中世	(8.8)	-	(0.4)	ヨコナデ 指オサエ?	ヨコナデ	-	に高い~明褐	明褐~ 白褐~ に高い~	直	良	8 -		
28	249	E2 2面上	瓦?	土器	中世	(10.4)	-	(0.8)	ヨコナデ(スヌ)	ヨコナデ	-	に高い壇~ 指印压痕	に高い壇~ 指印压痕	直	良	23 -		
29	257	E1 2面上	小口	土器	16C~ -17C	(16.4)	-	(0.8)	ヨコナデ(スヌ)	ヨコナデ	-	に高い壇	に高い壇	直	やや 良	27 -		
30	252	E3 2面上	小口	土器	中世	(16.5)	-	(1.3)	ヨコナデ	ヨコナデ	指オサエ	に高い壇~ 指印	に高い壇~ 指印	直	良	24 -		
31	121	IC 2面上	杯	土器	中世	(11.6)	-	(2.6)	ヨコナデ 指印压痕	ヨコナデ	-	暗褐~ に高い壇~ 指印	暗褐~ に高い壇~ 指印	直	良	10 -		
32	89	B1 SD-16	小口	土器	中世	(7.7)	-	(1.4)	ヨコナデ 指オサエ?	ヨコナデ	ヨコナデ	に高い壇~ に低い壇~ 汽黄	に高い壇~ に低い壇~ 汽黄(褐色)	直	良	14 -		
33	26	2A 機械	小口	土器	中世	(10.1)	-	(1.5)	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	に高い壇~ (今や解)	に高い壇~ (今や解)	直	やや 良	6 -		
34	133	C1 2面上	楕	白磁	中世	(17.6)	-	(4.8)	ナデ	施釉	-	淡オーリーブ	淡オーリーブ	淡灰	直	良	55 -1	
35	215	F2 SD-16	小口	土器	中世	(8.8)	-	(2.1)	ヨコナデ ヨコハラ	ヨコナデ	-	浅黄	浅黄	直	やや 良	21 -		
36	38	E1	楕	瓦器	中世	(10.5)	-	(2.8)	ヨコナデ 指印压痕	ヨコナデ	-	に高い壇	に高い壇	暗褐~ 灰褐	直	良	31 -3	
37	69	C1 1面	楕	瓦器	中世	(9.7)	-	(0.9)	ナデ 指印压痕	ナデ(口縁)	-	黑褐~赤褐	黑褐~赤褐	黑灰~灰褐	直	良	36 -	
38	66	A1 1面	楕	瓦器	中世	(10.5)	-	(2.8)	指印压痕	ナデ	ミガキ	-	黑灰~暗灰	黑灰~暗灰	淡灰褐	直	良	35 -
39	239	B1 2面上	楕	瓦器	中世	(10.8)	-	(0.7)	ミガキ	ナデ(口縁)	-	暗灰~やや 明るい暗灰	暗灰~やや 明るい暗灰	白灰	直	良	40 -	

※() 内数据は反転復元後の数据及び埋存高

表3 出土土器觀察表 中世以降（2）

番号	登錄 番号	出土地點	器種	時代	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調 整			色 製			胎土	焼成	実測写真 番号		
								外 面		内 面	底 部		外 面		内 面	断面		
								外 面	内 面	底 部	外 面	内 面	外 面	内 面	断面			
40	26	A2 篠原	碗	瓦器	120 ~130	(10.8)	—	(3.2)	ナゲ(荒)	ミガキ 糊文	—	灰褐~暗灰	暗灰	灰白	密 良	49	—	
41	47	B1 1面	碗	瓦器	120 ~130	(14.9)	—	(2.6)	ナゲ ミガキ	ナゲ ミガキ	—	暗灰	暗灰	淡灰	密 良	42	—	
42	43	C1 北側 溝上	碗	瓦器	中世	(16.5)	—	(2.9)	ナゲ 指削正板	荒れ	—	暗灰	灰~暗灰	淡灰褐	小砂 相	良 良	41	—
43	261	B1 2面	碗	瓦器	中世	—	(6.3)	(1.6)	荒れ	荒れ	荒れ	にぶい褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	密	32	—	
44	223	B1 2面下	碗	瓦器	120頃	—	(8.0)	(1.1)	ナゲ ミガキ	荒れ	貼付け萬古	明灰(光沢有)	灰	淡灰	密 良	52	—	
45	134	C3 2面下	釜	瓦質	中世	(28.5)	—	(2.4)	ナゲ つば掛け板	ナゲ	—	にぶい褐色	にぶい褐色~浅黄	にぶい褐色~浅黄	良	57	96-5	
46	245	B1 2面	小釜	瓦質	中世	(9.2)	—	(2.1)	ナゲ 指削正板	ミガキ	内:糊文 外:指削正板	灰~暗灰	暗灰	密 良	50	96-2	—	
47	15	A4 1面	小釜	瓦質	中世	(11.6)	—	(1.9)	ナゲ 指削正板	ミガキ	—	白褐~暗灰	白灰	密	小砂 相	27	—	
48	240	B2 2面下	碗	瓦器	中世	(11.7)	—	(1.9)	ナゲ ミガキ	ナゲ(口縁)	—	暗灰~淡褐	暗灰~淡褐	白灰~淡褐	密 良	29	—	
49	118	A1 SB43	小釜	瓦質	中世	(8.8)	—	(1.7)	ナゲ 指削正板	ナゲ(口縁)	—	暗灰~淡灰	暗灰~淡灰	白褐	密 良	36	—	
50	66	A1 1面	碗	瓦器	中世	(12.6)	—	(2.2)	ナゲ(荒)	ミガキ	—	暗灰~明灰褐	暗灰~明灰褐	淡灰褐	密 良	41	—	
51	220	B1 北側溝	小釜	土師器	中世	(11.9)	—	(1.3)	ヨコゲー 指削正板	ヨコナゲ	指削正板	淡灰~淡褐	淡灰~淡褐	淡灰~淡褐	密	小砂 相	3	—
52	238	B2 2面下	三線 網	白磁	平安	(12.8)	—	(2.0)	施釉	施釉	—	白オリーブ	白オリーブ	淡灰	密 良	56	—	
53	12	A5 1面	網	白磁	中世	(17.8)	—	(2.8)	ナゲ・施釉	施釉	—	白オリーブ	白オリーブ	白褐	密 良	54	94-2	

※ () 内数据は反転復元後の数据及び残存高

器、青磁片（写真 94-8・9）、体部に丸みをもつ両黒の黒色土器椀（写真 92-6）が出土した。上層では、唐津焼碗の底部片（写真 95-上段右）や陶器碗（写真 95-下段右）、18～19世紀の肥前焼染付碗（写真 95-下段左）なども出土し、近世に至る新しい時代まで継続して使用されていたことがわかる。また、掘立柱建物が存在したことや出土土器の内容からも、耕作とともに生活もこの周辺で営まれていたことがわかる。

さらに、機械掘削時に著しく摩滅した弥生土器の底部片（写真 95-上段左）出土しているが、これ以外に弥生時代の遺物は一切なく、残存状況からみてもどこか調査区外から運ばれてきた混入品であろう。

（註1） 白石太一郎 1969「いわゆる瓦器に関する2・3の問題」『古代学研究』第54号

中世土器研究会・編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』

橋本久和 1991「大阪北部の古代後期・中世土器様相」『高槻市文化財年報 昭和63・平成元年度』

第3節 その他の出土遺物について

本調査では、土器以外にも多様な出土遺物がみつかった。

下層の古墳時代では、谷から土器とともにたくさんの中製品が出土した。用途は明確にはわからないが、加工痕のあるものばかりである。第5章での出土状況図（図22）にあるように、1.5mを超えるような長い棒あるいは細長い板状のものがおく、谷の底近くから並んで出土する。1箇所については、2本の長い棒状木製品が、口縁を欠損するもののほぼ完形に近い處とともに出土した。人為的な廃棄のようにもみえるが、断定はできない。また、棒状のもの以外にも、加工された部材のような木製品が谷埋土の上層から出土した。

上層では土坑SK01の内部からは、多量の焼土塊が出土した。土坑内の土をとりあげて丁寧に確認をしたが、土器片などは一切含まれず、固形状のものはすべて焼土塊であった。塊の中には表面に簡状にカーブした凹みなどの人為的な形状をもつものも数点含まれていたが、いずれも破片で全体の形状やこの遺構の性質が推測できるようなものはなかった。

古銭は3点、出土した。1点は第I調査区第1遺構面から出土した。鋸に覆われて詳細は判明しない。残りの2点はともに第II調査区の北半で第I調査区との境界近く第2上遺構面で、表面の文字も観察できる比較的良好な状態で出土した。1点は1039年に始鑄の皇宋通宝、もう1点はそれほど文字が明瞭ではないがおそらく998年に始鑄の咸平元宝であろう。ともに北宋銭である。金属製のものは、他にも鉄釘の破片や鉄屑のような塊なども出土している。

また、軒丸瓦の破片も出土した。摩滅がすすみ、残存状況はよくないが、瓦当の模様は確認できる（写真98-6）。このほかにも中世以降の上層からは、用途不明の中製品が多く出土している。筒の片側がラッパ上にひろがった土管状の製品（写真96-1～3）は、一見瓦質のような色合いで光沢のある暗灰色を呈する。攪乱や側溝からの出土であり、時期を推定することはできず、用途もわからない。他には、複数の穿孔がある円盤状土製品（写真96-5）は現代耕土から出土した。

こちらも機械掘削時にとりあげたものであるため年代の特定ができないが、馬歯の小片も出土した。

混入品ではあるが、今回の調査でみつかった主だった遺構よりも古い年代のものには、前掲の弥生土器底部の摩耗した破片（写真95上段左）に加えて、第I調査区第1遺構面の遺構SX01からはサヌカイトの小片、第III調査区第2遺構面の遺構SK3-1からは石鐵の破片が出土している。

第7章　まとめ

今回の調査の結果、倉治遺跡には從来よく知られていた中世よりも、さらに遡る古墳時代中期の集落が存在したことがわかった。南に隣接する有池遺跡からは同時代の遺構・遺物がすでにみつかっており、この周辺は古墳時代中期、5世紀前半頃から比較的広範囲に集落が点在していたことが推測される。また、この調査でみつかった住居址からは、たくさんの韓式系土器も含まれる。北河内に渡來系集落が多いことはすでに知られるが、倉治遺跡もその例にもれず、渡來系集落が営まれていた。

ここでまとめにかえて、その古墳時代中期の集落の様子について、遺構配置の復原を試みて振り返ってみたい（図33）。5章で報告した、土坑SK2-6は谷1と同一の遺構であろう。微高地にあたる一部が後世に、おそらく中世の耕作に伴う整地によって削平され、検出状況では分断されているが、埋土の性格や出土遺物からみて継続していたと見てよいであろう。そうすると、これは竪穴住居のある微高地を弧を描いて囲むような谷となる（図33・赤破線）。この谷1は、第I調査区へも続き、おそらく第I調査区の南壁断面（図6）にみえる大型の溝に対応して、調査区の南へ抜ける。ただ、4・5章でも触れた通り、これは第I調査区では削平されており、ところどころ黒い埋土を一部要した浅い土坑状の遺構は検出されるものの、平面状で継続した遺構として確認することはできないため、図33の谷1（赤破線）も推定復原でしかない。

この谷1の年代については、竪穴住居と併行して存在していたが、遺構の継続年代は谷の方が長期にわたる。土坑SK2-6からは、竪穴住居1出土遺物（図24-2）と同一個体の長胴甕（図26-20）が出土するが、竪穴住居（図24・25）よりもやや新しい時期の土器をも含む。

また、谷1と交差するように、谷2（図33・青破線）が存在し、これは谷遺構の断面（図21-1・2）においても、少なくとも2つの溝状遺構が切り合うこととも矛盾しない。2つの内、おそらく南の微高地側が新しいものである。こちらは、第I調査区の北壁断面（図5-1）で確認できるように、調査区の北へ抜ける。こちらは谷1とは違って、特に第I調査区内においては目立った出土遺物がない。

全体的な時間の流れとしては、谷が原地形からある程度存在した可能性があり、微高地上に竪穴住居をつくって生活し、住居の廃絶時に谷1の住居近く、土坑SK2-6周辺に土器を廃棄したと考えることができる。

最後に、発掘調査に加えて本調査での成果として普及事業について報告する。今回の調査地が倉治小学校に隣接していたこともあり、普及事業の一環として、倉治小学校の6年生を対象に、平成21年11月30日午後、発掘調査現場の公開説明会をおこなった。当日は、子どもにわかりやすく古墳時代や遺跡の発掘調査についてわかってもらうための資料も用意した。

訪れた小学生には全員で調査区内へ入ってもらい、間近で掘削・実測途中の竪穴住居を見学できるように配慮した。また、真横で実測や遺構掘削の作業を進めていたため、実際の調査作業の

様子もみてもらうことができた。調査区内を一通り見学したあとは、竪穴住居を前に質問の時間を設けた（71頁上段）。自分の学校のすぐ近くに1500年以上も前に人が住んでいた様子が見つかったことに関心を示し、「ここに見つかるということは、この他にも近くにたくさん同じような遺跡があるということですか？」などと興味がひろがった様子の生徒もいた。その一方で発掘調査の費用や費用負担の問題など、大人顔負けの鋭い金銭的な質問に終始する生徒もいた。

その後は、調査区の脇で出土遺物を見学してもらった（71頁下段）。見学したばかりの竪穴住居やその他の遺構から出土した土器を対象にしたため、遺構と遺物がうまくリンクし、「あの家で使われていた土器」という事実に関心した様子で、ここでも活発な質疑応答があった。帰り際には、参加者全員が土器を間近で観察する機会を設けた。

これ以外にも地域の自治会の掲示板等には、随時発掘調査の進捗状況を掲示させてもらい、地元住民の方々にできるだけ多く、調査の成果を知ってもらえるように努めた。古くからの集落がある倉治地域の住民の方々は自らの歴史に関心が高いようで、地元パトロールの方々のように団体で訪れてくれるグループもあれば、随時ぱらぱらと通りがけに現場を除いて帰る人々も少なくなかった。

倉治は、古くからの集落であるという以上に、1500年以上もの長い間継続して人々が生活していたという歴史を知ってもらい、第2京阪国道の開通などにともない今後の急速な開発・市街化が予測されるうこの地での文化財保存へつながる第一歩として、この調査が地域の文化財への関心を高めてもらう一助となれば幸いです。

（小川）



図33 第I・II・III調査区第2遺構面 遺構配置・復原図



現地見学する倉治小学校生徒

付論 倉治遺跡微化石分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、古墳時代(6世紀)から中世にかけての倉治遺跡周辺の古植生に関する情報を得ることを目的として、調査区で検出された谷を充填する堆積物を対象に花粉分析・種実同定を実施する。

質 試料

分析試料は、谷埋土地点および谷南北セクション地点の2カ所の地点の谷を充填する堆積物断面から、層位的に塊状試料として採取された。各地点の試料の層相を以下に記載する。

谷埋土地点では4層準から試料が採取されている。試料の層相は、上位より、試料1が黒褐色を呈する細礫・粗粒砂混じり泥質細粒砂、試料2が黒色を呈する細礫・中～粗粒砂混じり腐植質泥質細粒砂、試料3が黒色を呈する細礫・中～粗粒砂混じり腐植質細粒砂質泥、試料4が灰色を呈する細礫・粗砂混じり泥質中～細粒砂からなり、試料4以外の層準では生物擾乱の痕跡が確認される。各試料層準の形成年代は、出土遺物から試料1が中世、試料2～4が古墳時代と推定されている。

谷南北セクション地点では谷充填堆積物最下部層準より1点の試料が採取されている。試料の層相は黒色を呈する植物遺体・細礫・粗粒砂混じり腐植質泥質中粒砂からなる。出土土器から6世紀に形成されたことが推定されている。

質 分析方法

(1) 花粉分析

試料約10gを秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物粒の溶解、アセトリシス(無水酢酸9、濃硫酸1の混合液)処理によるセルロースの分解、の順に物理・化学的処理を施す。処理後の残渣から一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作成し、同定を行う。結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の分布図として表示する。木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(2) 種実同定

試料200ccを水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗した。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実遺体をピンセットを用いて抽出した。種実遺体の同定は、現生標本と石川(1994)、中山ほか(2000)等との対照より実施し、個数を数えて一覧表で示した。種実以外の抽出物は一覧表の下部に一括してまとめ、プラスで表示した。分

析後は、種実化石を70%程度のエタノール溶液を入れた容器中に保存した。

3 結果

(1) 花粉分析

結果を表1、図1に示す。花粉・胞子化石は、5試料すべてから検出されたが、谷埋土の試料4では他の層準の試料に比べて化石の保存状態が悪く、検出量も少ない。花粉化石群集は、谷埋土地点の試料3と2の間の層準で変化する。

谷埋土地点試料3より下位層準および谷南北セクション試料1の花粉化石群集は木本花粉の占める割合が高く、その中では、モミ属、マツ属、スギ属が20～30%検出され、次いでツガ属、コナラ亜属、アカガシ亜属が10%前後検出される。草本類は、イネ科やヨモギ属が検出される。なお、谷埋土の試料4はシダ類胞子の割合が高いが、化石の保存状態が悪く、シダ類胞子が花粉に比較して風化に対する抵抗性が強いことから過大評価されていると判断される。

谷埋土地点の試料2・1では、草本花粉の占める割合が増加する。木本花粉組成は下位層準とほぼ同じであるが、スギ属がやや増加し、他の種類が相対的に減少するなどの多少の違いが確認される。草本花粉ではイネ科の増加が顕著である。イネ科の中にはイネ属とみられる形態の個体が少量ではあるが認められる。また、オモダカ属、サジオモダカ属、フサモ属、ホシクサ属など水生植物の花粉化石も少量産出する。

(3) 種実同定

結果を表2に示す。5試料を通じて、検出された分類群（種類）は、木本2分類群（キイチゴ属、ブドウ科）3個、草本32分類群（サジオモダカ属、オモダカ属、オモダカ科、ホッスモ近似種、ミズアオイ属、イボクサ、イネ、イネ科、アゼスゲ節、ヌカスゲ節近似種、ホタルイ属、テンツキ属、カヤツリグサ属、カヤツリグサ科（フトイ近似・2面・3稜・小型等）、イヌタデ近似種、タデ属（網目・平滑）、ナデシコ科、キジムシロ属—ヘビイチゴ属—オランダイイチゴ属、マメ科、エノキゲサ、ヒメミカンソウ、ミズオトギリ、スマレ属、チドメグサ属、イヌコウジュ近似種、イヌコウジュ属、イヌコウジュ属—シソ属、タカサプロウ）642個、計645個の種実遺体が検出されたほか、不明11個、木材、炭化材、シダ植物の葉、蘇苔類、菌核、昆虫類などが確認された。種実化石の検出個数は、谷埋土地点の試料1が182個、試料2が322個、試料3が44個、試料4が6個、谷南北セクション地点の試料1が91個と、試料によって含量密度にバラツキが認められる。分類群構成は、5試料とも草本主体の種類組成を示し、木本類は、谷埋土試料1から落葉低木のキイチゴ属1個、谷埋土試料2と谷南北セクション試料1から落葉藤本のブドウ科が各1個確認されるのみである。

栽培種は、谷南北セクション試料1からイネの穎が2個確認された。栽培種以外の草本は、サジオモダカ属、オモダカ属、オモダカ科、ホッスモ近似種、ミズアオイ属、イボクサ、ホタルイ属、ア

表4 花粉分析結果

種類(分類群)	調査地点・試料番号				
	谷埋土				谷南北 セクション
	1	2	3	4	
木本花粉					
マキ属	1	~	1	~	3
モミ属	46	43	53	25	64
ツガ属	25	25	17	15	20
トウヒ属	2	4	1	~	~
マツ属單維管束亞属	~	~	1	~	~
マツ属複維管束亞属	18	10	15	6	13
マツ属(不明)	37	29	39	25	34
コウヤマキ属	6	3	1	6	2
スギ属	76	52	37	8	46
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	13	6	1	~	1
ヤナギ属	~	1	1	~	1
クルミ属	1	1	~	~	~
タマシダ属—アサダ属	1	2	~	~	~
ハシバミ属	1	~	~	~	~
カバノキ属	3	2	~	~	2
ハンノキ属	2	3	2	~	1
ブナ属	1	5	~	~	2
コナラ属コナラ亞属	17	21	23	8	23
コナラ属アガシ亞属	17	12	9	4	11
シイ属	2	3	~	1	2
ニレ属—ケヤキ属	1	2	1	1	1
シキミ属	~	~	~	~	1
ツタ属	~	~	~	3	~
ウコギ科	1	~	~	~	~
ツツジ科	~	~	~	~	1
草本花粉					
ガマ属	~	~	1	1	1
サジオモダカ属	1	2	~	~	1
オモダカ属	1	~	~	~	~
イネ属	18	4	~	~	~
イネ科	113	67	9	2	8
カヤツリグサ科	52	26	6	~	~
ホシクサ属	1	1	~	~	~
サナトタデ館—ウナギツカミ節	1	1	~	~	~
アカザ科	3	~	~	~	1
アブラナ科	1	~	~	~	~
バラ科	1	~	~	~	~
フサキ属	1	~	~	~	~
セリ科	~	~	~	~	1
オミナエシ属	1	1	3	~	1
ホタルブクロ属—ツツガネニンジン属	~	1	~	~	~
ヨモギ属	6	15	28	2	21
キク亜科	1	1	~	~	3
タンポポ亜科	1	~	~	~	1
不明花粉	3	2	3	1	1
シダ類胞子					
他のシダ類胞子	46	32	58	240	29
合計					
木本花粉	271	224	202	102	228
草本花粉	202	119	47	5	38
不明花粉	3	2	3	1	1
シダ類胞子	46	32	58	240	29
総計(不明を除く)	519	375	307	347	295

ゼスゲ節、ヌカスゲ節近似種、テンツキ属、ミズオトギリ、タカサブロウなどの水湿地生植物主体の種類構成を示す。水湿地生植物は、谷埋土地点試料1と2で多産し、沈水植物のホッスモ近似種も認められる。

4 考察

(1) 植物化石群集のタフォノミーと植生の空間的分布

過去の植生復元は、堆積物中に取り込まれている花粉・胞子・種実・葉・木材・植物珪酸体といった、植物体の各部位の遺体の産状（種類や量）に基づいて検討されている。この際、各植物遺体群がどのような過程（堆積物中への取り込まれ方、堆積時後の分解作用の影響など）を経て形成されたものか、層相解析に基づいて評価する必要がある。このような各遺体群の形成にかかる全過程をタフォノミーと呼ぶ。このタフォノミーは部位によって異なっているため、同じ堆積物中の各部位の植物遺体群を複合的に調査することで、母植物の統一的把握、母植物の生育地の推定や植生の空間的分布状況の把握が可能となることが指摘されている（辻ほか、1986）。

今回の調査地点である谷内の堆積環境については、現地調査を実施していないため検討が不充分であるが、採取されている堆積物試料の層相から判断する限り、谷埋土試料4層準以外の層準では腐植の集積が進行する湿地や泥が沈降する滞水域となる時期を挟在していたことが推定される。また、谷埋土試料4層準は、腐植の集積が認められず、塊状を呈する淘汰の悪い堆積物からなることから、比較的短期間に形成された、重力性の土石流堆積物に比定される可能性がある。

谷充填堆植物の植物化石の産状をみると、谷埋土試料4層準では化石の保存状態が悪く、化石数も少なく、種類構成において水生植物の種類もほとんど認められないなど、他の層準とは明らかに異なる。

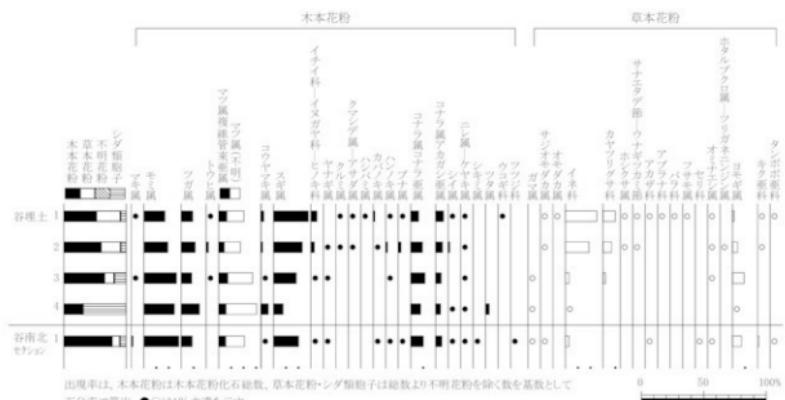


図 34 花粉化石群集の層位分布

表5 種実分析結果

分類群	部位	状態	調査地点・試料番号				
			管理土				谷南北セクション
			1	2	3	4	
木本							
キイチゴ属	核	破片	1				
ブドウ科	種子	破片		1			1
草本							
サジオモダカ属	果実	完形		6			
オモダカ属	果実	完形	1	7			
オモダカ科	種子	完形	21	45	1		
ホツカモ近似種	種子	完形	9	4			
ミズオオイ属	種子	完形	1				
イボクサ	種子	完形	4	19	1		
イネ	穎	破片					2
イネ科	果実	完形	2	3			
アゼスク館	果実	完形	1		6		9
ヌカシグロ近似種	果実	完形		5	2		6
		破片		1			6
ホタルイ属	果実	完形	62	32			
		破片	60	25			
テンツキ属	果実	完形	2	13	1		
		破片		2			
カヤツリグサ属	果実	完形	4	50	3		
カヤツリグサ科(フトイ近似)	果実	完形		2			
		破片		3			
カヤツリグサ科(2面)	果実	完形		40	4		3
		破片		3	1		
カヤツリグサ科(3棱)	果実	完形			8		15
		破片			3		10
カヤツリグサ科(小型)	果実	完形	1	5			
カヤツリグサ科	果実	完形	5	2			2
		破片	5				
イヌタデ近似種	果実	完形		2	1		
		破片			2		
タデ属(表面網目)	果実	完形		1			2
		破片		19			4
タデ属(表面平滑)	果実	破片		2			
ナデシコ科	種子	完形					2
キジムシロ属*	核	完形	2	3	1		8
		破片			3	1	2
マメ科	種子	完形					1
エノキギサ	種子	破片		1			
ヒバクサソウ	種子	完形					1
ミズオトウリ	種子	完形			3		1
スジ属	種子	破片		1			
チドリグサ属	果実	完形		5	1		1
		破片		2			
イヌクワズ属近似種	果実	完形		2			
イヌクワズ属	果実	完形	1		3	1	2
		破片		4		2	1
イヌクワズ属-シソ属	果実	完形	2				
タカラプロク	果実	完形	5				
		破片	5				
不明				11			
木材				*	*		*
炭化材			*	*	*	*	*
シダ植物の葉							*
蘇若類							*
菌核			*	*	*		*
貝虫類			*	*	*	*	*
分析量			200cc	200cc	200cc	200cc	200cc
			390.73g	359.52g	337.54g	381.22g	321.94g

注)*キジムシロ属:キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属

に異なる産状を示している。上記した本層準の成因と調和的な産状といえる。これに対して、腐植の集積が進行する谷埋土試料3～1および南北セクション試料1層準では植物化石が良好に産出する。これらの層準の堆積環境は掃流による堆積物の運搬・堆積があつたものの、湿地や滞水域となる時期を挟在していたと推定されることから、堆積物中の植物化石群集には集水域の広い範囲より運搬・堆積したものと、調査地点近辺の谷沿いないし谷内に生育していた植生に由来するものが含まれていると判断される。

腐植の集積が進行している層準の植物化石群集をみると、花粉化石群集では木本由来の花粉が多産するが、種実化石群集では木本由来の種実がほとんど産出せず、両者で木本類の産状において明瞭な違いが確認される。これは両化石群集のタフォノミーの違いに起因する。上記の堆積環境を踏まえると、花粉に比較して大きさの大きい種実遺体は主に谷内や谷近辺の植生に由来する可能性が高く、大きさの小さい花粉は距離的に離れた場所からの運搬堆積や遠方より飛来したもののが堆積物中に取り込まれており、反映している植生の範囲が異なっていることに起因すると判断される。多産する木本花粉の多くが風媒性でかつ花粉生産量の多い種類からなることからも示唆される。一方、草本植物由来の化石の産状は、両化石群集で概ね同調的な産状を示しており、同様な領域の植生を反映していることがうかがえる。

以上のことから、当時の植生の空間的分布状況を推定すると、調査地点の谷内やその近辺は主に草本植物を主体とした植生が存在し、木本植物は後背山地など調査地点より距離的に離れた場所に生育していたことが推定される。

(2) 古植生

ここでは、上記した植生の空間的状況に基づいて、古墳時代～中世にかけての調査地点から後背山地にかけての植生変遷について検討する。

谷埋土地点試料3および南北セクション試料1が形成された古墳時代（6世紀頃）には、後背の山地斜面などには、モミ属、ツガ属、スギ属、マツ属複雜管束亜属などの温帶性針葉樹、落葉広葉樹のナラ類などの落葉広葉樹、アカガシ亜属などの常緑広葉樹が生育していたことが推定される。各種類の生態性をみると、温帶性針葉樹の種類は斜面崩壊地や地滑りなどにより鉱質土壤が露出する擾乱地が生育適地である（中静, 2004）。ナラ類は萌芽林を作る種類が多く、再生能力に優れていることから、洪水や侵食といった植生擾乱が及ぶ場所でも林分を形成することが可能な種を含む。マツ属は、成長が早く瘦地でも育つことから、伐採地などに先駆的に二次林を形成する。このような木本類の生態性を踏まえると、調査地点後背の山地斜面などには、二次林的性格の強い林分が成立していたことが推定される。

一方、調査地点である谷内や谷近辺の植生は草地であったと推定される。谷埋土地点の試料3層準と南北セクション試料1層準の草本類の種類構成をみると、花粉化石では荒れ地に多いヨモギ属花粉が比較的多産している。種実化石ではオモダカ科・アゼスゲ節・ヌカスゲ節、ホタルイ属、ミズオトギリ・チドメ草などの水湿地や湿った場所に生育する種を含む種類が主体をなし、日当

たりの良い場所に生育するイヌコウジュ属やツル性木本であるブドウ科などがわずかに産出している。このうち、水湿地性の植物は当時の谷内を中心に分布していたものと考えられ、河岸はヨモギ属が生育する開けた荒れ地のような場所であったことが推定される。また栽培種のイネの穎の破片が産出しており、当時の栽培種として存在したことが推定される。

このような植生は、谷埋土試料2層準形成期に多少変化する。本時期には草本由来の化石が増加する。増加する草本類をみると、花粉化石群集ではイネ科の増加が顕著であり、その中には低率ではあるが栽培種のイネ属花粉化石が認められるようになる。また、水生植物の花粉化石も増加し、種類構成も増加する。種実化石群集でもサジオモダカ属、オモダカ属、ホッスモ、ミズアオイ属、イボクサ、タカサプロウ、ホタルイ属、スゲ類、テンツキ属、カヤツリグサ属、ミズオトギリなど、下位層準に比較して水生植物ならび水生植物を含む種類の構成が多様となり、タデ類、ナデシコ科、エノキゲサ、スマレ属、チドメグサ属、イヌコウジュ属など、人里など開けた場所に生育する種類も多く確認されるようになる。このように谷埋土試料2層準形成期には、草本植物の種類構成が多様となり、草地の領域が拡大したことが推定される。この原因としては、栽培種のイネ属花粉が確認されることや、増加するタカサプロウなどの水生植物の多くがいわゆる水田雑草であること、人里植物の種類が田畠の雑草としても一般的であることなどから、谷沿いで耕作地開発など人間活動が活発化した可能性が考えられる。本時期の後背地の林分は、前時期と同様な植物相であったとみられるが、草地の拡大などに伴い林分自体は縮小している可能性がある。

本遺跡が位置する天の川流域では、私部南遺跡、上私部遺跡、有池遺跡などの考古遺跡において古植物学的調査成果が多数蓄積されてきている(パリノ, 2007・辻ほか, 2007a・b)。これらの調査成果をみると、本地域の植生は弥生時代後期～古墳時代にかけて変化し、周辺山地において温帯性針葉樹や落葉広葉樹の種類が分布を拡げたことが推定されている。この植生変化に伴い、土砂流出状況も変化し、上私部遺跡では古墳時代以降に土砂流出量が増加し、耕作地が拡大し、12～13世紀頃になると、アカガシ亜属などの常緑広葉樹や温帯針葉樹など林分が減少し、林分もマツ属の卓越する林分へ変化する(辻ほか, 2007a)。また、本遺跡の上流側に位置する津田遺跡では、中世以降に山地斜面の植生破壊と同調するように土砂流出量が増大することも確認されている(パリノ, 2008)。これらのことから、本遺跡周辺では古墳時代以降に植生破壊が顕著となり、流出土砂量が増大し、12～13世紀以降には近辺の山地斜面の荒廃が進行し、はげ山に変化する領域が拡大したことが推定される(辻本・辻, 2008)。このような古墳時代以降の植生変化は、自然擾乱と人為的擾乱の双方の影響によって形成されたことが推定され、今回の調査結果もこれを追従する成果となっている。

引用文献

- 石川 茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑,石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- 中山 至大・井之口希秀・南谷 忠志,2000,日本植物種子図鑑,東北大学出版会,642p.
- 中静 透,2004,日本の森林 / 多様性の生物学シリーズ① 森のスケッチ,東海大学出版会,236p.
- パリノ・サーヴェイ(株),2007,第1節 私部南遺跡の放射性炭素年代測定・植物化石分析,「(財)大阪府文化財センター調査報告書 第154集 私部南遺跡Ⅰ 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,(財)大阪府文化財センター,158-180.
- パリノ・サーヴェイ(株),2008,付章第1節 44 土坑・1区間析谷理土の自然科学分析概要,「(財)大阪府文化財センター調査報告書 第175集 枚方市 津田遺跡 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,(財)大阪府文化財センター,91-98.
- 辻 誠一郎,2000,第8章生態系の復元,考古学と植物学,辻誠一郎編,同成社,215-225.
- 辻 康男・辻本裕也・大嶋秀明・高橋 敦・齊藤紀行・伊藤良永・馬場健司,2007a,第1節 上私部遺跡の古環境解析,「(財)大阪府文化財センター調査報告書 第165集 交野市 上私 部遺跡Ⅱ 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,(財)大阪府文化財センター,174-204.
- 辻 康男・田中義文・矢作健二・辻本裕也・伊藤良永・馬場健司,2007b,有池遺跡の自然・科学・分析,「(財)大阪府文化財センター調査報告書 第152集 交野市 有池遺跡Ⅰ 一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,(財)大阪府文化財センター,637-666.
- 辻本 裕也・辻 康男,2008,生駒山北部の古墳時代以降の花粉化石群集の特徴と植生変遷,日本花粉学会第49回大会講演要旨集,C-129.

写真図版



1. 調査地周辺と第2京阪国道（西から）



2. 調査地から有池遺跡をのぞむ（北西から）



3. 調査地遠景（南西から）



4. 第I調査区 北壁断面 (南西から)



5. 第I調査区 北壁断面接写 (南から)



6. 第I調査区 北壁断面 溝接写 (南から)



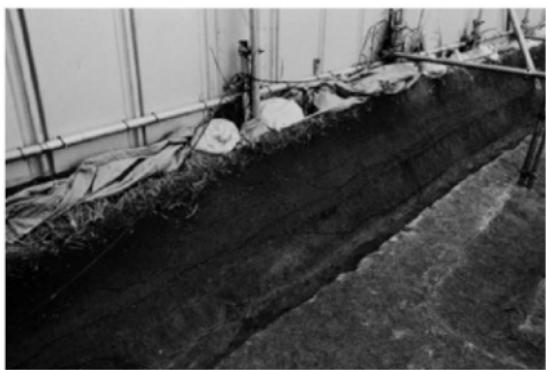
7. 第II調査区 北壁断面 (南西から)



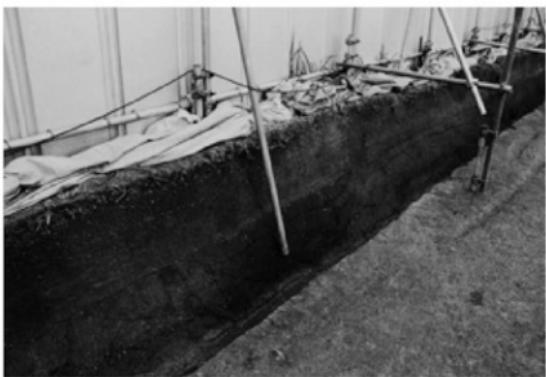
8. 第II調査区 北壁断面 (南西から)



9. 第II調査区 西壁断面 (南東から)



10. 第I調査区 南壁断面 (北東から)



11. 第I調査区 南壁断面 (北東から)



12. 第III調査区 南壁断面 (北東から)



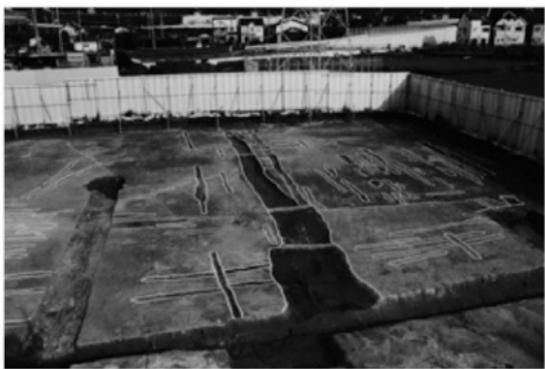
13. 第I調査区 第1遺構面 (南西から)



14. 第I調査区北半 第1遺構面 (西から)



15. 第I調査区南半 第1遺構面 (北西から) 奥にL字区画溝SD54



16. 第1調査区南半 第1遺構面 (西から) 手前右が淡灰褐色砂の区画



17. 第1調査区 第1遺構面 東西溝SD42 断面 (西から)



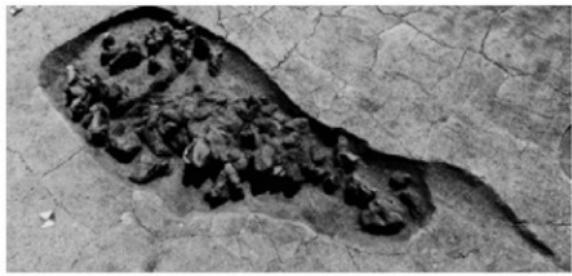
18. 第1調査区 第2遺構面 全景 (西から)



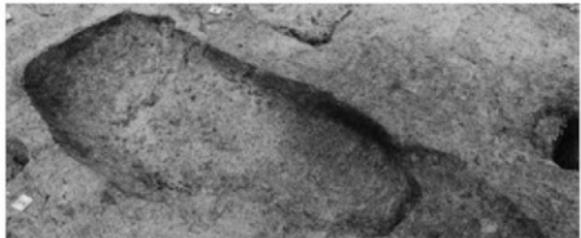
19. 第I調査区 第2遺構面 土坑SK01 掘削状況（北西から）



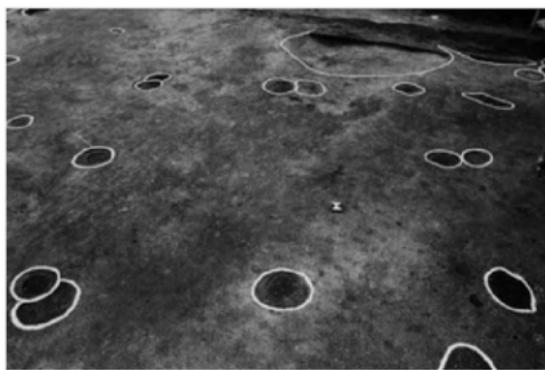
20. 第I調査区 第2遺構面 土坑SK01 遺構断面（北西から）



21. 第I調査区 第2遺構面 土坑SK01 焼土塊検出状況（北西から）



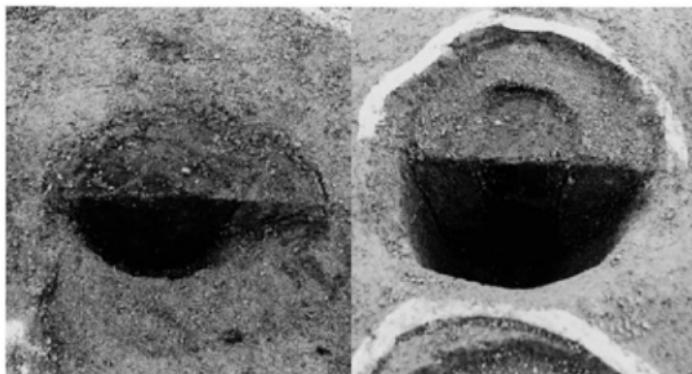
22. 第I調査区 第2遺構面 土坑SK01 完掘状況（北西から）



23. 第1調査区 第2遺構面南東隅 掘立柱建物1 検出状況（西から）



24. 第1調査区 第2遺構面南東隅 掘立柱建物1 掘削状況（西から）



25. 26. 第1調査区 第2遺構面南東隅 掘立柱建物1 ピット断面



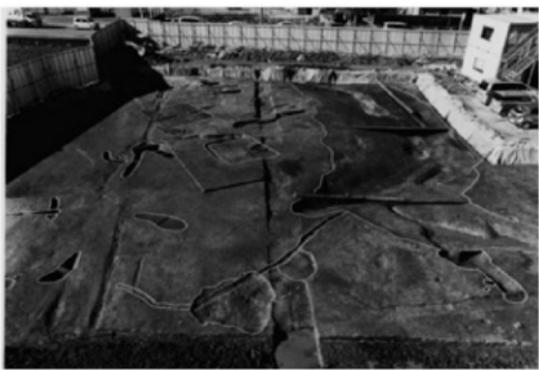
27. 第II調査区 第2上遺構面（東から）



28. 第II調査区 第2上遺構面北半（南東から）



29. 第II調査区南半 第2上遺構面（東から）



30. 第II調査区 第2遺構面 (東から)



31. 第II調査区 第2遺構面北半 (南東から)



32. 第II調査区 第2遺構面 (東から) 竪穴住居2棟と谷



33. 第II調査区 第2遺構面 谷(南東から)



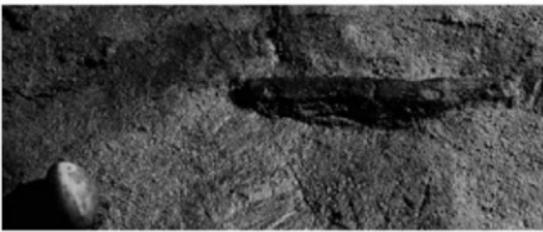
34. 第II調査区 第2遺構面 谷南北断面 (北西から)



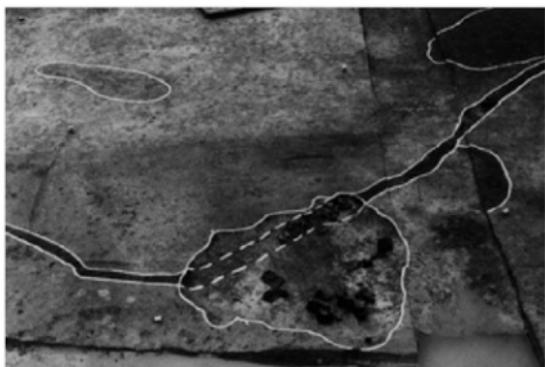
35. 第II調査区 第2遺構面
谷出土木製品1 (西から)



36. 第II調査区 第2遺構面
谷出土木製品2 出土状況 (南から)



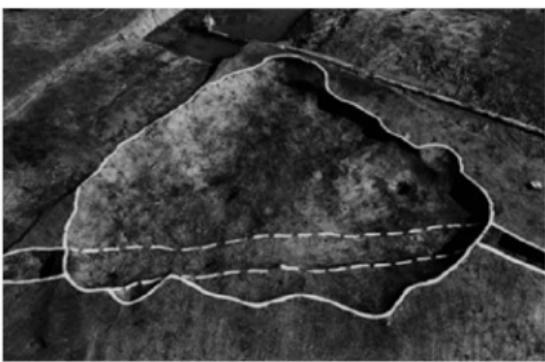
37. 第II調査区 第2遺構面 谷出土木製品と縄



38. 第II調査区 第2遺構面 土坑SK2-6 (東から) 土器出土状況



39. 第II調査区 第2遺構面 土坑SK2-6 (南西から)



40. 第II調査区 第2遺構面 土坑SK2-6 (東から) 完掘状況



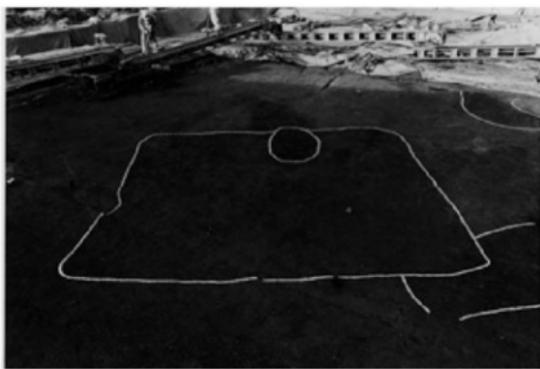
41. 第II調査区 第2遺構面 土坑SK2-6 土器出土状況



42. 第II調査区 第2遺構面 土坑SK2-6 土器出土状況



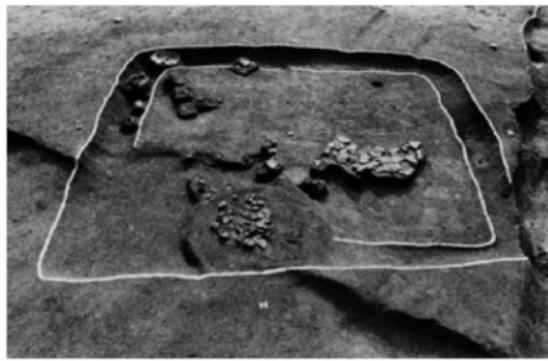
43. 第II調査区 第2遺構面 土坑SK2-6 土器出土状況



44. 第II調査区 第2遺構面 竪穴住居1（南から）検出状況



45. 第II調査区 第2遺構面 竪穴住居1（南西から）土器出土状況



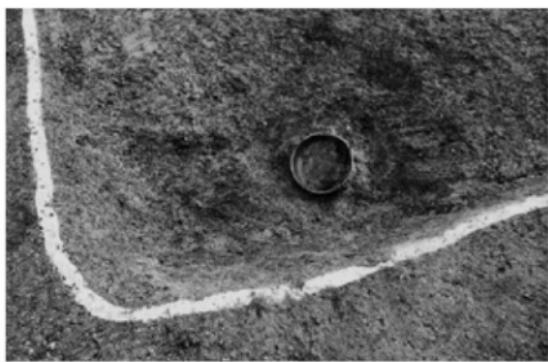
46. 第II調査区 第2遺構面 竪穴住居1（北から）土器・窓出土状況



47. 第II調査区 第2遺構面 竪穴住居1内土器出土状況 図23-2



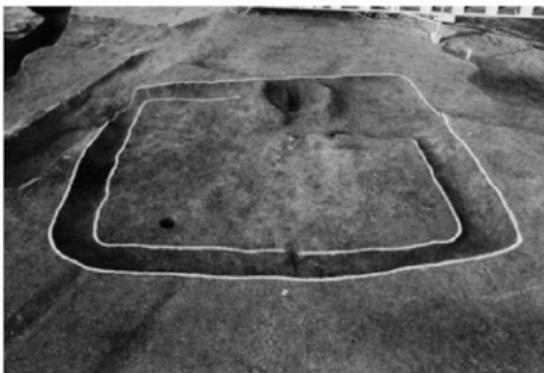
48. 第II調査区 第2遺構面 竪穴住居1内土器出土状況 図23-1・7・8



49. 第II調査区 第2遺構面 竪穴住居1内土器出土状況 図23-3



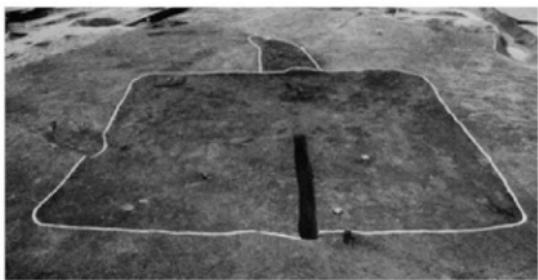
50. 第II調査区 第2遺構面 竪穴住居1（南西から） 挖削状況



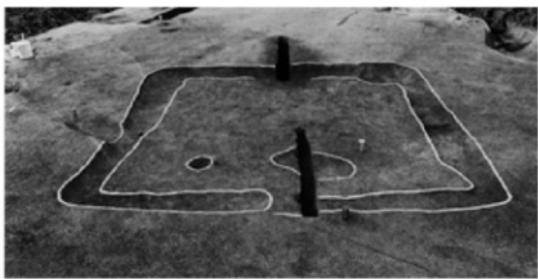
51. 第II調査区 第2遺構面 竪穴住居1（南から） 貼床面



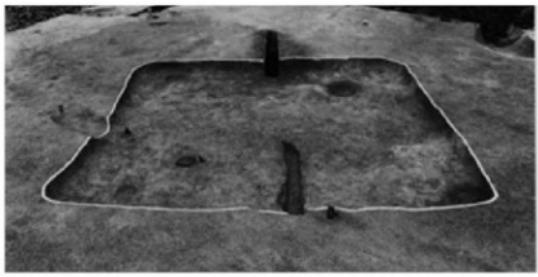
52. 第II調査区 第2遺構面 竪穴住居1（南から） 完掘状況



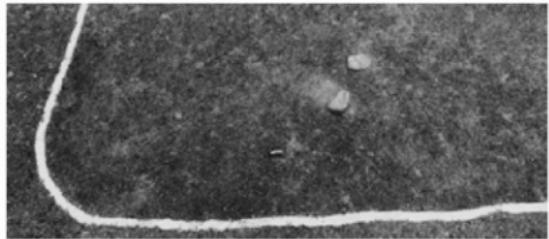
53. 第II調査区 第2遺構面 竪穴住居2 (南から) 検出状況



54. 第II調査区 第2遺構面 竪穴住居2 (南から) 貼床面状況



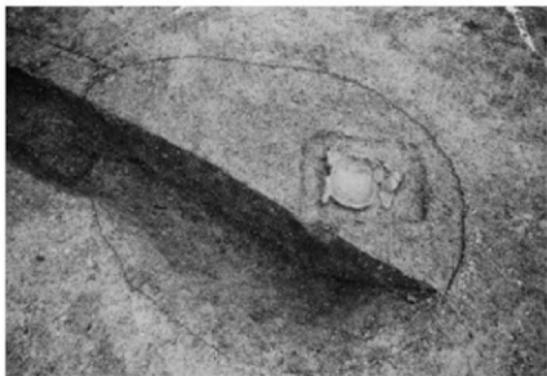
55. 第II調査区 第2遺構面 竪穴住居2 (南から) 完掘状況



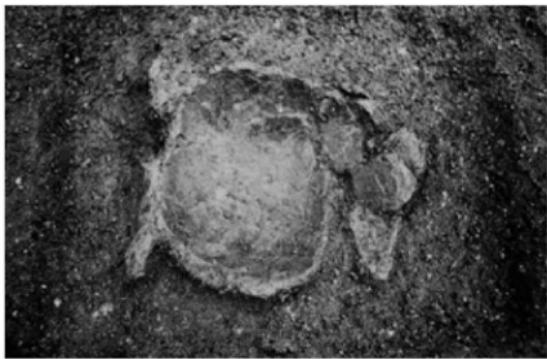
56. 第II調査区 第2遺構面 竪穴住居2 (南から) 製塙土器出土状況



57. 第III調査区 第2遺構面 谷（北から）



58. 第III調査区 第2遺構面 土坑SK3-3検出状況（南から）



59. 第III調査区 第2遺構面 土坑SK3-3内土器出土状況（南から）



60
竪穴住居 1



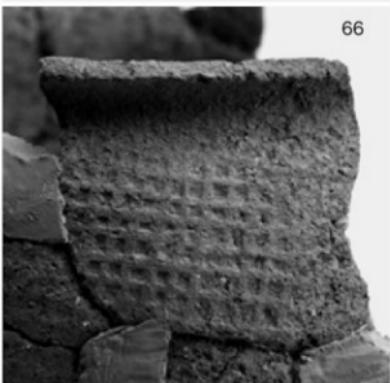
61



62



65



66



63



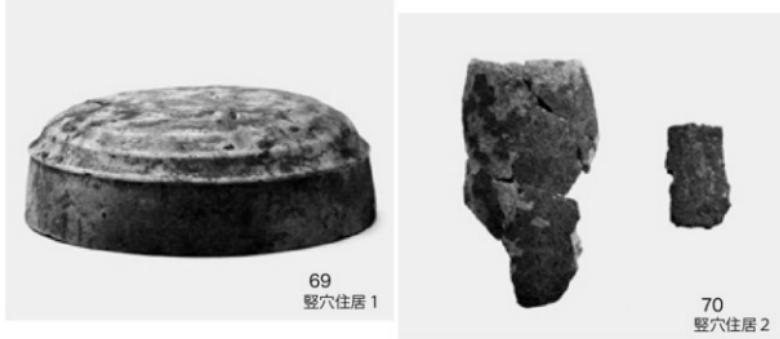
64



67



68
竪穴住居 1

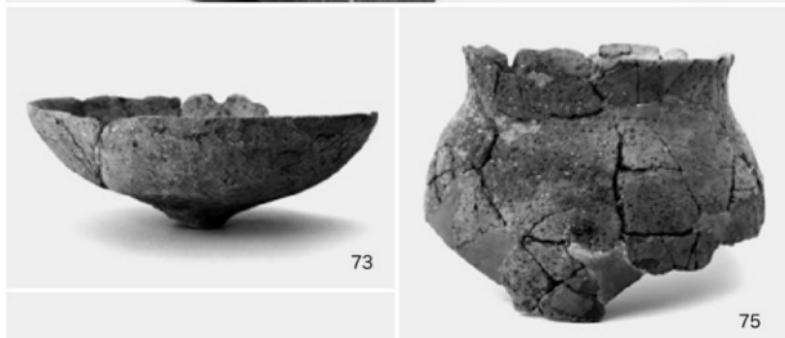


69
竪穴住居 1

70
竪穴住居 2



71
竪穴住居 2





77



78



79



80

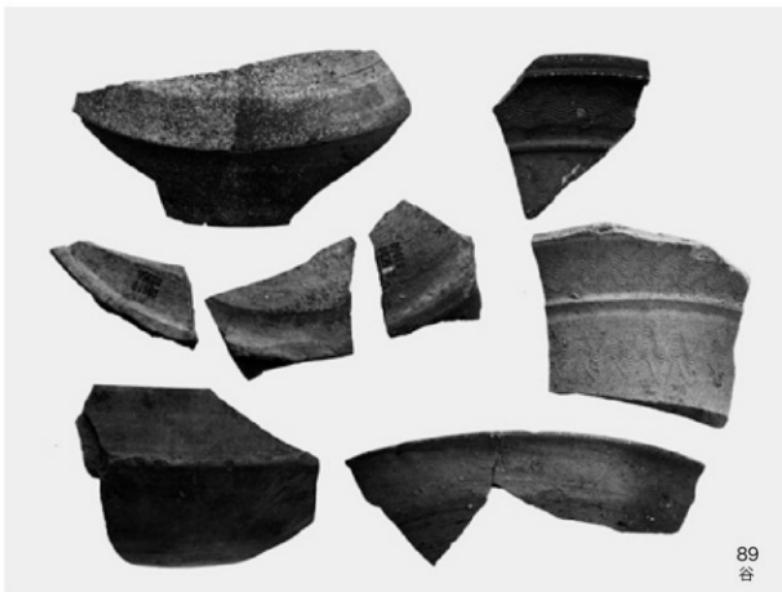


81
土坑 SK 2- 6

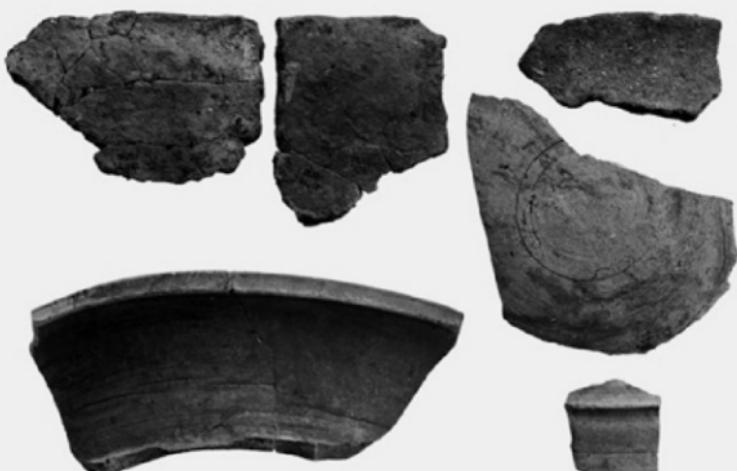




88
谷



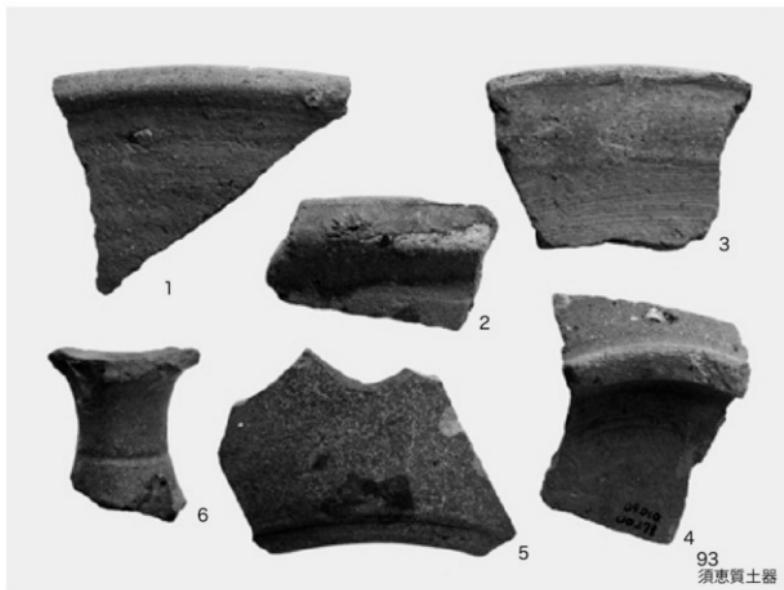
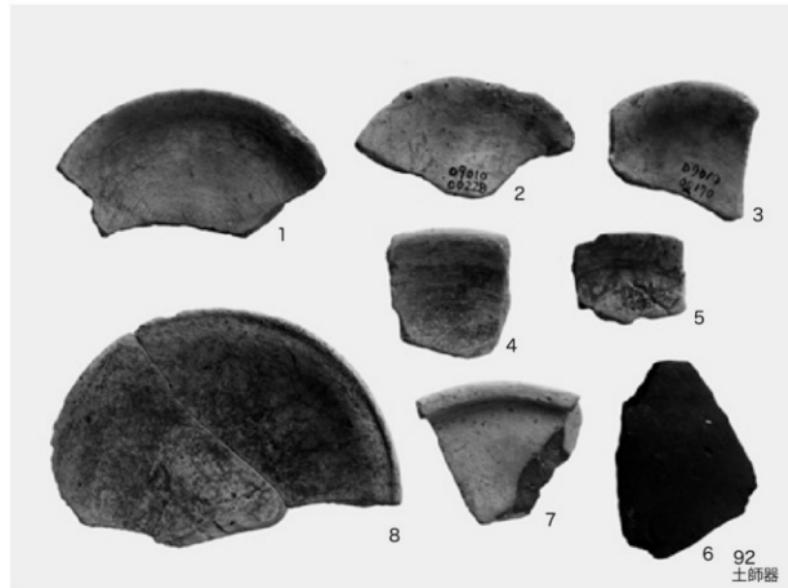
89
谷

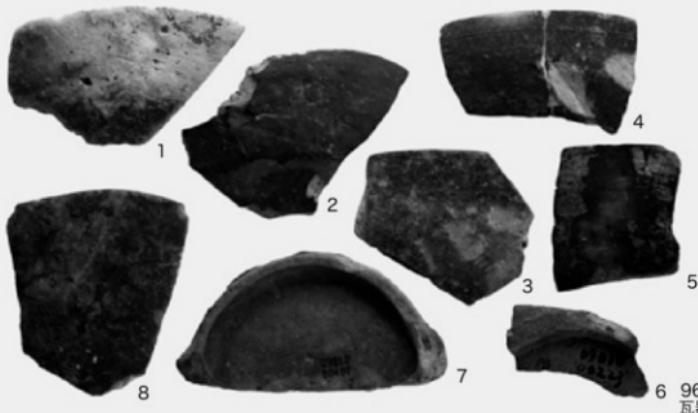


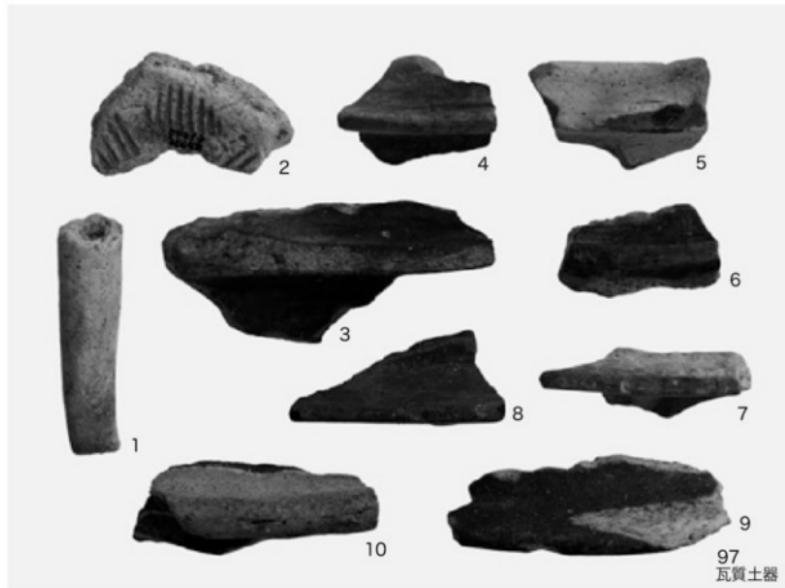
90
第2遺構面



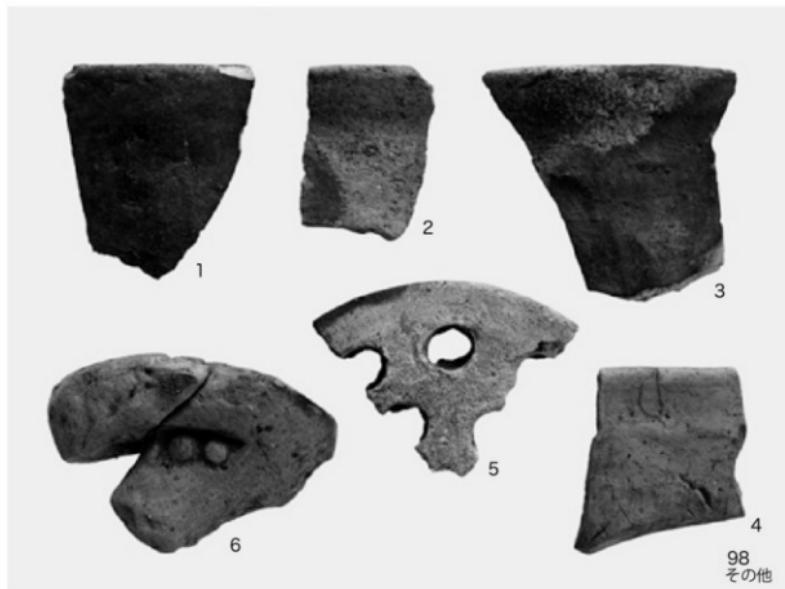
91
第2遺構面



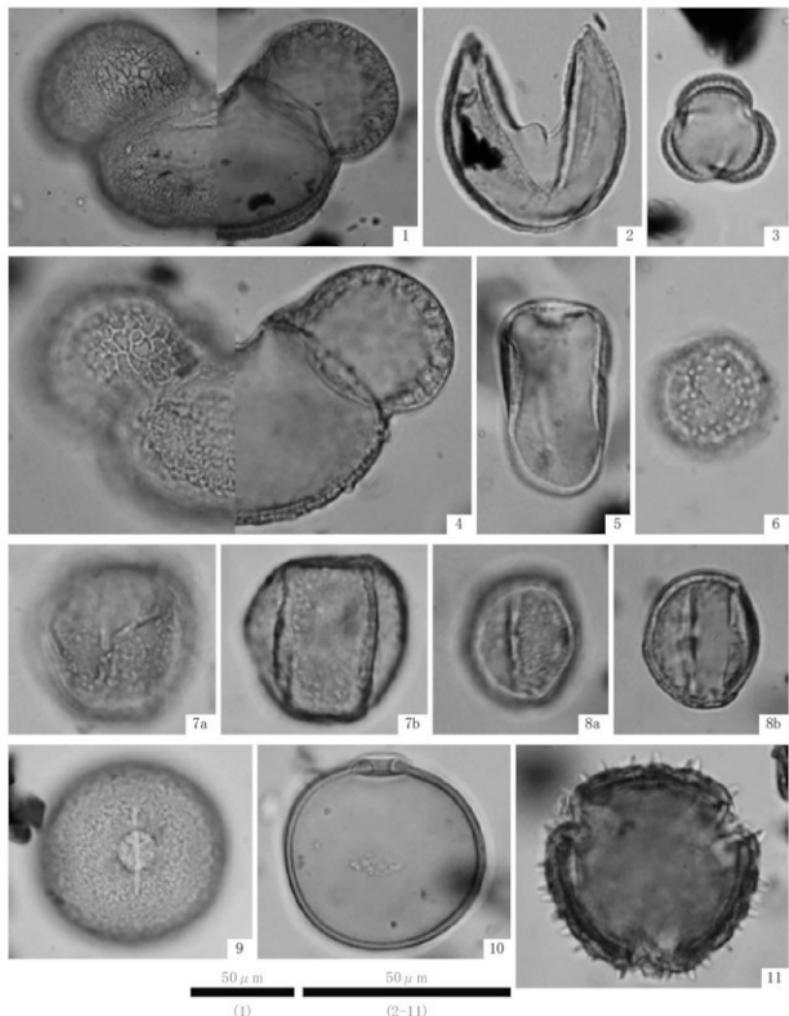




瓦質土器



その他



1. モミ属(谷埋土;1)
 3. ヨモギ属(谷埋土;1)
 5. カヤツリグサ科(谷埋土;1)
 7. コナラ亜属(谷埋土;1)
 9. ブナ属(谷埋土;1)
 11. オミナエシ属(谷埋土;1)

2. スギ属(谷埋土;1)
 4. マツ属(谷埋土;1)
 6. オモダカ属(谷埋土;1)
 8. アカガシ亜属(谷埋土;1)
 10. イネ属(谷埋土;1)

(1)

(2-11)

50 μm

50 μm



- 1 , キイチゴ属 桔(谷埋土;1)
 2 , ブドウ科 種子(土器出土層準6世紀;谷南北セクション1)
 3 , サジオモダカ属 果実(谷埋土;2)
 4 , オモダカ属 果実(谷埋土;1)
 5 , ホッスモ近似種 種子(谷埋土;1)
 6 , ミズオアイ属 種子(谷埋土;1)
 7 , イボクサ 種子(谷埋土;2)
 8 , イネ 頸土器出土層準6世紀;谷南北セクション1)
 9 , イネ科 果実(谷埋土;2)
 10 , アゼグサ節 果実(土器出土層準6世紀;谷南北セクション1)
 11 , クマスゲ節近似 果実(土器出土層準6世紀;谷南北セクション1)
 12 , ホタルイ属 果実(谷埋土;2)
 13 , テンツキ属 果実(谷埋土;2)
 14 , カヤツリグサ属 果実(谷埋土;2)
 15 , カヤツリグサ科(トイ近似) 果実(谷埋土;2)
 16 , カヤツリグサ科(3種) 果実(土器出土層準6世紀;谷南北セクション1)
 17 , カヤツリグサ科(小型) 果実(谷埋土;2)
 18 , イヌタデ近似種 果実(谷埋土;2)
 19 , タデ属 果実(土器出土層準6世紀;谷南北セクション1)
 20 , ナデシコ科 種子(土器出土層準6世紀;谷南北セクション1)
 21 , キジムシロ属—ヘビイチゴ属—オランダイチゴ属 桔(土器出土層準6世紀;谷南北セクション1)
 22 , イヌ科 種子(土器出土層準6世紀;谷南北セクション1)
 23 , エノキサ 種子(谷埋土;2)
 24 , ヒミカソウ 属 果实(谷埋土;2)
 25 , ミズオトギリ 種子(谷埋土;3)
 26 , スミレ属 種子(谷埋土;2)
 27 , チドメグサ属 果实(谷埋土;2)
 28 , イヌコウジュ近似種 果实(谷埋土;2)
 29 , イヌコウジュ属—シソ属 果实(谷埋土;2)
 30 , タカサゴロウ 果实(谷埋土;2)

報告書抄録

ふりがな	くらじいせき						
書名	倉治遺跡						
副書名	仮称枚方第二警察署庁舎建設工事に伴う調査						
巻次							
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	2010-11						
編著者名	小川裕見子・森真奈美						
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課						
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL.06-6941-0351						
発行年月日	2010年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
くらじ 倉治	かたのくらじ 交野市倉治	27230	14	34°47'25"	131°41'37"	2009年6月30日 ～ 2009年12月26日	3500m ² 仮称枚方第二 警察署庁舎建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
倉治	集落	古墳時代	堅穴住居、谷、他	土器・木製品	調査区西半に軟質韓式系土器を伴う堅穴住居址2棟。多量の須恵器が出土した谷。
		中世	掘立柱建物、溝、ピット、土坑	土師器、須恵器、瓦器他	調査区南東隅で掘立柱建物1棟。耕作の痕跡の区画溝と躰溝群、及び土坑。
		近世	溝、ピット、土坑	陶磁器、他	耕作の痕跡の区画溝と躰溝群、及び土坑。
要旨	これまでの調査から知られていたとおり、中世の耕作痕及び掘立柱建物の検出に加えて、さらに韓式系土器を伴う古墳時代中期の堅穴住居と谷が見つかった。				

大阪府埋蔵文化財調査報告 2010-11

倉治遺跡

—仮称枚方第二警察署庁舎建設に伴う発掘調査—

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06-6941-0351 (代表)

発行日 平成23年3月31日

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

大阪市東成区深江南2丁目6番8号

Kuraji Site

March, 2011

Osaka Prefectural Board of Education